「大清水土地区画整理事業」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

金　屋　遺　跡

1989.3

岐阜県可児市教育委員会

序　　文

可児市における、中世から近世にかけての産業としてまず挙げられるものは、窯業であります。

しかしながら、もう一つの産業として、鋳物鋳造が挙げられます。現在の可児市今渡地内には、金屋という地名があり、ここに鋳物師と呼ばれる鍛冶職人の集団が住んで、梵鐘（ぼんしょう）、鰐口（わにぐち）などの製品を製作していたようで、金屋の鋳物師が作ったことを示す銘が入った梵鐘、鰐口が残っていたり、記録として残っていたりします。

この度、今渡地内で「大清水土地区画整理事業」が行なわれることになり、この事業区域内に、金屋の鋳物師の住居跡、工房跡と考えられる金屋遺跡が含まれることになりました。関係者と現状保存について協議を重ねましたが、どうしても保存することは不可能となり、事前に発掘調査を行なって記録に残すことになりました。

調査の結果、鋳物師が生活していた住居や工房の跡、使用していた碗・皿などの食器類を始めとする日用品が数多く発掘され、生活の様子が明らかになりました。貴重な遺跡が消えていく中で、唯一の救いということができます。

この成果が、中世から近世にかけての鋳物師職人、ひいては、この時代の生活文化史の研究に、少しでもお役に立てば幸いに存じます。

最後になりましたが、現場作業に携わっていただいた作業員の皆様方始め、ご協力をいただいた関係者の方々に感謝の意を表します。

平成元年３月

可児市教育委員会

教育長　工　藤　新　二

例　　言

1. 本報告書は、岐阜県可児市今渡字住吉浦地内で、「大清水土地区画整理事業」に伴い、可児市教育委員会が、大清水土地区画整理組合より委託を受けて実施した、金屋遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査の主体は、可児市教育委員会であり、調査体制は、次のとおりである。

団　　長	可児市教育長	工藤　新二	
調査指導	岐阜県教育委員会文化課	小川　敏雄（現岐阜県立加納高等学校教諭）	
		青木　　久	
調査担当者	市教委社会教育課	川合　　俊	
		吉田　正人	
調　査　員	（財）豊蔵資料館学芸員	斉藤　基生	
作　業　員	平田　祐二	吉田　賢二	畑　健一郎
	渡辺　文夫	野々川　ふさ	水野　孝司
	高木　なか	大平　よ志子	近藤　行雄
	長谷川　静男	日比野　つる枝	佐橋　秋夫
	田牧　慎次	林　　カズミ	門原　英明
	山本　　實	大平　武俊	三品　克二
	山本　文子	沢野　高夫	
整理作業員	池田　成子	田中　すみ	堀田　直江
	小木曽　江里子	加藤　基弥	田口　洋子
	水野　　修		
事　務　局	市教委社会教育課		
課　長	奥村　千郎	課長補佐	浅野　　満（６２年度）
係　長	奥村　　正（６２年度）	伊藤　　寿（６３年度）	
	藤井　茂木	各務　洋子	金子　時子
	大沢　勇雄（６２年度）	宮地　直木（６３年度）	横田　郁子
市文化財	奥谷　一勝	平田　録郎	統木　　正
審議会委員	林　　則夫	梶川　正善	金子　郁朗
	水田　陽造	丸茂　兼一	大久保　嘉和
	加藤　　迪		

3. 本発掘調査及び、整理作業、並びに報告書刊行に要した経費は、総計4,287,000円（６２年

度3,837,000円　63年度450,000円）であり、全額原因者である大清水土地区画整理組合からの委託料でまかなった。

4. 本報告書掲載資料のすべては、可児市教育委員会において、保管する。

5. 本書の執筆及び、編集は、担当者である吉田が行ない、遺物の実測、トレース、図面整理、写真撮影は、吉田の他、整理作業員が行なった。

6. 本調査及び、本書執筆に際しては、次の方の協力及び、御教示をいただいた。記して感謝する。

大清水土地区画整理組合　可児市区画整理課　坂下町教育委員会
多治見市教育委員会　田口　昭二　若尾　正成
御嵩町教育委員会　若尾　要司
可児市役所　亀谷　泰隆（土田連絡所長）　長瀬　治義（福祉課）
今井　静夫　加藤　基弥　（敬称略）

凡　例

1. 方位は、磁北である。

2. 遺構の長さ、幅等の計測値については、すべて水平若しくは垂直距離である。

3. グリッド番号は、北に向かって左上の杭の番号をもって呼称する。

4. 挿図、図版の遺物の番号は、本文中の番号と同じである。又、土坑一覧表中、番号がとんでいるのは、途中ピットに変更し、欠番としたものである。

目　次

序文
例言・凡例
目次、挿図目次、図版目次
Ⅰ　発掘調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　金屋遺跡の立地と環境 …… 2
Ⅲ　金屋の鋳物師について …… 3
Ⅳ　発掘調査の経過 …… 5
Ⅴ　層序 …… 11
Ⅵ　遺構 …… 12
Ⅶ　遺物 …… 26
Ⅷ　結語 …… 47
図版

挿図・表目次

挿図1　金屋遺跡及び周辺の遺跡位置図 …… 1
挿図2　坂下町金屋遺跡出土石組遺構実測図 …… 4
挿図3　調査地域付近地形図 …… 10
挿図4　調査地区グリッド設定図 …… 10
挿図5　遺構全体図 …… 13
挿図6　ピット模式図 …… 19
挿図7　溝状遺構実測図 …… 20
挿図8　ＳＤ１遺物出土状態、石組１、石組２平面図 …… 21
挿図9　土坑実測図(1) …… 22
挿図10　〃　(2) …… 23
挿図11　出土遺物実測図(1) …… 39
挿図12　〃　(2) …… 40
挿図13　〃　(3) …… 41
挿図14　〃　(4) …… 42
挿図15　〃　(5) …… 43
挿図16　〃　(6) …… 44
挿図17　〃　(7) …… 45
挿図18　〃　(8) …… 46

表1　土坑一覧表(1) …… 24
表2　〃　(2) …… 25
表3　ＳＫ３８出土銭貨類分類表 …… 50

図版目次

図版1　遺構(1) …… 1
図版2　遺構(2) …… 2
図版3　遺構(3) …… 3
図版4　遺構(4) …… 4
図版5　遺構(5) …… 5
図版6　遺構(6) …… 6
図版7　遺構(7) …… 7
図版8　出土遺物(1) …… 8
図版9　出土遺物(2) …… 9
図版10　出土遺物(3) …… 10
図版11　出土遺物(4) …… 11
図版12　出土遺物(5) …… 12
図版13　出土遺物(6) …… 13
図版14　出土遺物(7) …… 14
図版15　出土遺物(8) …… 15
図版16　出土遺物(9) …… 16
図版17　出土遺物(10) …… 17
図版18　出土遺物(11) …… 18

Ⅰ　発掘調査に至る経緯

昭和６１年、可児市今渡字大清水地内他で、土地区画整理事業が計画され、担当課である都市整備課（現区画整理課）より、埋蔵文化財の有無についての照会があった。市教委社会教育課は計画予定地域内に、文献、現地踏査などで確認されている金屋遺跡（県遺跡台帳未登録）がある旨の回答をしていた。

その後、この遺跡の保存について、関係機関と協議を重ねたが、事業の性格上、保存することは困難であることから、事前に発掘調査をして、記録保存することとなった。

この決定に基づき、大清水土地区画整理組合理事長　津田秀雄と「大清水土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財取り扱い協定書」を結んだ。その後、この協定書に基づき、大清水土地区画整理組合理事長と、可児市長との間で委託契約書を交わし、原因者負担による事前発掘調査を昭和６２年７月２０日より、開始した。

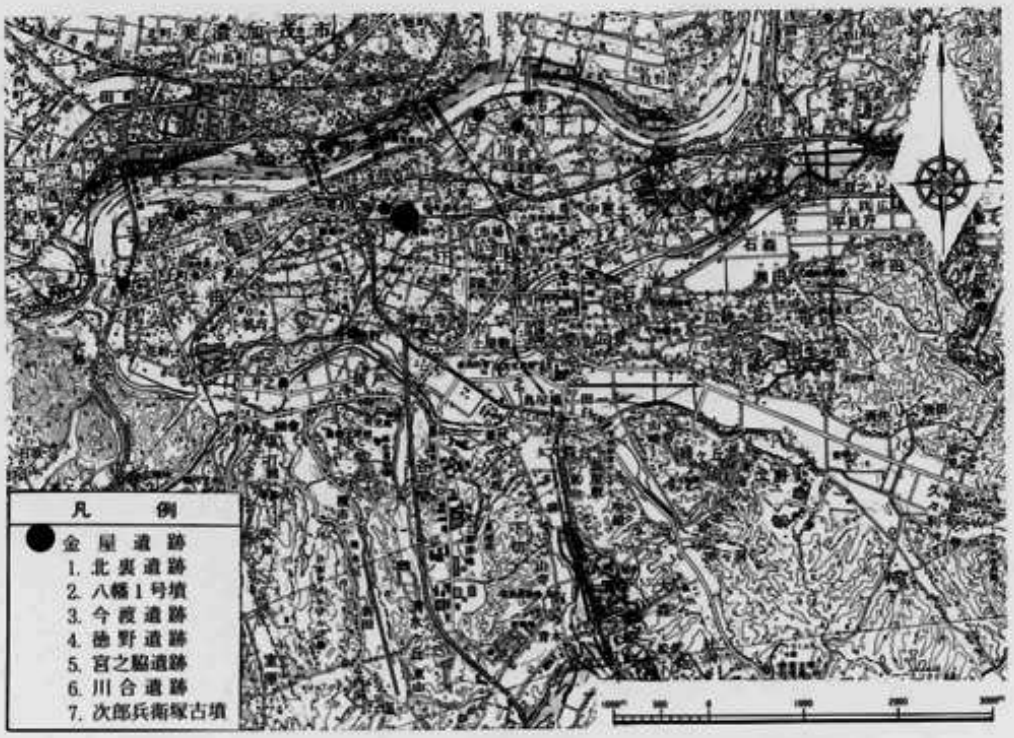
文化財保護法の規定による屈出、通知は、次のとおりである。

第５７条の５第１項の規定による屈出書の進達

昭和６２年６月２０日付　　可教社第１６０号

第９８条の２第１項の規定による通知

昭和６２年７月３日付　　可教社第１７７号



挿図－１　金屋遺跡及び周辺遺跡位置図

Ⅱ　金屋遺跡の立地と環境

可児市は、岐阜市の東方約３０㎞のところに位置し、東は御嵩町、土岐市、西は愛知県犬山市、南は多治見市、北は木曽川を隔てて美濃加茂市と接している。

地質的には、基盤の秩父古生層が陥没してできた、美濃加茂盆地の南にあたり、木曽川が開折した３段に及ぶ河岸段丘の平坦部と、哺乳動物の化石を産することで著名な名村層（帷子累層）や平牧層が堆積する低丘陵部、及びその上位に堆積する土岐砂礫層の丘陵部に、大別される。

金屋遺跡は、木曽川が開折した３段の河岸段丘のうち、下位段丘である土田、今渡段丘上に立地する。標高８０ｍ程を測る。木曽川河畔から直線距離で、約６００ｍ南に位置する。行政区域的には、可児市今渡字住吉浦である。

この土田、今渡段丘は、木曽川河畔沿いに形成されているため、古くから人々が生活を営んでおり、多数の遺跡が確認されている。

代表的なものは、可児市土田地区の北裏遺跡（註１）、袖裏遺跡（註２）、土田渡古墳群（註３）川合地区の宮之脇遺跡（註４）、川合遺跡（註５）、川合古墳群（註６）などをはじめ、この他数多くの遺跡があり、又対岸である美濃加茂市や加茂郡など、木曽川沿いの地域には遺跡が密集し、遺跡の一大群集地域ということができる。

金屋遺跡の北方１００ｍのところで、昭和５８年に、県道美濃加茂可児線改良工事に伴い、今渡遺跡が発掘調査され、中世の土坑墓、火葬墓が、多数検出された。これにより、中世の埋葬方法の一端が解明されたと同時に、数多くの鉄滓（註７）が出土していることは、今回調査する金屋遺跡との関連が予想され、注目したい。

（註１）　可児町北裏遺跡発掘調査団　『北裏遺跡』１９７３年３月３１日

（註２）　可児市教育委員会　『可児市の文化財』第５集　１９８２年３月

（註３）　八幡１号墳をはじめ、現在は、９基しか残っていないが、以前は１００基を超える小円墳が存在したようである。

（註４）　岐阜県教育委員会・可児町教育委員会　『宮之脇遺跡』１９７６年８月２５日

（註５）　岐阜県教育委員会・可児町教育委員会　『川合遺跡』１９７８年３月２５日

（註６）　次郎兵衛塚古墳、稲荷古墳などが含まれる。

（註７）　岐阜県教育委員会　『今渡遺跡』１９８４年３月

Ⅲ　金屋の鋳物師について

金屋の鋳物師について地元に伝わる文献としては、享保５年（１７２０）に書かれた『金屋村由来』がある。それによると、河内国の鋳物師宗匠長谷川河内少輔藤原家次が、奥州からの帰途、東山道を、下荏戸の恵女洞之郷に通りかかったところ、天池が震動し、池より龍が昇るという神変に会い、ここに永住することとし、河内より一族を呼び寄せ、恵女洞之郷を「金屋村」とした、とある（後に掲げる原文参照）。

金屋村の鋳物師が製作した鰐口が、飛騨の千光寺、及び御嵩の願興寺に現存する（両者とも県指定文化財となっている）。又、太平洋戦争中の金物提供によって現存しないが、金屋村の銘のあった梵鐘も５例ある。鰐口、及び梵鐘の銘は、次のとおりである。

鰐口　(1)　飛騨　千光寺……「永禄九年丙寅十一月吉日」
「大工濃州可児郡野金屋長谷川平左衛門尉」

(2)　御嵩　願興寺……「大工無鉄　天正十二年甲申」

梵鐘　(1)　三河国加茂郡龍谷庵……永正十二年　「美濃州可児之郡衛度下門大工家長」

(2)　御嵩町津橋熊野神社……天文八年　「大工長谷川彦一、教吉、高次」

(3)　木曽須原宿定勝寺……天文十八年　「大工藤氏長谷川幸次」

(4)　犬山瑞泉寺……天正七年　「大工濃州可児郡荏戸之住長谷川平左衛門」

(5)　久々利放生寺……元和四年　「長谷川平左衛門長次、同彦一郎」

これらの銘の年代から考えると、金屋の鋳物師は、室町末期から江戸初期まで活躍し、その交流圏は、東濃一円と、飛騨、三河の東加茂郡足助町、信濃の木曽にわたっている。

しかし、江戸時代初期以後の天和３年（１６８３）、下切村（現可児市下切）雲龍寺、金屋村の龍洞寺自体も、宝年５年（１７０８）には岐阜の鋳物師が鋳造している。これらからみると、１７世紀中頃には衰微してしまっているようである。(註1)

現在までに判明していることは以上であるが、鋳物師の活動の時期は、ほぼ分かっているものの鋳物師の工房、生活の様子について分かっていることは、皆無といってよいだろう。従って、今回の調査の結果によっては、これらを解明する可能性が高いので、注目すべき調査となる。

尚、昭和４９年、恵那郡坂下町金屋地区で、中世鋳造址が発掘調査されているが、それによるとこの遺跡は金屋村の鋳物師が、一時的に出張した、いわゆる「出吹き」であろうとしている。(註2)

（註１）　可児町　　『可児町史　通史編』　１９８０年２月１日
（註２）　坂下町教育委員会　『金屋・星の宮遺跡』　１９７５年

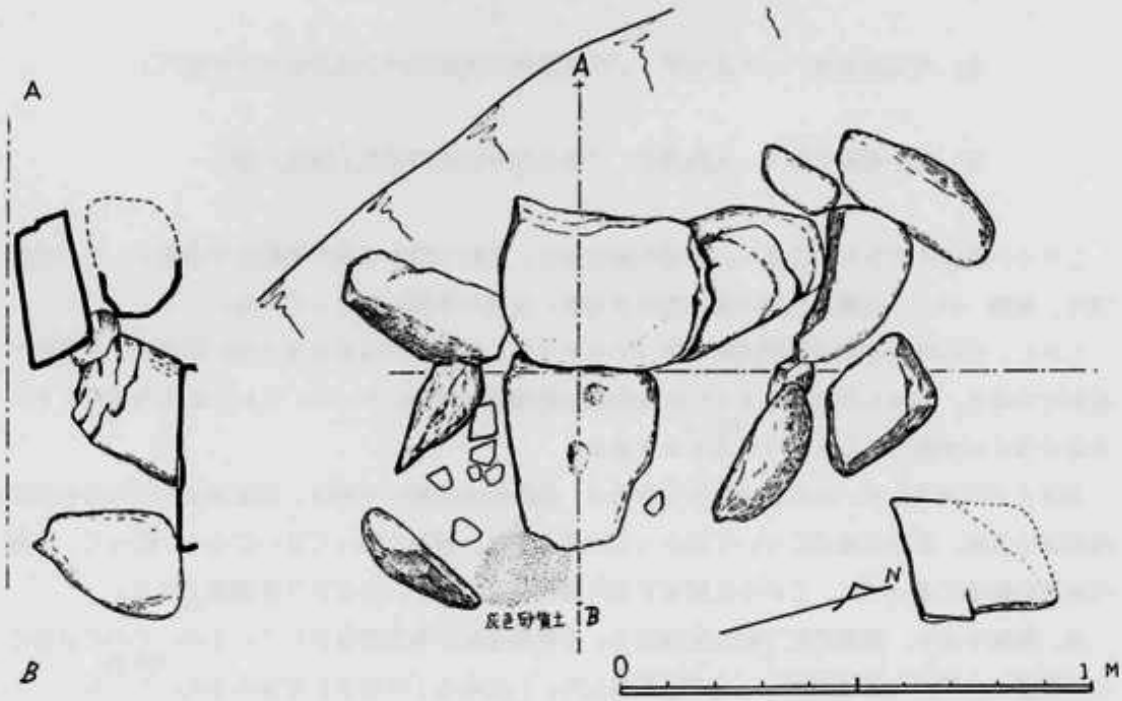
爰に濃州可児郡金屋村之油(由)来奉尋ニ、「ヤブレ」土之庄恵女洞之郷ト申所ハ、古中仙道之海「ヤブレ」、然所ニ鋳師之相正長谷川河内少輔藤原家次有テ子細、道ノ奥え下り給ふ、彼恵女ノ郷ヲ昼八ッ時ニ通り懸り、青天俄ニしん(震)動)とうして打池より青竜天上いたし候とかや、依去ニ、河内路(陸)ノ奥え下りヲ止メ、此所ニ居住せはやト逗留之内ニ、河内国より親族家来追々馳集、為家職鋳物師場ヲしつらひ、それよりふきを初メ、段々ニ繁(繁)昌して、近国在々之寺社仏格(閣)等之鐘・鰐口数多に今有、鐘ノ銘何方ニても於今ニ金屋大工打の来、其節より恵女ノ郷ヲ金屋村ト号ス之、其上有テほまれ勅状頂戴日本鋳物師之相正ニ成被為下、長谷川河内守ト号ス、氏神住吉大明神氏寺金剛山龍洞寺青龍池河内守腰かけ石にて有り、其因縁末葉ヲ継長谷川十右衛門尉、同弥次右衛門・同平左衛門・彦左衛門・平右衛門、末葉長谷川源六郎先祖之家職(職)ヲ動、諸国為一見往来仕罷、此者ニ付、国所実生宗旨等改、御公料之場御代官所迄御訴仕罷出申者也

（一七二〇）
享保五年庚子

金屋村名主　長谷川弥次右衛門㊞
同村年寄　同　平左衛門㊞
同村組頭　同　彦左衛門㊞
同断　同　平右衛門㊞
隠居　同　重右衛門㊞

諸国御役所
御禁紙本書之内書出シ如此ニ候

今渡金屋村鋳物師由来書



挿図－２　坂下町金屋遺跡出土石組遺構実測図（註２文献より転載）

Ⅳ　発掘調査の経過

調査区域内に、5×5mグリッド（G）を設定して、調査をすることとした。以下、調査日誌より経過を述べることにする。

調査日誌抄

7月13日（月）　晴

現場事務所設置。

7月20日（月）　晴

発掘資材等搬入。杭打ち（5mグリッド）　鉄滓、山茶椀、陶片等を表採する。

7月21日（火）　曇

発掘調査開始。並行して杭打ち。10列杭沿いにトレンチを入れる。水がかなり湧き、掘り下げ困難。

7月22日（水）　晴　　午後から

10列トレンチ掘り下げ続行。平板による杭の位置設置。

7月23日（木）　晴

10列トレンチ内（N10、O10G）より、炉跡らしきもの確認。鋳型片、陶器片、鉄滓など出土。7列トレンチを入れる。地山面まで、30～40cm前後。

7月24日（金）　晴

P9、P8G掘り下げ。P8G地山出る。陶片出土。

7月27日（月）　晴

P9、P10G、地山出す。O10G表土はぎ。

7月28日（火）　晴

O10G、掘り上がり、O9G掘りはじめ。

7月29日（水）　晴

O9G、掘り上がり、N10G表土はぎ。

7月30日（木）　晴

N10G掘り上がり。これまで残してきたグリッド間の土手除去。P10、P9、O10、O

９Ｇ清掃。土壙らしきもの数基確認。

7月３１日（金）　曇

Ｎ９Ｇ掘り上がり。

8月　7日（金）　晴

Ｎ８Ｇ表土はぎ、Ｏ８、Ｐ８Ｇ掘り上がり。Ｐ８Ｇ北東部に、黒色土のプランあり。その中には鋳型片、鉄滓片多数顔をのぞかしている。

8月１０日（月）　晴

Ｍ１０Ｇ表土はぎ、Ｎ８Ｇ掘り上がり。各グリッド間の土手除去。

8月１１日（火）　晴

残りのセクベルトはずす。Ｍ１０－Ｐ１０－Ｐ７－Ｍ７間掘りあがり。

8月１８日（火）　晴

Ｍ７、Ｎ７、Ｏ７Ｇ掘り下げ開始。すぐ地山でる。Ｍ７Ｇ南西部より陶器壷片一括出土。状況は石を中心に、花びら状にわってならべてある。

8月２４日（月）　晴

１０列ライン以南の清掃及び、遺構検出。

8月２６日（水）　晴

１０列ライン以北の掘り下げ開始。Ｍ１１、Ｎ１１、Ｍ１２、Ｎ１２Ｇ表土はぎ開始。Ｎ１１Ｇ内の包含層より陶器類、鋳型、鉄滓一括して出土。

8月３１日（月）　曇

Ｍ１１、Ｎ１１、Ｍ１２、Ｎ１２Ｇ地山出し開始。１１列内では急に地山のレベルが下がる。遺構の存在の可能性あり。

9月　1日（火）　晴

Ｍ１２、Ｎ１２Ｇ内は、地山がはっきりとでないため、更に掘り下げた結果、溝状遺構であることがわかった。底には川原石、陶器片などが検出される。ＳＤＩと名付ける。

9月　2日（水）　晴

Ｏ１１、Ｏ１２、Ｐ１１、Ｐ１２Ｇ掘り下げ開始。Ｐ１１Ｇより石組列検出。

9月　7日（月）　曇

Ｑ８、Ｑ９、Ｑ１０Ｇの一部掘り下げ開始。

9月　8日（火）　曇

Ｑ８、Ｑ９、Ｑ１０Ｇ掘り下げ完了。Ｑ１０Ｇ内で土坑を確認、その覆土上面より中国銭100枚程出土。

9月　9日（水）　曇

Ｑ１１、Ｑ１２掘り下げ開始。Ｑ１２Ｇ内東端に石組列確認。排水遺構の可能性高い。

9月１４日（月）　晴

各セクション壁立て、及び周辺の地山出し。１０列以北には、計３本の溝状遺構が確認できる。

9月１６日（水）　曇

１０列セクション下、北西端溝内で地山直上から鉄滓、甕など出土。Ｏ１２Ｇ内の石組遺構はＱ１２Ｇ内を斜めに横切る。

9月１７日（木）　晴

Ｑ１２－Ｑ１０Ｇ間、Ｑ１０－Ｒ１０Ｇ間、セクション実測。

9月１８日（金）　晴

Ｑ１０－Ｑ７Ｇセクション実測。調査地全面地山出し。

9月２１日（月）　晴

南区（１０列以南）遺構捜し。ピット多数、土坑数基確認。

9月２２日（火）　晴

南区清掃、線引き、写真撮影。ＳＫ２、ＳＫ３覆土上面の遺物、写真撮影後取り上げ。

9月２４日（木）　晴

文教民生委員会視察。南区ピット掘り始め。北区線引き。

9月２５日（金）　晴

南区ピット掘り上がり。底に石の入ったピット多数。南区土・掘り始め。

9月２６日（土）　小雨

セクション（Ｍ１０－Ｑ１０Ｇ間）実測。

９月２８日（月）　晴

Ｍ１０－Ｍ１２Ｇ間セクション実測。各セクション注記。１０列セクション土手除去。

９月２９日（火）　晴

Ｑ１０－Ｒ１０Ｇ間、Ｒ１０－Ｒ７Ｇ間、Ｒ７－Ｑ７Ｇ間セクション実測。Ｏ列、Ｑ列土手除去後、北区清掃開始。

９月３０日（水）　曇

北区清掃後、全体写真、各遺構写真。溝は３本確認でき、北よりＳＤ１、２、３とする。

１０月　１日（木）

ＳＤ１、２掘り下げ。ＳＤ２は、Ｍ１１杭以東で２本に分かれ、北をＳＤ２－１、南をＳＤ－２とする。又、Ｏ１１杭下ＳＤ２－１で、古瀬戸と思われる破片出土。

１０月　２日（金）　晴

Ｐ６－Ｍ６Ｇ間セクション実測。ＳＤ１、２掘り下げ続行。Ｏ１２Ｇ内ＳＤ１より、すり鉢１個体、Ｑ１２Ｇ内ＳＤ１、ＳＤ２－１間より、大甕胴下半部出土（包含層中）。ＳＤ１、ＳＤ２－１は、Ｑ１２Ｇで合流。Ｐ１１Ｇ内ＳＤ２－２で、石組列の下より陶片出土。Ｑ１１Ｇ内のＳＤ３掘り下げ開始。

１０月　５日（月）　晴

ＳＤ掘り下げ続行。ピットの注記ほぼ完了。その後、土坑の注記開始。

１０月　８日（木）　晴

土坑断面実測。北区清掃。

１０月９日～１２日（金～月）

土坑断面実測、及び写真撮影、土坑掘り下げ完了。

１０月１３日（火）

６列ライン南に３×１５ｍ拡張。表土２０㎝程で、一面に（Ｏ６、Ｎ６Ｇ）鋳型片が検出される。Ｎ６Ｇ内で、鋳型片が検出される。Ｎ６Ｇ内で、鋳型片などを多量に含む土坑２つ検出。

１０月１４日（水）　晴

拡張区掘り下げ続行。Ｏ６、Ｐ６Ｇ内に、鋳型片などを多量に含んだ土坑確認。

１０月１９日（月）

引き続き拡張区掘り下げ。

１０月２０日（火）　晴

拡張区掘り下げ完了。ピット多数検出。北区の溝の残り部分掘る。

１０月２１日（水）　晴

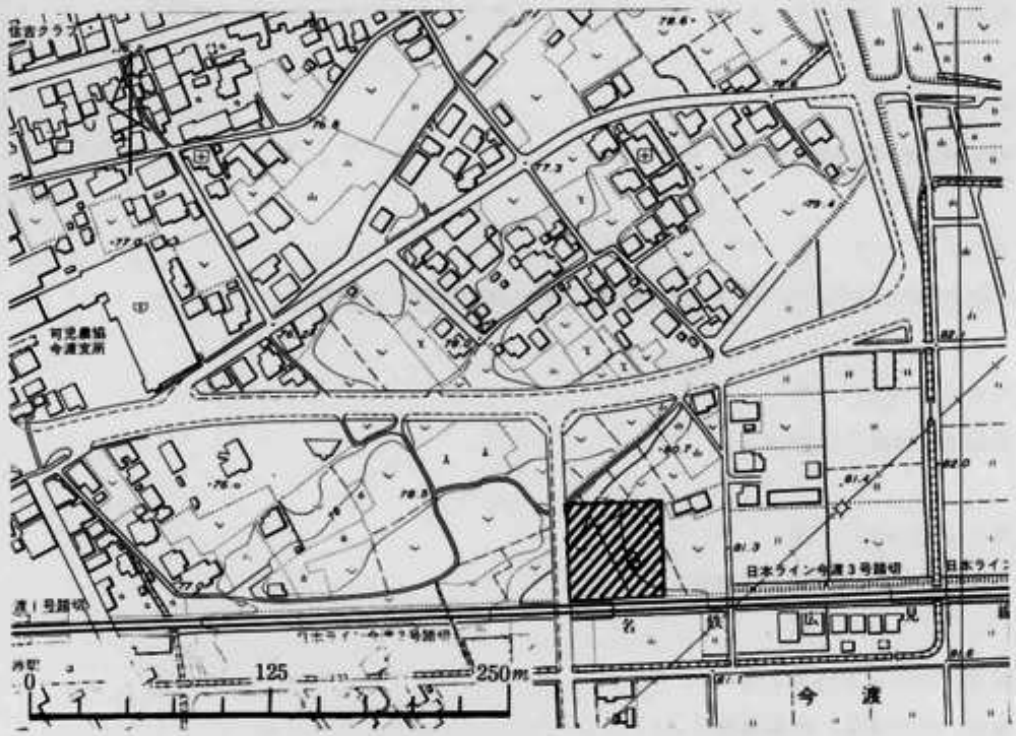
調査区全体掘り上がり。

１０月２２日（木）　晴

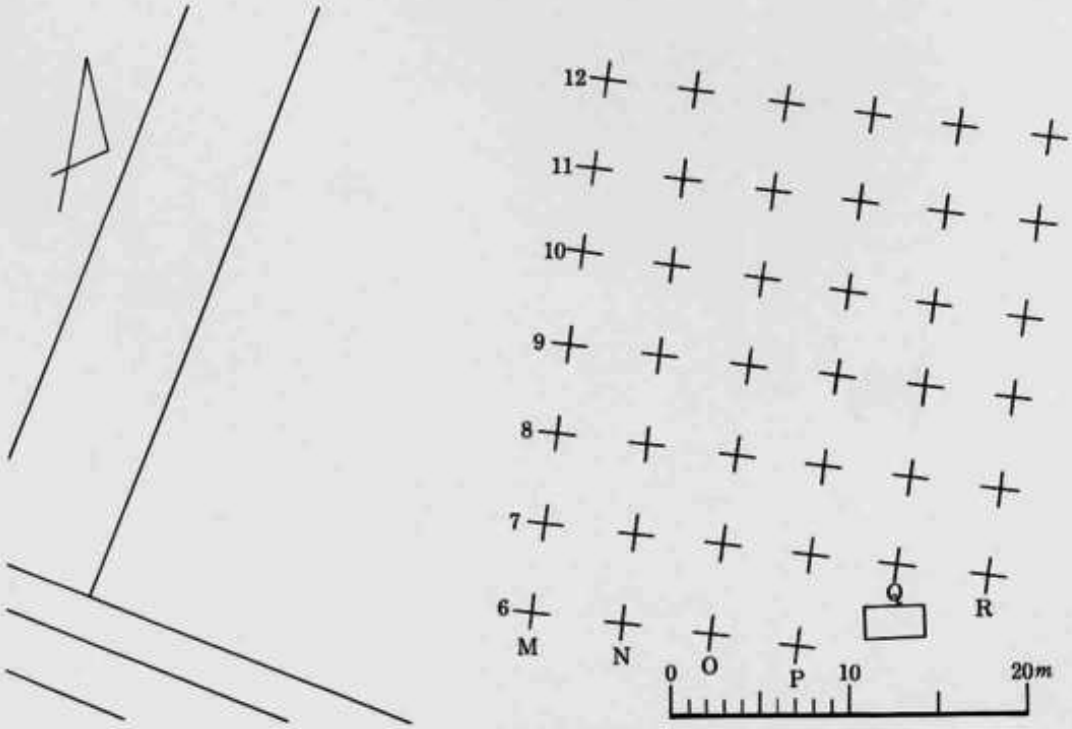
全体割りつけ、発掘資材撤去。

１０月２３日～１１月１４日

実測、及び測量。現場調査終了。



挿図－3　調査地域付近地形図



挿図－4　調査地区グリッド設定図

Ⅴ 層 序

発掘調査地域の層序は、遺構全体図付属のセクション図のとおりであるが、浅いところでは地山まで1、2層、深いところでも3層である（遺構のない部分）。地山は黄褐色土層、又は黄色土層である。地山面までの深さは、浅い部分（7列付近）では、0.3～0.4ｍ程で、北に向い除々に0.7ｍ程まで中央部の溝部分（ＳＤ３）で最も深くなり、1.4ｍ程になる。北側部分は0.5ｍ程であるが、表土がやや下っているため、ＳＤ３南の深さとレベル的にはそれ程かわらない。ＳＤ１北側では、除々に高くなっている。

遺構は地山である。黄褐色土層、又は黄色土層を掘り込んでいるが、ＳＤ３をはじめ、一部の遺構では、その下の黄色砂質土まで掘り込んでいるところもある。

包含層は、①、②層であり、この2層より多量の陶器片、鉄滓、鋳型片等が検出されている。

①灰黒褐色土（表土）
②黒褐色土　②′黄混入土
③黒色土　③′茶褐色、黄色土混入　③″黄混入
④茶褐色土（やや黄まじる）　④′灰黒褐色土混じり　④″黄色混入
⑤黒色土黄色混入土
⑥淡茶褐色土　⑥′黒色褐色及び、黄色混入　⑥″黄混入
⑦黄色土粘質淡茶褐色混入土　⑦′黒色混入土
⑧赤褐色土（淡茶褐色混入）
⑨黄土色土（黄色土黒色土混入）

Ⅵ 遺 構

今回の調査により検出した遺構は、およそ次のようなものである。

1. 溝状遺構　4条
2. 集石遺構　2ケ所　土坑の一種ともいえるが、大量の石が入っている。
3. 石組遺構　2ケ所
4. 土坑　73基
5. （柱）穴　243ケ所

1. 溝状遺構（挿図－7・8）

今回の調査地域の北半分から、計4本の溝が検出された。4本ともほぼ東西に走っているが、底のレベルから考えて、東から西へ流れていたと思われる。北からSD1、2－1、2－2、3と呼ぶことにする。

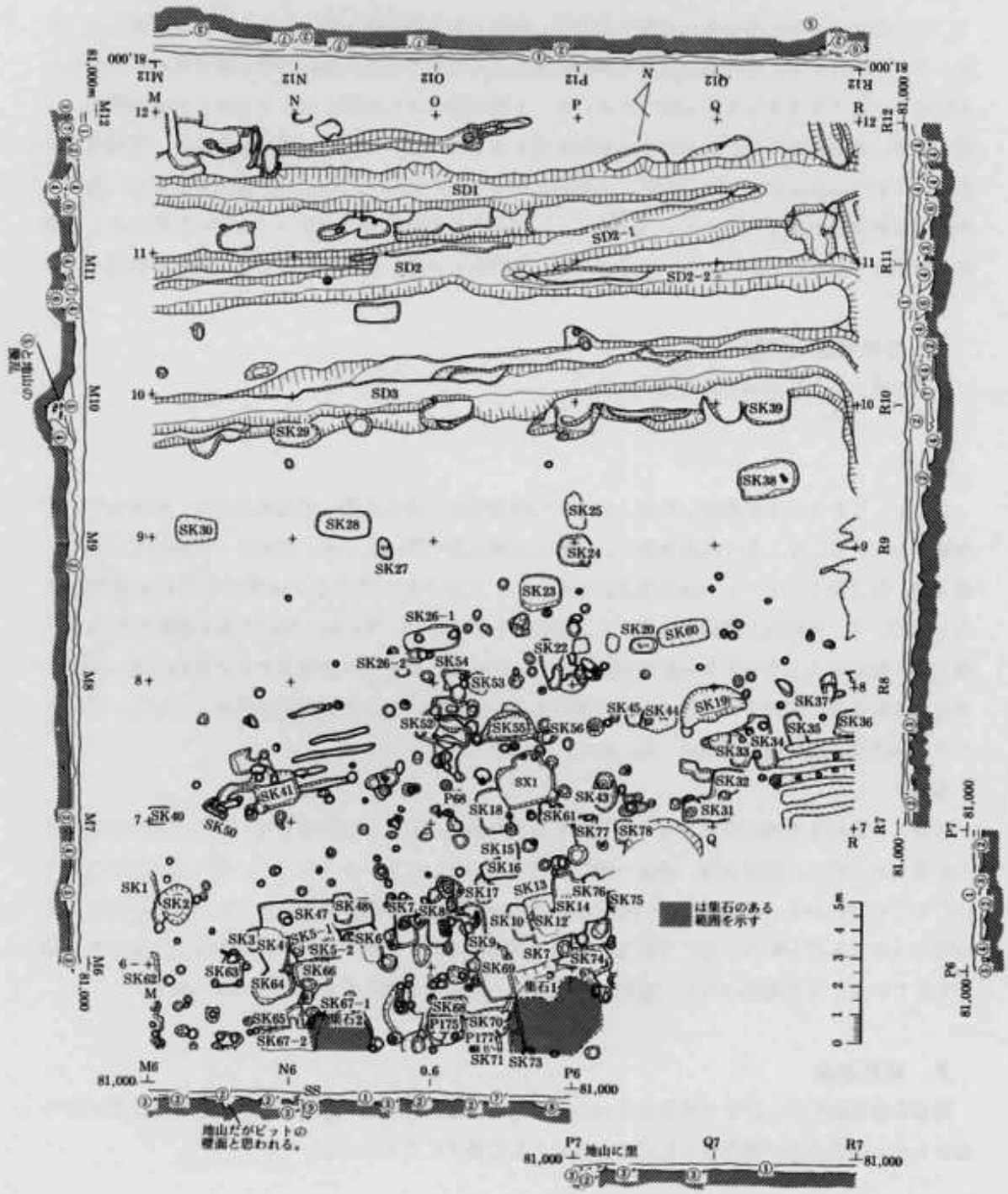
SD1

調査区域の最北部近くで検出されたものである。溝の肩がM12G、Q12Gなどをはじめ、あちこち攪乱されているため、溝の幅は一定ではないが、約1～1.5mを測る。深さはおよそ40cm前後である。溝の断面は肩からなだらかに落ち込み、底部も平坦ではなく丸みをもっている。

遺物は底にたまった堆積土の上から出土している。M12～O12G内では、約10～20cm程の川原石がかなり検出され、遺物である天目茶碗、甕、すり鉢、鉄滓、鋳型片などが、その中にまじって出土している。O12G内では、すり鉢、古瀬戸の水注などが出土している。溝の底ではないが、Q12G内のSD2－1との間の肩の上から、堆肥貯蔵用のカメが出土している。出土遺物から、15世紀初頭～16世紀後半頃までは使用されていたと思われる。

SD2

SD2－1、2－2がO11G北端部で合流して1本の溝となる。SD2－1は、東北東から西南西に向い流れ、SD2－2は、Q11G東端南部から北上し、同G東北端で西に屈曲して流れている。SD3を切っている。幅は2－1が1～1.4m程、2－2が1～1.2m程である。断面は、2－1が肩からゆるやかに落ち、丸みを持って落ち込み、底部は平坦に近いのに対し、2－2は、やや開き気味のU字型を呈する。深さは両者とも40～50cm程である。合流したSD2は、幅が1～1.5m程（最大幅2m程）である。合流後すぐ北岸近くで、地山部分が長い島状に底から20cm程の高さで残り、SD2内に幅0.3～0.5m前後の小さな溝を形成する。底のレベルは両方とも同じである。断面は大きい方は緩やかに丸みを持って落ち込み、底は丸みを持つがほぼ平坦である。一方小さい方は、ほぼU字形を呈する。深さは、両溝とも50cm程である。底にはSD1とは異なり、川原石などはほとんどなく、堆積した黒褐色土中より、古瀬戸が出土した。又、N11G内から、底に扁平な石が入ったピットを1ケ所確認した。尚、合流点近くのSD2－2覆土上面より、石組遺構が出土しているが、詳しくは後述する。


SD1
SD2-1
SD2
SD2-2
SD3
SK39
SK29
SK38
SK30
SK28
SK27
SK25
SK24
SK23
SK26-1
SK26-2
SK54
SK22
SK20
SK60
SK53
SK52
SK55
SK56
SK45
SK44
SK19
SK37
SK35
SK36
SK34
SK33
SK32
SK31
SX1
SK43
SK61
SK77
SK78
SK18
SK15
SK16
SK17
SK13
SK76
SK14
SK75
SK12
SK10
SK9
SK7
SK74
SK69
集石1
SK68
SK70
SK71
SK73
SK41
SK40
SK50
SK1
SK2
SK47
SK48
SK3
SK4
SK5-1
SK5-2
SK6
SK63
SK64
SK66
SK62
SK67-1
集石2
SK65
SK67-2
は集石のある範囲を示す
地山だがピットの壁面と思われる。
地山に黒

挿図－5　遺構全体図

ＳＤ３

調査地域のほぼ中央部を流れる。ＳＤ２－２同様、Ｑ１２Ｇ南東部分からやや北上して、西にほぼ屈曲して流れる。幅は検出した溝の中で最も広く、1.8～2.6ｍを測るが、所々溝の肩がやられている。断面はやや丸みをもって落ち込むが、両岸とも一部を除き肩から３０～４０㎝落ち込んだ後、平坦面を持って、その後又、ゆるやかに落ち込んだ形をとる。底はほぼ平坦である。中程の平坦面からの深さも３０～４０㎝程である。従って溝の肩部からの深さは、６０～８０㎝を測る。
溝の東部、南岸付近では、地山の下の黄色砂質土まで掘り込んでいる。覆土をみると、黒褐色土に黄色土がまだら状に混っているため、人為的に埋められたものと思われる。覆土中からは、陶片、鉄滓、鋳型片等が出土している。又、Ｐ１１Ｇ内の平坦面上から、直径２０㎝程の川原石が１５個程かたまって出土しており、中には焼けた石、鉄滓等もあり、遺構が存在した可能性を物語る。

2. 石組遺構（挿図－８）

調査区域から２ケ所検出された。

石組１

ＳＤ１、ＳＤ２－１が埋没した後、Ｑ１２Ｇ内東端近くを北北西一南南東方向に、両者を切って構築されている。Ｑ１２Ｇの北東端に、幅約１ｍ掘り型が残っている。石組は一部崩れているが、横２列、縦２段で１５～２０㎝前後の石を中心に、大きいものでは９０㎝程の川原石を使用して作られている。比較的北側の石は大きく、南側の石は小さい。中には、焼けた石も使用されている。横２列の間には、１５～２０㎝程の間隔があり、恐らく、排水用に使用されたと思われる。検出された地点から先、どのように続くかは不明である。すり鉢、甕などの陶片が出土している。時代は１７世紀半ば～後半以降のものと思われる。

石組２

ＳＤ２が合流する地点のＳＤ２－２埋土上面より検出された。ほぼＳＤ２－２の北側の肩部と並行に組まれており、縦は２段、横は一部しか残っていないためわからないが、恐らく２列になっていたものと思われる。使用されている石は、２０㎝前後の川原石が使用されているが、中には４０㎝程の大きなものもあり、主に下段でその使用が認められ、又焼けた石や石皿のようなものも一部使われている。出土遺物はなく、性格は不明だが、溝の肩に積んだものとも考えられる。

3. 集石遺構

調査区域南側から、計２ケ所検出された。本来、土坑に含めるべきかもしれないが、土坑内からおびただしい数の石が検出されたため、集石として扱うこととした。

集石１

調査区域の南端、Ｎ６Ｇ内より検出された。一部しか検出していないため、正確なプランはつかめないが、おそらく楕円形又は、隅丸長方形になると思われる。短軸は約2.2ｍ、深さは３０㎝

程である。断面は、プランの肩からほぼ垂直に掘り込まれ、底は平坦である。

プラン内の覆土は、黒褐色黄混じり土であるが、この中には、鋳型、木炭等の細粒片が多量に含まれている。石はこうした中に投げ込まれた状態で検出され、西側には３０～４０㎝の大きなもの、東側には２０㎝前後の小ぶりな石が出土している。覆土や石の中、或いは間には、陶器類、鉄滓、鋳型片が検出されており、これらの状態をみると、石とともに廃棄したものと思われる。

集石２

Ｏ６、Ｐ６Ｇ内にかけて検出された。プランは切られている部分があるのと、全体を検出していないためはっきりいえないが、隅丸長方形を呈する。ほぼ垂直に３０～４０㎝程掘り込み、底は中程までわずかに傾斜するものの、ほぼ平坦である。短軸は約3.2ｍ、長軸の検出された部分の長さは、3.4ｍ程である。この遺構部分は、包含層に木炭、鋳型の細粒片、或いは鉄滓などがかなり含まれており、覆土の茶褐色土中には全面的に木炭、鋳型の細粒片を含んでいる。この他、焼土のような硬い土も入っている。こうした覆土中からは、多量の鉄滓、鋳型片の他、山茶碗、すり鉢、天目茶碗等の陶器類も出土している。

石は、北側には１５㎝前後の小さなもの、南側は３０～５０㎝と大きなものが検出されている。他の出土遺物といっしょに混っている。これらの状態は、集石１と同様なものであり、両者とも鍛治作業の工程中に出て不用となった鉄滓、鋳型片などを廃棄する場所であったと思われる。(註１)

（註１）　セクションをみると、黄褐色土がまだら状に入っているため、後世まとめて廃棄したものと思われるが、覆土中からは、近現代の遺物は確認されていないため、鋳物師の鍛治作業中に出る不要物の廃棄場と判断した。

4. 土　坑（挿図―９・１０）

今回の調査地域から、計７３基の土坑が確認された。地山を深く掘り込んだもの以外に、掘り込みが非常に浅いものがあり、その部分は調査区南側で多数確認した。これらは調査地が畑であったことなどを考えると、耕作用のイモ穴であった可能性が高い。覆土はほとんど茶褐色又は、茶褐色土にそれぞれ黄色土が混ったもので、土坑により混り具合が異なる。又、大部分が覆土中に鋳型細粒片や、木炭を含んでいる。土坑内からの遺物はあまり多くなく、その性格も不明なものが多いが形態、出土遺物から、鋳物師の鍛治遺構と何らかの関連があるものも含まれると思われる。以下、特徴的なものを記述する。

ＳＫ２

長軸1.42ｍ、短軸1.20ｍ、深さ0.40ｍの不整楕円形を呈し、長軸は、Ｎ－6°－Ｅを示す。中に川原石を５・６個含んだ土坑のようなものを切っている。断面は、すり鉢状になだらかに落ち込み、底はほぼ平坦である。南斜面上部に、茶褐色土で硬質の固まりが検出され、この中及び附近からは、鉄滓、鋳型片、山茶碗などの土器片が出土している。

尚、この土坑の東端覆土上面より、鉄釉の筒形容器が、人為的に割られ、ちょうど花ビラ状に並

べられた状態で出土した。

ＳＫ７

長軸1.８８ｍ、短軸0.８０ｍ、深さ0.２０ｍの隅丸長方形を呈し、長軸はＮ－１５°－Ｗを示す。この西隅にある土坑状のものを切っている。底部中程には、ピット２つが切っている。西側のものは、直径約４０㎝、深さ約４０㎝、東側は直径約５０㎝、深さ約８０㎝を測る。

ＳＫ８

長軸1.６０ｍ、短軸0.８０ｍ、深さ0.２５ｍの隅丸長方形を呈し、長軸はＮ－５°－Ｗを示す。Ｌ字形に川原石が置かれており、この下部から鉄滓が出土している。底部東側中央部分は、更に土坑状に掘り下げられて、南側及び東側を更に、ピットに切られている。東側ピットを除いて、両者にはそれぞれ２０㎝程の扁平な川原石が置かれており、更に土坑状のものには、北壁に同型の石が立てられている。ＳＫ８の底からの深さは、東側ピットが５０㎝、他のものは、３０㎝程となっている。又、このＳＫ８を切る形で、北側に３つのピットがある。このうち最北のものは、直径約７０㎝、深さ６０㎝を測り、かなり大きなピットである。底には直径３０㎝の扁平な川原石が置かれている。

ＳＫ９

長軸1.７６ｍ、短軸0.８０ｍ、深さ0.２９ｍの隅丸長方形を呈し、長軸はＮ－１４°－Ｗを示す。埋土上面より甕片が出土しており、この下部には直径３０㎝程の円盤状を呈した土の固まりが検出された。この土の中には赤褐色を呈した部分もあり、鋳型細粒片を含んでいる。

底にはＳＫ８と同様に、直径約３０㎝、深さ約１５㎝程のピットがあり、更に扁平な川原石が敷かれている。北側は攪乱されている。

ＳＫ１９

長軸1.３４ｍ、短軸1.１０ｍ、深さ0.７５ｍの不整楕円形を呈し、長軸は、Ｎ－６１°－Ｅを示す。断面は、ややすり鉢状に落ち込み平坦面を持つ。覆土は黒色土まで下方に若干黄色土が混じる。遺物も出土せず、性格は不明である。

ＳＫ２０

長軸0.９８ｍ、短軸0.５６ｍ、深さ0.３０ｍの隅丸長方形を呈し、やや小型のものである。長軸はＮ－７８°－Ｅを示す。覆土は黒褐色に黄色土がかなり混じる。覆土中より山茶碗、鉄片が出土した。

ＳＫ２４

長軸1.２６ｍ、短軸1.１４ｍ、深さ0.１４ｍのやや不整の隅丸長方形を呈し、長軸は、Ｎ－７８°－Ｅを示す。覆土は、黒褐色土に黄色土がかなりの量入る。南東部分をピットに切られている。

ＳＫ２６

長軸2.０２ｍ、短軸0.９０ｍ、深さ0.１０ｍの隅丸長方形を呈し、Ｎ－７５°－Ｅを示す。非常に浅いため、耕作用のイモ穴の可能性が高い。ＳＫ２７南壁を、ＳＫ２６－２にやられている。底には２つのピットがあり、西側のピットの埋土上面から、甕片が出土しているため、このＳＫ２６に伴うと考えられる。ピットの大きさは東西それぞれ直径３８㎝、深さ２０㎝、３０㎝、３０㎝を測

る（深さはＳＫ２６底からの深さ）。　このピットの覆土には、鋳型細粒片が含まれる。又、ＳＫ２６からは、鋳型片が出土している。

南壁は、ＳＫ２６－２に切られている。中に直径３０㎝のピットがあり、底には三ケ月状の扁平な石が敷かれている。それらの覆土中からは、鉄滓、鋳型片が出土した。

ＳＫ２９

長軸1.８０ｍ、短軸推定0.９０ｍ、深さ0.４０ｍの、やや不整の隅丸長方形を呈し、長軸は、Ｎ－８６°－Ｅを示す。ＳＤ３の南岸を切って掘り込まれており、底は地山の下の黄色砂質土まで掘り直しており、各壁はオーバーハング気味である。

覆土上層中より、サビ釉のかかった甕の底部が裏返って検出された。この他、釘も出土している（土坑墓の可能性が、若干だがある。）。

ＳＫ３８

長軸2.２０ｍ、短軸1.２０ｍ、深さ0.２０ｍの隅丸長方形を呈し、長軸は、Ｎ－７３°－Ｅを示す。比較的大きな土坑である。覆土は、茶褐色黄混じり土でやや粘りがある。覆土上面より中国銭が、合計で１１９枚出土した。中央の穴に、撚糸状のものを通した状態で出土しており、サビによりくっついてしまっており、２つに折れていた。覆土中には、鋳型細粒片が含まれており、上面から鉄滓が出土している。

ＳＫ３９

長軸1.６６ｍ、短軸不明、深さ４０㎝のやや不整の隅丸長方形を呈する土坑と思われる。長軸はＮ－７７°－Ｅを示す。ＳＤ３の南岸を切る形で構築されており、ＳＫ２９と同様なものと思われる。

ＳＫ４１

長軸1.５６ｍ、短軸1.３０ｍ、深さ0.３５ｍの隅丸長方形を呈し、長軸は、Ｎ－６７°－Ｅを示している。北東部分は、攪乱を受けている。北壁はすり鉢状を呈し、下方でほぼ垂直に落ち込み、残りの壁はやや傾斜して落ち込み、底部は平坦である。覆土中より、山茶碗、土師質小皿の各破片が出土している。

ＳＫ４３

長軸1.４０ｍ、短軸0.８４ｍ、深さ0.２０ｍの楕円形を呈し、長軸Ｎ－１０°－Ｗを示す。北辺の直径６４㎝、深さ５０㎝の底に直径３０㎝程の扁平な川原石を敷いたピットに切られているが、これをＳＫ４３の一部として見るべきかもしれない。覆土上面より砥石のようなものが出土した他、天目茶碗などの陶器片、鉄滓、鋳型片も出土した。覆土には、鋳型細粒片を含む。

ＳＫ５５

長軸1.７０ｍ、短軸1.１０ｍ、深さ0.７０ｍの隅丸長方形を呈し、長軸はＮ－７６°－Ｅを示す。北側の壁面は、ややすり鉢状に呈して落ち込むが、他はほぼ垂直に落ち込む。底はほぼ平坦である。覆土は黒色土で、遺物は検出されなかった。性格は、不明である。

ＳＫ５６

ＳＫ５５の東隣に位置する。長軸0.７０ｍ、短軸0.４８ｍ、深さ0.４０ｍの楕円形を呈する。長軸はＮ－６９°－Ｅを示す。覆土中には１５㎝程の大きさの石が、上面に５・６個入り、底には２個

置かれていた。（内１個は、斜めになっていた。）覆土は黒褐色土で下方にいくと黄色土があり、鋳型細粒片が混じる。鋳型片も出土している。

尚、本来ピットとするべきかもしれないが、土坑として扱った。

ＳＫ６１

ＳＸ１の南東に隣接する。形は、不定形で深さは0.１５ｍ程である。覆土中に鋳型細粒片を含む３つのピットに切られている。北西隅で切るピットは、直径４６㎝、深さ４０㎝を測り、覆土中には１０㎝大の石が立てられているようで、鋳型片が出土した。南東隅を切るものは、直径３０㎝、深さ２５㎝を測る。ＳＫ６１の底とほぼ同レベルで、２０㎝大の扁平な石が置かれていた。

ＳＫ６４

ＳＫ４の南に位置する。長軸1.５０ｍ、短軸0.９０ｍ、深さ0.２０ｍの隅丸長方形を呈し、長軸は、Ｎ－５７°－Ｅを示す。ＳＫ４を切っている。

ＳＫ６６

ＳＫ６４の東に隣接する。長軸1.３２ｍ、短軸0.９４ｍ、深さ0.３０ｍの隅丸長方形を呈する。長軸は、Ｎ－７１°－Ｅを呈する。覆土は、黄土色砂質土の黒黄色土が混ったものである。この中からは、鋳型の破片が出土している。覆土上面には、１５～２５㎝程の大きさの川原石が１０数個ある集石が検出されており、中には２０×１５㎝程の大きな炉壁の一部と思われるものも含まれ、又焼けた石も入っており、鍛冶遺構の可能性がある。

ＳＫ６９

ＳＫ９の南壁を切る。長軸1.９０ｍ、短軸1.１０ｍ、深さ0.４０ｍの隅丸長方形を呈する。長軸は、Ｎ－２２°－Ｗを示す。ほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。覆土は黒褐色土に黄色土がまだらに混じる。尚、ＳＫ６９が切る北端の凹地から鋳型片の固まりが出土している。

ＳＸ１

ＳＫ５５の南に位置する。長軸1.９２ｍ、短軸1.４８ｍ、深さ0.３０ｍの隅丸長方形を呈し、長軸Ｎ－６５°－Ｅを示す。最も大きなものといえる。北側部分は、底がほぼ同じレベルの土坑に切られ、（これもＳＸ１とすべきか）南西隅はＳＫ１８、南東隅は扁平な石の入ったピットを切っている。ほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。覆土は、黒褐色土中に、黄色土が斑点状に入っており、鋳型細粒片を含む。北西隅の覆土上方は、暗赤褐色の粘土状の固まりが検出されている。
覆土中からは、鉄滓、鋳型片、陶器片等の多数の遺物が出土している。又、南東隅近くの底には直径２６㎝程の扁平な石が置かれており、そのやや上からすり鉢の底が出土している。性格は断定できないが、廃棄場的な面もうかがえる。

5. ピット（挿図－５）

今回の調査区域から、特に南区からおびただしい数のピットが検出された。大小含めて総計243ケ所である。恐らく、形状からみて掘立柱建物の柱穴が、かなり多く占めると思われるが一部に集中したり、土坑等と重なっており、切り合ったりしていて、規則性を見出すのが困難であるため、建物跡としては扱わなかった。これらの覆土は、土坑と同じく黒褐色、又は茶褐色土に茶色土がそ

れぞれに混ったもので、その混じり具合は、ピットにより異なる。覆土には、鋳型細粒片、木炭が含まれているものもあり、又出土遺物も、他の遺構と同時期のものと思われるため、鋳物師が生活していた時期のものがかなりの割合を占めるであろう。

今回の調査から検出されたピットには、次の３つのタイプがあることがわかった。

(1) 単に素掘りのもの（底は、浅いものは平坦、深いものは丸みを持つ）

(2) 底に石を持つもの（浅いものもあるＰ７４）

(3) 底面の中に更に掘り込みがあるもの

これらのピットの大きさは、平均して直径３０～４０㎝程度であるが、深さは様々である。中には直径６０～７０㎝、深さが６０～８０㎝、１ｍというような巨大なものもある。Ｐ１９２、Ｐ１９１、Ｐ２４、ＳＫ８北側のピットなどがあげられる。ＳＫ８北側のピットは、底に３０㎝大のつけもの石のような石が置かれている。これらの用途は、不明である。この部類のものは、何らかの貯蔵用とも考えられる。

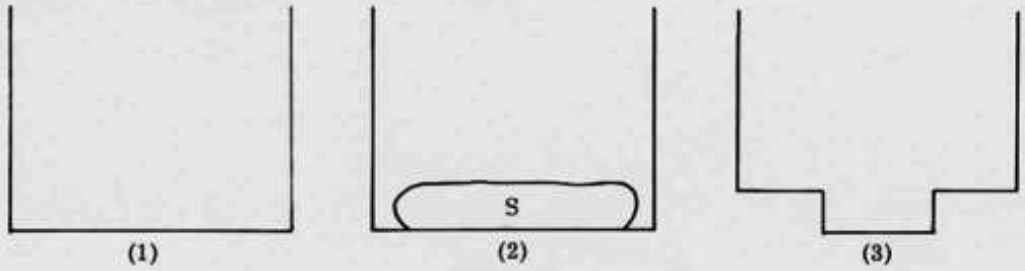
(2)に属するものは、４５ケ所あり、全体の１９％を占める。掘立柱建物にも、しっかりした土台石を入れ、基礎を固めて柱を建てる建築方法が、ある程度進んでいたことになる。市内では、岡田将監屋敷跡(註1)から、同様な柱穴が検出されている。又、時代はさかのぼるが、富加町半布里遺跡(註2)からも検出されている。

(3)に属するものは、Ｐ６８、Ｐ１７７がある。この凹みの直径は、１２㎝程で、深さは１０㎝程で柱穴として考えれば、ちょうど柱の先の部分が当ることになる。又、柱の太さに関連して、ＳＫ５１の覆土には、柱の部分だけ土質が異なり、その痕跡が明瞭に残っていた。（図版７－４）
これらから推定すると、柱の直径は２４㎝程になる（尚、Ｐｉｔの直径は４２㎝である）。

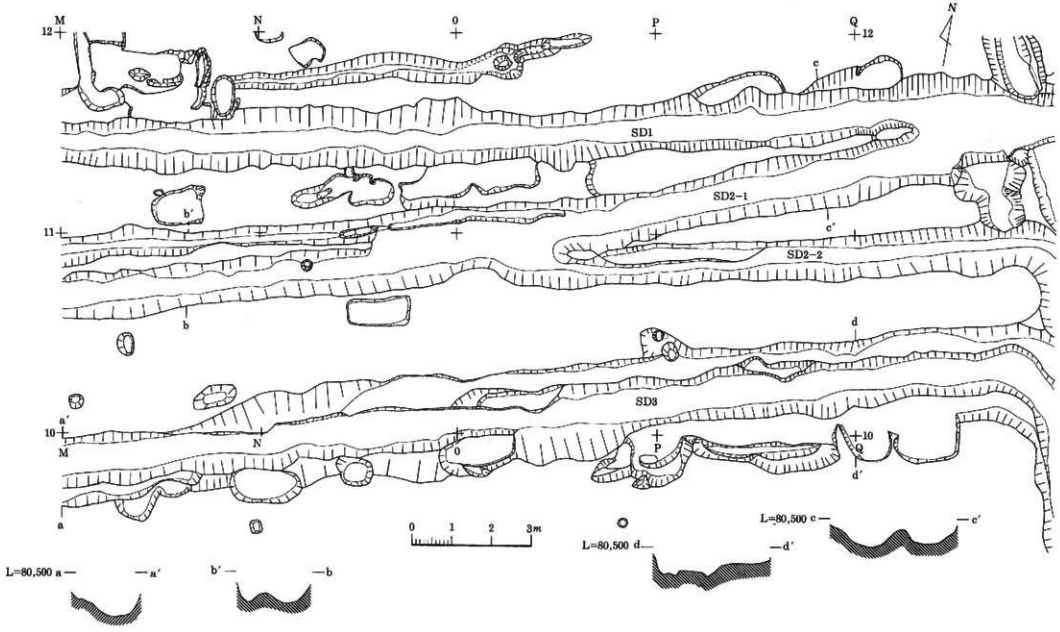
この他、Ｐ１７５中から、大きな鋳型の一部がまとまって検出されている。覆土は、集石２と同じで、鋳型細粒片も含む。その他、鉄滓も出土している。これなどは、鍛冶遺構の一部とも考えられる。こういう例もあるため、検出されたピットの中に、Ｐ１７５と同様な鍛冶遺構としての性格もあると考えられる。

（註１）昭和６０年、可児市教育委員会が発掘調査した。

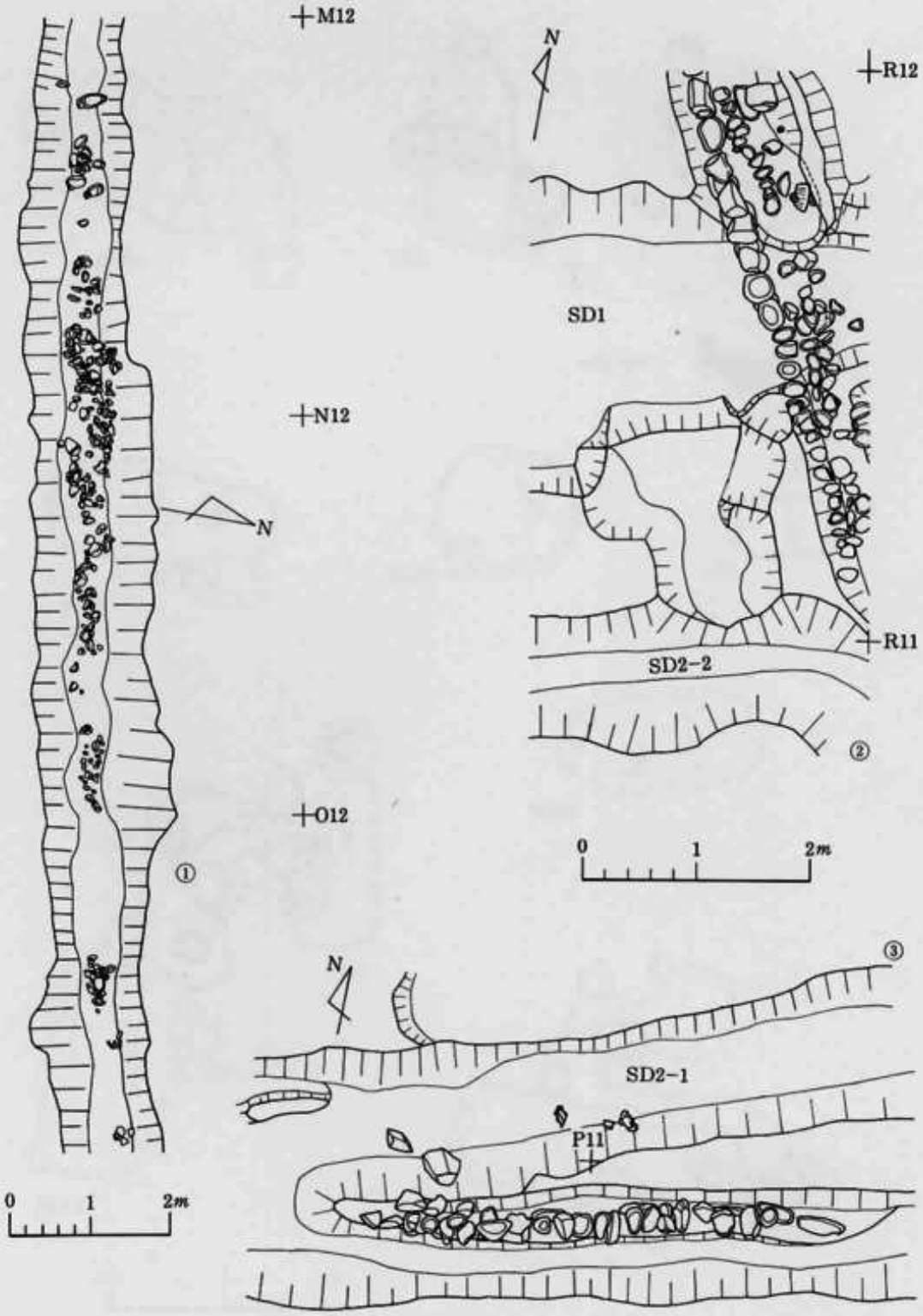
（註２）富加町教育委員会　『半布里遺跡』　１９８６年



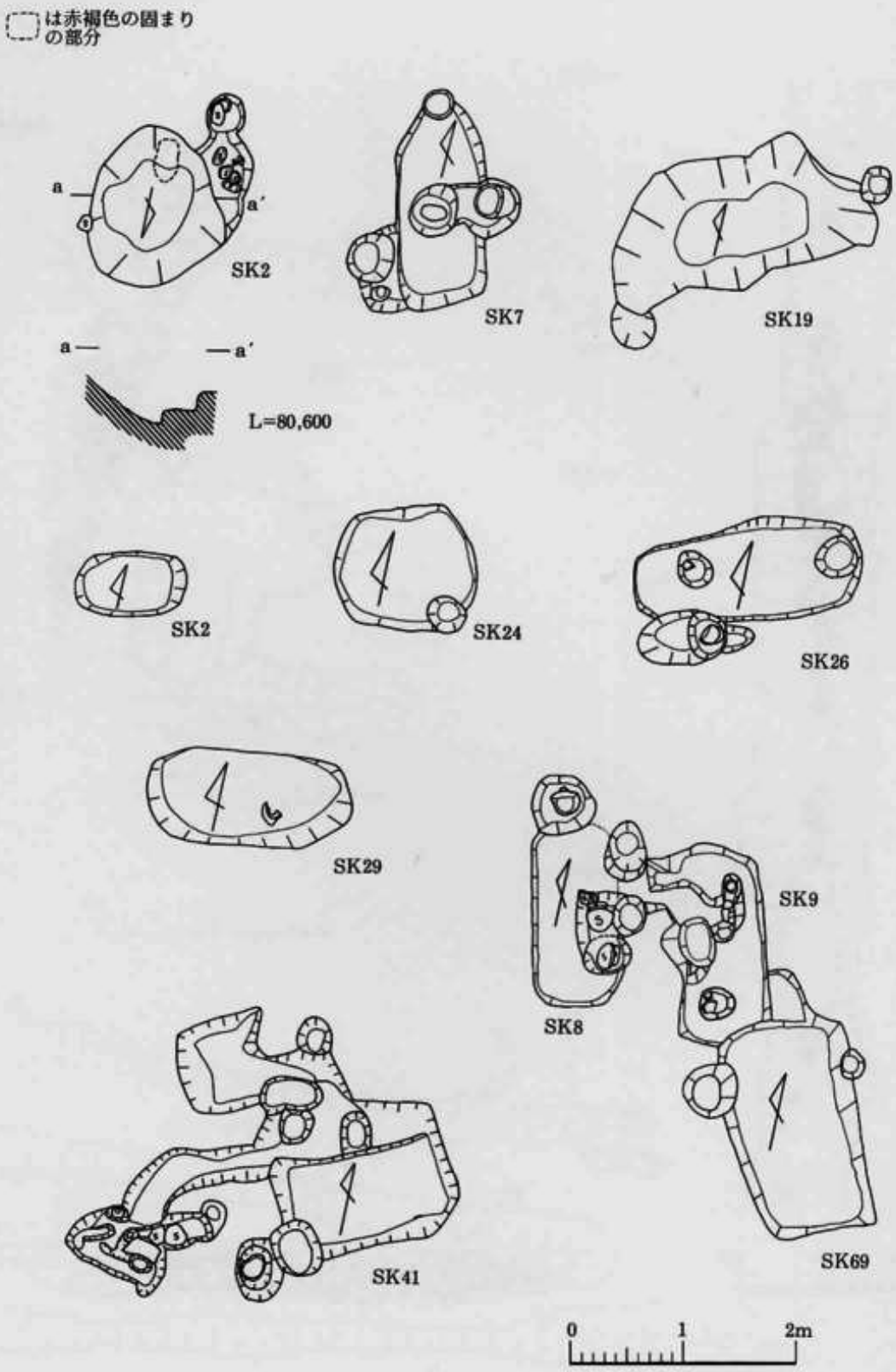
挿図－６　ピット様式図


M
N
O
P
Q
12
11
10
N
SD1
SD2-1
SD2-2
SD3
a
a′
b
b′
c
c′
d
d′
0 1 2 3m
L=80,500 a
L=80,500 b
L=80,500 c
L=80,500 d

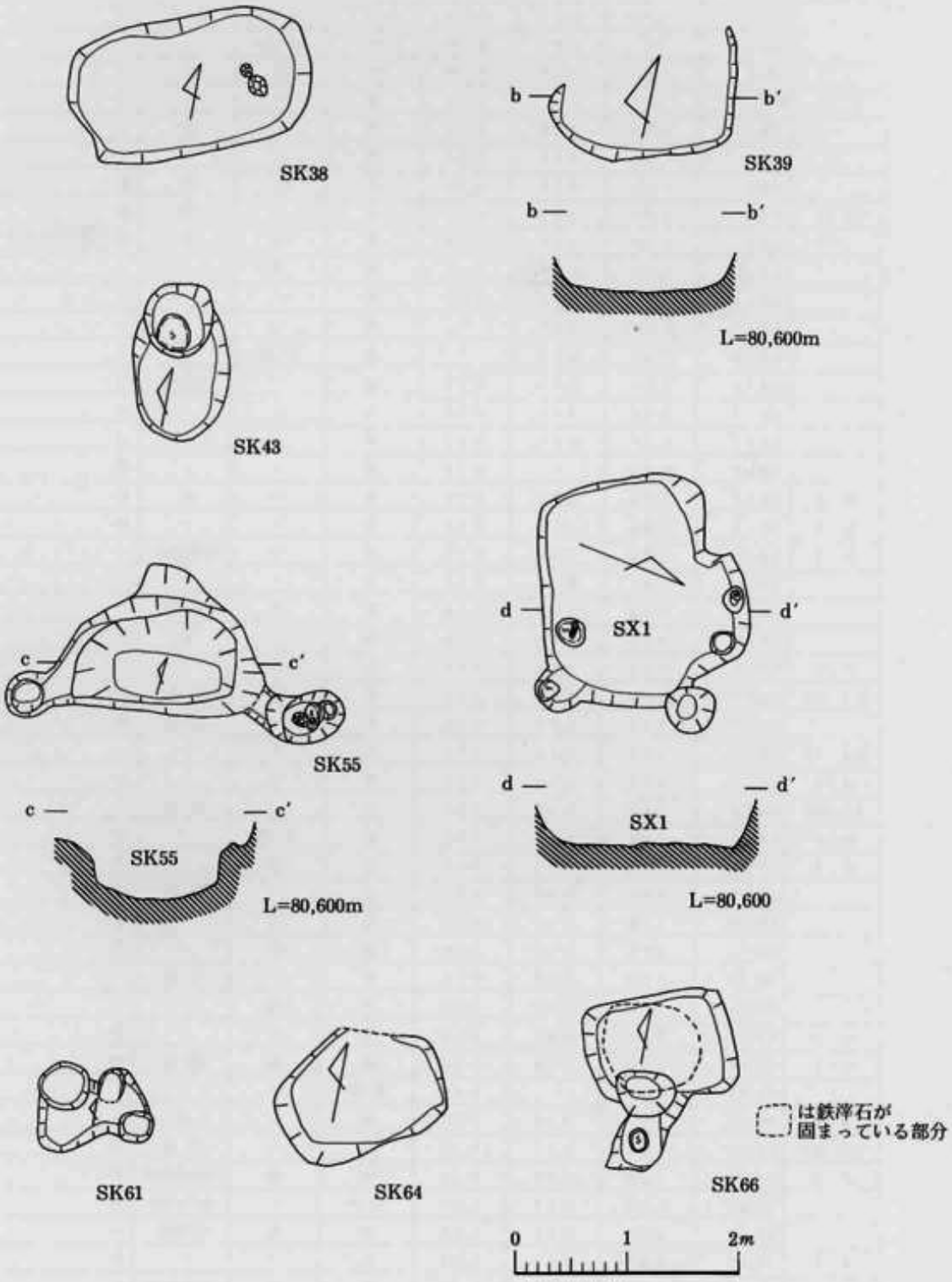
挿図－7　溝状遺構実測図



挿図－8　ＳＤ１遺物出土状況図①、石組１，２平面図②③


は赤褐色の固まりの部分
a
a′
SK2
SK7
SK19
a—
—a′
L=80,600
SK2
SK24
SK26
SK29
SK9
SK8
SK41
SK69
0
1
2m

挿図－9　土坑実測図(1)


SK38
b
b′
SK39
b
b′
L=80,600m
SK43
c
c′
SK55
c
c′
SK55
L=80,600m
d
d′
SX1
d
d′
SX1
L=80,600
SK61
SK64
SK66
は鉄滓石が
固まっている部分
0
1
2m

挿図－１０　土坑実測図(2)

グリッド番号	遺構番号	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	覆土含有物	出土遺物	備　　考
M 7	SK1	—	—	—	—	㋑	—	—
	SK2	1.42	1.20	0.4	円	㋑ ㋚	㋕ ㋑	㋐
	SK3	—	0.80	0.25	長	㋑ ㋚	—	—
	SK4	1.50	1.10	0.18	長	㋑	㋑	—
N 7	SK5—1	—	—	0.15	長	—	—	—
	SK5—2	1.26	0.88	0.17	長	—	㋕	—
	SK6	1.30	0.70	0.04	長	—	—	—
	SK7	1.88	0.80	0.20	長	㋑	㋑	㋓
O 7	SK8	1.60	0.82	0.25	長	—	㋕	㋓
	SK9	1.76	0.80	0.29	長	㋑	㋒	㋓ 円盤状皿のような固いもの
	SK10	1.40	0.70	0.15	長	㋑	—	—
	SK11	—	0.70	0.04	長	—	—	—
	SK12	(1.30)	0.80	—	長	—	—	—
	SK13	1.10	0.70	—	長	㋑ ㋚	㋒	—
	SK14	1.20	0.66	0.20	長	—	㋒㋕㋑	—
	SK15	0.46	0.62	0.06	方	—	—	—
	SK16	1.30	0.62	0.07	長	—	—	—
	SK17	0.92	—	0.08	長	—	—	㋓
O 8	SK18	1.52	0.86	0.05	長	—	㋑	㋓
Q 8	SK19	1.34	1.10	0.75	不	—	—	㋓
P 9	SK20	0.98	0.56	0.30	長	—	㋚㋐㋕㋑	—
	SK22	1.40	0.72	0.10	不	—	—	—
	SK23	1.42	1.20	0.20	長	㋑	㋚ ㋐	—
	SK24	1.26	1.14	0.14	長	—	㋒	㋓
P 10	SK25	1.28	0.64	0.04	長	—	—	—
N9 O9	SK26—1	2.02	0.90	0.10	長	㋑	㋑ ㋒	㋓
	SK26—2	0.44	0.28	0.31	円	—	㋕ ㋑	㋓
N9 10	SK27	0.64	0.42	0.05	円	—	—	—
N 10	SK28	1.80	0.92	0.10	長	—	—	—
N10 M10	SK29	1.80	0.90	0.40	長	—	㋐ ㋒	
M 10	SK30	1.50	0.94	0.09	長	㋑ ㋚	—	㋐
Q 8	SK31	1.70	0.84	0.06	長	㋑	—	㋓
	SK32	0.94	0.90	0.09	方	—	㋕ ㋒	㋓
	SK33	1.22	0.54	0.08	長	㋑	—	㋓
	SK34	1.76	0.80	0.48	長	㋑	—	㋓
	SK35	1.00	0.56	0.12	長	—	㋑ ㋕	—
	SK36	—	0.80	0.26	円	㋑	—	—
Q 9	SK37	0.86	0.30	0.12	長	—	—	㋓
Q 10	SK38	2.20	1.20	0.20	長	㋑	㋙ ㋐	㋓
	SK39	1.66	—	0.40	不 長	—	—	
M 8	SK40	—	0.50	0.12	長	—	㋐	—
M8 N8	SK41	1.56	1.30	0.35	長	—	㋚ ㋒	㋓
P 8	SK43	1.40	0.84	0.20	円	㋑	㋚㋒㋕㋑	㋓
	SK44	1.20	0.98	0.17	不 円	—	㋕㋑㋒㋒	㋓
	SK45	0.80	0.60	0.15	長	㋑	㋑㋕㋒	—
N 7	SK47	3.88	0.42	0.24	長	—	—	㋓
	SK48	0.98	0.64	0.22	長	㋑	㋑㋕㋚㋒	—
M 8	SK50	1.30	0.70	0.09	不	—	—	㋓

表－1　土坑一覧表 (1)

グリッド番号	遺構番号	長　軸	短　軸	深　さ	形　態	覆土含有物	出土遺物	備　考
O 8	SK52	—	—	0.17	不	—	㋕	Ⓟ
O 9	SK53	0.76	0.76	0.27	円	—	—	—
O 8	SK54	0.62	0.54	—	円	—	㋜	—
	SK55	1.70	1.10	0.70	長	㋑	㋑	—
	SK56	0.70	0.48	0.40	円	㋑	㋑	—
P 9	SK60	1.80	0.36	0.07	長	—	—	—
O 8	SK61	0.98	0.80	0.15	不	㋑	—	Ⓟ
M 6	SK62	1.08	—	0.31	長	—	—	—
	SK63	1.30	1.12	0.15	長	—	—	Ⓟ
	SK64	1.50	0.90	0.20	長	—	—	—
	SK65	0.66	0.58	0.25	方	—	—	—
N 6	SK66	1.32	0.94	0.30	長	—	㋑	Ⓟ
M6 N6	SK67—1	0.82	0.30	0.17	長	—	—	—
	SK67—2	1.92	0.82	0.17	不	—	—	—
O 6	SK68	0.44	0.40	0.26	方	—	㋑	Ⓟ
O7 6	SK69	1.90	1.10	0.40	長	—	㋑	—
O 6	SK70	1.92	0.40	0.17	長	—	—	—
	SK71	—	0.60	0.28	長	—	—	Ⓟ
	SK73	—	0.52	0.16	長	—	—	—
P 7	SK74	1.76	1.00	0.05	不	—	Ⓣ	Ⓟ
	SK75	0.58	—	0.21	長	—	—	—
P 7	SK76	1.34	1.02	0.11	長	—	—	—
P7 8	SK77	—	1.06	0.10	長	—	㋕㋑Ⓣ	Ⓟ
	SK78	0.84	0.58	0.13	長	—	—	—
O 8	SX1	1.92	1.48	0.30	長	㋑	ⓉⓉ㋑㊐	Ⓟ

（凡　例）

形態

長 — 隅丸長方形

円 — 楕円形

方 — 隅丸方形

不 — 不定形

覆土含有物

イ — 鋳型細粒片

モ — 木炭

出土遺物

カ — 鉄滓

イ — 鋳型片

ト — 陶器類

ヤ — 山茶椀

ジ — 磁器類

セ — 石器類

ド — 土器類

テ — 鉄器類

銭 — 銭貨類

青 — 青銅器類

備考

ア — 赤褐色のかたまり

P — 中にピット

長軸、短軸、深さ

単位はm

（　）の数字は推定

表－2　土坑一覧表 (2)

Ⅶ 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器片、石器類、山茶椀片、土師質土器片、陶磁器片、銭貨類と大量の鉄滓、鋳型片である。遺構からの出土は少なく、大半が①②層の包含層からの出土である。種類は多いが実測に耐えうるものは少ない。以下実測可能なものを、遺構出土遺物と、包含層出土遺物に分けて述べることとする。尚、実測不可能のものでも、特徴的なものは記述する。又、鉄滓、鋳型については、一括して記述する。

1. 遺構出土遺物

・ＳＤ１出土遺物 ＳＤ１の底部及び覆土中より山茶椀、すり鉢、天目茶椀、皿などの陶器片、青磁、石斧等が出土している。

(1) 山茶椀（挿図１０－１）

推定直径１０.２㎝の椀である。口縁部のみのため、形態は不明である。内外面とも、ロクロ調整が施される。色調は黄白色を呈する。１４世紀後半のものと思われる。

(2) 陶器類（挿図１０－４～１９、１１－２・３、図版８－１～９、１２－１）

○すり鉢 口縁部の形態により、次の３タイプに分類できる。(註１)

Ⅰ類―口縁端部に縁帯を形成するタイプ

Ⅱ類―口縁端部が折り返され、丸く収まるタイプ

Ⅲ類―口縁内部に突起を有するタイプ

４個体分程確認したが、釉は全てサビ釉である。

(2)は、ほぼ完形のもので、推定口径３１.２㎝、器高１０.８㎝、底径１１.０㎝を測る。片口のすり鉢で、口縁部形態はⅡ類に属し、折り返しは体部に対してほぼ垂直であるが、体部とほぼ平行に縁帯も有する。口縁端部は内側に突起状につまみ出された状態で、下部にケズリ調整により段を有する。体部はほぼ逆「ハ」字状に開くが、口縁部付近でやや外反する。この部分の内側は、やや凹む。内面の櫛目は幅1.6㎝で、９本を１つの単体としたもので推定で１５・１６方に施されており、どの櫛目も体部中央から下方へ重ねて施文される。底部まで施文されるものは、計４本であり、ちょうど「十」字状になっている。釉はつけがけにより施釉される。

(3)は、推定口径３５.４㎝で、口縁部形態はⅢ類に属する。形態は逆「ハ」字状に開き、口縁端部で外反し丸く収まる。内側の突起は鈍いが、断面では明瞭な稜を持つ。この突起の下幅1.5㎝は、わずかに凹んでいる。櫛目は幅2.7㎝で、１０本で１単位となる。内外面ともロクロナデ調整されロクロ目が顕著に残る。

(4)は推定口径３０.２㎝で、口縁部形態はⅡ類に属する。

○天目茶碗 いずれも大窯Ⅳ期、１６世紀中葉頃のものと思われ又、全て鉄釉のものであり、４個体分出土した。

(5)は推定口径１１.８㎝、器高6.6㎝、高台径4.0㎝を測る。高台は、ほぼ垂直に立ち上がる。ケズリ出し輪高台で、内面はそれほどケズられていない。器形は高台からほぼ逆「ハ」字状に開き

体部上方でやや丸味をもち、わずかにくびれて外反する。内面は滑らかであるが、外面は体部下部で釉による凹凸がある。下部はサビ釉が化粧がけされるが、ケズリ調整痕がみられる。内面はかなり使用されたようで、底は釉がはげている。胎土は緻密、色調は茶褐色を呈する。

(6)は推定口径１１.７㎝を測る。器形は丸味を持ちながら立ち上がり、口縁部で内側にくびれて外反する。焼成不良で発色は悪い。下部は無釉で粗いケズリ調整痕が残る。高台部分との境はケズリ調整により平坦面を持つ。釉の厚さは約１㎜である。

(7)は推定口径１３.１㎝を測る。体部は丸みを帯びた後、ほぼ垂直に少し立ち上がり、わずかにくびれ直ぐ外反する。このくびれ部には釉がたまる。胎土は緻密、色調は黒褐色を呈する。

(8)は高台径４.０㎝のケズリ出し輪高台を持つ。高台内面は、それほどケズリ出されていない。高台はやや開き気味に立ち上がり、体部へ続く高台及び体下部は、サビ釉により化粧がけされ、天目釉が上部よりたれ流れている。

(6)は１８世紀前葉、その他は大窯Ⅰ期、１６世紀初頭のものと思われる。

○その他碗類

(9)は推定口径７.２㎝、器高４.８㎝、高台径３.８㎝を測る小椀である。釉は剥離してほとんどないが、口縁端部にわずかに残り、クリーム色を呈する。高台はケズリ出し輪高台である。体下部及び高台内外面は粗いケズリ調整痕が残り、体上部もケズリ調整のまま施釉しているようである。体部内面はロクロナデ調整される。体部は丸みを持って立ち上がり、そのまま収まる。

(10)は推定口径８.４㎝、器高４.４㎝、高台径２.２㎝を測る小椀である。高台はケズリ出し高台で内外面及び体部との境部分はナデ調整される。体下部は、ケズリ調整痕が残る。器形は、腰部はどっしりとしており、ほぼ直線的に立ち上がる。釉は黄色をした透明釉である。

○皿類

(11)は鉄釉の稜皿で、推定口径１０.３㎝、器高２.２㎝、高台径６.４㎝を測る。器形は逆「ハ」字状に開き、口縁端部付近で外反し丸く収まる。高台は内面のみケズリ出している。大窯Ⅰ期、１６世紀前葉と思われる。

(12)は菊皿で、推定口径１４.０㎝、器高３.９㎝、高台径８.０㎝を測る。高台はケズリ出しによるもので、外面はほぼ垂直であるが、内面は「ハ」字状に開きふんばりがある。内外面ともロクロナデ調整を施す。体部は内外面とも型抜きにより施文されているが、口縁端部は手で整形されたものと思われる。体部下半は、ケズリの後、ロクロナデ調整される。１７世紀後半のものと思われる。

○甕類

(13)は推定底径１２.４㎝を測る。体下部はケズリ調整される。内面には、鉄釉が施される。

(14)(15)はサビ釉の甕で、それぞれ推定底径１２.４㎝、１６.６㎝を測る。(14)は底部及び体最下部には糸切り痕が残る。底部及び体部の外面は、釉がふき取られている。(15)の底部及び体下部には、粗いケズリ痕が残る。ロクロ回転は、右廻りである。

(17)は推定口径２７.６㎝を測る。かなり大型の甕で、鉄釉が施される。

○壺類

(16)は推定口径１１.６㎝を測る。サビ釉が、内外面とも施される。口縁部は、体部上半から「ハ」

字状に立ち上がり、端部近くで外反し丸く収まる。端部は上面に、平坦面を持つ。

○その他

⒆は推定口径１３.０㎝を測り、釉は御深井釉であり、内面は口縁端部から下１０㎝程まで施される。体部はほぼ直立しているが、口縁部近くでわずかに丸味を帯びる。内面も、この部分でやや内湾する。口縁端部は、内傾する平坦面を持ち、断面は肥厚している。外面にはすり絵による葉の文様が施されている。内面には、ロクロ成形時のコテ痕が残る。色調は、淡いクリーム色を呈する。１７世紀後葉のものと思われる。

(3) 青磁（挿図１０－８、図版１８－１）

⒅は推定高台径約５.０㎝を測る碗である。高台はケズリ出しであり、内面はレンズ状にふくれている。底部は厚く、１.６㎝ある。又、断面をみると、底部外面から０.５㎝中程までは淡い赤味を帯びており、焼成は甘いようである。釉は高台内面まで施釉されていたようである。釉の厚さは１㎜程である。中国青磁である。他の出土遺物からみて、１６世紀前半のものと思われる。

(4)その他（挿図１０－２０、図版８－１０）

⒇は打製石斧で、現存長１２.３㎝、最大幅５.９㎝、厚さ１.２㎝を測る。石材は粘板岩である。この他、鉄釉の甕、サビ釉のすり鉢、灰釉の（四耳）壺などの陶器片がある。１５～１８世紀前葉のものが出土している。(註２)

・ＳＤ２出土遺物、覆土中及び底部より、弥生土器、天目茶碗、甕類、水注などの陶器、土師質土器、釘などが出土した。

(1) 弥生土器（挿図１１－２１、図版９－１）(註３)

弥生時代中期の貝田町式土器の底部である。推定の底径は１０.２㎝を測る。外面は底面との境まで、丁寧な条痕が施されており、内面も丁寧にナデ調整される。底面は非常に薄く、最も薄い部分では３㎜程しかない。胎土には１㎜程度の砂粒が多く入る。

(2) 陶器類

○碗類（挿図１１－２２、図版９－２）

㉒は推定口径９.４㎝、器高４.３㎝、高台径３.８㎝を測る天目茶碗である。高台はケズリ出し輪高台で、内外面ともケズリ調整痕が残る。高台下半は面取され稜を持つ。体部との境は、ロクロナデ調整される。体部は、逆「ハ」字状に立ち上がり、中央やや上で丸味を持って内湾し、「く」字状に屈曲するように外反する。１７世紀第２四半期のものと思われる。

○水注、水滴（挿図１１－２３・２４、図版９－３・４）

㉓は水注で、推定底部径９.５㎝、現存高１４.６㎝を測る。口縁部及び注ぎ口は、欠損している。肩部に注口貼付部分が残る。耳はつかないと思われる。底部から丸味を持って立ち上がり、ほぼ胴部中央で最大径（約１７㎝）に達し、注ぎ口の高さあたりから、急に丸味が強くなる。胴部中央とその約１㎝上に１条の、又、注ぎ口とその上約２.５㎝のところに２条の沈線が入る。底部外面には糸切り痕が残り、回転方向は右廻りである。体部下部は篦ケズリ調整され、内面はナデ調整される。ロクロ目が残る。釉は灰釉で、外面のみの刷毛がけである。尚、底部の一部は、ＳＤ１の底より出土している。古瀬戸系の陶器で、１５世紀初頭から前葉のものと思われる。

㉔はサビ釉の水滴である。口径2.7㎝、器高3.2㎝、底部径3.8㎝を測る。釉は、口縁立ち上がり部内面、及び外面胴部中央下まで刷毛がけされる。外反した後すぐ丸まり、肩部で平坦になり、やや凹んで短く外反する。扁平な器形を呈する。注口は小さくつまみ出された突起物の後ろに、直径0.5㎜の穴が焼成前に外面から穿孔される。底部内面中央部は、篦ケズリにより凹んでいる。外面はロクロナデ調整される。㉓と、ほぼ同様の時期である。

○その他（挿図１１－２５～２７、図版９－５）

㉕は灰釉の碗で、推定口径4.6㎝を測る。

㉖は口縁部のみで、器形は不明である。

㉗は推定口径１2.2㎝を測る。御深井釉の小皿である。

これらは１７世紀後葉のものと考えられる。この他すり鉢、天目茶碗を始め、器種、器形不明の陶片が多数、土師質土器、釘などが出土している。出土遺物は、１５世紀前葉～１７世紀後葉までのものである。

・ＳＤ３出土遺物　覆土中より、山茶碗、陶器、土師質土器等の破片が出土している。

(1)　陶器類（挿図１２－２８～３２、図版９－６、１２－２）

○すり鉢㉘

推定口径２8.6㎝を測る。サビ釉のすり鉢で、口縁部の形態はⅠ類に属する　大窯Ⅰ期に属するものである。

○皿類

㉙は推定口径１1.2㎝を測る高台付の皿と思われる。器形は高台から緩やかに逆「ハ」字状に開き、その後鋭く屈曲し、外反しながら立ち上がり、口縁端部ではやや肥厚する。釉は淡黄緑色を呈する灰釉で、内面全面と、外面屈曲上部に刷毛がけにより施釉される。体部下半は篦ケズリの後、ロクロナデ調整される。

㉚は推定口径１4.6㎝を測る。器形は若干丸味を帯びて立ち上がり、口縁部やや下でわずかに内湾して外反する。体下部は、一部施釉されない。外面は篦ケズリの後、ロクロナデ調整される。

両者とも１７世紀後葉のものと思われる。

○甕類

㉛は推定口径２7.6㎝を測る大型の甕である。茶灰色を呈する鉄釉が施釉されている。口縁部形態は外反して立ち上がってきた体部が「く」字に内屈して端部に達する。端部は内面に凹んだ面を持つ。この他にも同一個体が一点ある。

㉜は推定底部径１4.0㎝を測る。底部及び体部外面は、篦ケズリの後、ロクロナデ調整されている。釉は鉄釉で、内面と体下部まで施釉され、体部下端では、流れたものがかたまっている。

㉝は暗緑色を呈する灰釉の甕で、断片的な出土で正確な大きさは不明であるが、特大のものと思われる。チョウチョ状の耳のすぐ上に、不規則な沈線が施される。同様なものが、ＳＤ１からも出土しており、恐らく同一個体と思われる。

この３点は１５世紀代のものと思われる。

(2)土師質土器（挿図１２－３４・３５、図版１２－２）

(34)は推定口径１８.２㎝を測る坏である。底部で丸みを持つと思われるが、体部は逆「ハ」字状に直線に開き、口縁部近くで若干外反する。内面は体部中央でやや肥厚して外反する。内外面ともナデ調整されるが、外面下部は凹凸がある。

(35)は推定口径８.８㎝の小皿である。内外面ともナデ調整される。断面中央は、淡黒灰色を呈している。色調は黄白色を呈する。

両者とも、いわゆる「かわらけ」と呼ばれるものであろう。他の出土遺物と考え合わせて、１５世紀頃のものと思われる。

この他にも、山茶椀の椀、すり鉢、甕等が出土している。１５世紀から１７世紀後葉までの遺物が出土している。

・石組１出土遺物

(1) 石器類（挿図１２－３６、図版８－１０）

現存長９.７㎝、幅４.０㎝、厚さ０.５㎝を測る打製石斧である。石材は、粘板岩である。

(2) 陶器類（挿図１２－３７～４１、４３・４４、図版１３－１）

○碗類

(37)は推定口径９.６㎝を測る。黄色を呈した灰釉のかかる小碗で、外面は篦ケズリの後ロクロナデ調整され、内面もロクロナデ調整される。高台との境は無釉である。器高は低いと思われる。

(38)は推定口径９.８㎝の碗であり、釉は灰釉である。

(40)は内面下部は釉がふき取られている。１７世紀後半頃のものと思われる。

○皿類

(41)は折縁皿で、推定口径１４.４㎝を測る。高台は端部に平坦面を持つが、ほぼ三角形を呈する。体部は篦ケズリにより稜を持ち、口縁部で外反し、端部はつまみ出しである。内面には文様が施される。高台及び体部外面は、篦ケズリの後ロクロナデ調整されるが、やや粗雑である。

(42)は推定口径１４.８㎝を測る皿で、高台がつくと思われる。外面は篦ケズリの後、ロクロナデ調整される。体下部は無釉である。底部近くは丸味を若干持ち、体部中央から逆「ハ」字状に立ち上がり、口縁端部内面はやや外反する。１７世紀後半のものと考えられる。

○その他の陶器類

(39)は推定底部径５.６㎝で、無高台の鉄釉のかかった油壷である。底部及び体部外面は、ロクロナデ調整される。体下部は無釉である。１７世紀半ばのものと思われる。

(43)は推定高台径６.８㎝を測り、筒形、筒状のものになると思われる。釉は灰釉で、体部外面及び高台中央部に施釉される。高台はケズリ出しで、幅が１.７㎝の平坦面を持ち、器形は底部から体部へ鋭く屈曲し、ほぼ垂直に立ち上がる。内外面とも篦ケズリの後、丁寧なロクロナデ調整を行う。１９世紀代のものと思われる。

○すり鉢

推定口径２５.８㎝を測る鉄釉のすり鉢で、口縁部形態はⅢ類に属する。幅３.０㎝、１１本を１つの単体とした櫛状のもので、体部から底部へ向けて施文されている。１７世紀後半頃のものと思われる。

その他、碗、すり鉢等の陶片、山茶椀、土師土器片などが出土している。一部攪乱により１５世紀代のものも入るが、１７世紀半ば～後半のものと思われる。

・集石１出土遺物

(1)　山茶椀類（挿図１２－４５～４７、図版１３－２）

(45)は推定口径１０.８㎝を測る椀で、口縁部端部外面はつばのように引き出される。体部は丸味を帯びている。

(46)は推定口径１１.０㎝を測る椀で、口縁端部は丸味を持って屈曲する。内面にはロクロ痕が残る。

(47)は推定口径１２.８㎝を測る椀で、口縁端部はやや外反するが、器厚はかなり薄い。

(45)は脇之島３号窯式期、１５世紀前葉、(46)は生田２号窯式期で、１５世紀中葉のものと思われる。

(2)　陶器類（挿図１３－４８～４９－２、図版９－７、１３－２）

(48)は推定高台径5.6㎝の鉄釉がかかった天目茶碗である。高台はケズリ出し輪高台で、高台及び体下部はサビ釉が化粧がけされている。

(49－1) は推定底部径8.4㎝のすり鉢で、サビ釉が総がけされる。底部には、糸切り痕が残る。櫛目は幅2.3㎝、１４本を１つの単位として体上部から底部へ向かって施文される。

(49－2) は壷で、釉は鉄釉である。肩部は張りを持ち、口縁端部近くに篦状工具により条線を持ち、外へ折り返された格好になる。推定口径１０.８㎝を測る。内面側の釉は、肩部までかけられている。

(48)は大窯期、(49－1) は同Ⅲ期のもので、(49－2) は１９世紀代のものと思われる。

(3)　その他

陶丸（挿図１３－５０、図版13－２）が一点出土している。直径約2.4㎝の球体である。

この他、サビ釉の甕、すり鉢、灰釉の碗等の陶片、土師質土器の詳細は不明である。

総じて、１５～１６世紀後半頃のものと思われる。

・集石２出土遺物

(1)　山茶椀類（挿図１３－５１～５５、図版９－８、１０－３）

(51)は推定口径9.4㎝、底径3.9㎝、器高3.0㎝を測る椀である。底部外面には、右廻りの糸切り痕が残り平坦である。体部は丸味を持ち、口縁端部は内外面とも内湾する。内面には篦状工具等により、４本の条線が入る。胎土は緻密で、色調は黄白色を呈する。

(52)は推定口径8.4㎝、推定底径3.6㎝を測る。(51)と同様に内面に条線を持つ。器形は直線的に開くと思われる。色調は淡黄褐色である。

(53)は推定口径9.8㎝、推定底径4.4㎝、器高2.0㎝を測る椀で、体部はやや丸味を持ち口縁端部はやや肥厚して内湾する。内面には成形時のロクロ痕が残る。底部内面に自然釉がかかる。

(54)(55)は小破片であるが、(52)とほぼ同様な形態と思われる。脇之島３号～生田２号窯式期、１５世紀前葉～中葉のものと思われる。

(2)　陶器類（挿図１３－５６～６１、図版１４－１）

(56)は天目茶碗である。(56)は推定口径１１.０㎝を測る。釉調、胎土から(48)と同一形態と思われる。体部上半はやや丸味を持つが、ほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部下で条線が入ってくびれて外反す

る。

57は、推定口径１２.２㎝を測る。口縁部近くで緩やかに内湾した後わずかに外反し丸く収まる。

58は祭祀具の一種で椀状の部分であり、推定口径１０.２㎝を測る。器形は丸味を持つが、あまり開かずに立ち上がるようで器高は低いと思われる。黒褐色の鉄釉が施される。１５世紀代のものと思われる。

59・60はサビ釉が施釉されたすり鉢である。59は推定口径３０.０㎝を測る。口縁部形態はⅡ類に属し、器形は体部上半で外反しながら口縁部へ続く。60は推定底径８.６㎝を測り、底部及び体下部外面には糸切り痕が若干残る。ロクロは、左廻りである。櫛目は幅２.７㎝で１０本を１単位としており若干粗い。

61は鉄釉の稜皿で、推定底径６２㎝を測る。

59・60は大窯Ⅰ～Ⅱ期、その他は大窯Ⅰ期で、ほぼ１６世紀前半のものと思われる。

○土師質土器（挿図１３－６２、図版１４－１）

推定口径７.４㎝の小皿で、手づくね状のものである。口縁端部にこげたような跡があるため、燈明皿の可能性がある。１５世紀後半～１６世紀前半のものと思われる。

この他いわゆる鉄釉の壺、鉄釉の甕、すり鉢の他、碗、皿類などの陶片、土師質土器、山茶他、近世の磁器も出土している。陶片は小破片ばかりで、器形などは把握できないが、灰釉のものが多い。攪乱により一部新しいものも入るが、１５世紀～１６世紀前半までのものが中心に出土している。

・その他の遺構出土遺物

(1)　山茶椀類（挿図１４－６３～６９、図版１４－２）

63～67は椀であり、体部は丸味を帯びており、口縁端部付近でやや内湾する。65は特に内湾する。内面は指ナデ調整により起伏が残っているが、67は、ロクロナデ調整により、起伏がとれている。63～65は、口縁端部が面取りされている。67は焼成の関係か口縁端部外面が変色している。推定口径は63から順に、９.６、１０.４、１１.２、１２.０、１１.８㎝である。68もほぼ同様な形態を呈するが、やや開き気味である。底部外面には、右廻りの糸切り痕を残す。内外面ともロクロナデ調整を行うが、外面下半は成形時の痕跡がある。推定底部径５.０㎝を測る。69も口縁端部が折り返されて内面がつまみ出されている。推定口径は１０.８㎝である。

69は大窯製品で１６世紀に入るが、その他は脇之島３号窯式期、１５世紀前葉～半ばのものと思われる。

(2)　陶器類（挿図14－70～73、75～81、84・85、15－82・83、図版10－2、15－1・2）

70～72は天目茶碗である。黒褐色の鉄釉が施釉される。72は推定口径９.０㎝と小型である。丸味を帯びて立ち上がり、屈曲して外反する。内面の湾曲は大きい。体下部は篦ケズリされ、サビ釉が化粧がけされる。70は屈曲が緩やかで、その幅は長く、わずかに外反する。体下部は篦ケズリ調整され、鉄釉が化粧がけされる。推定口径１２.０㎝である。70・72とも高台はケズリ出し輪高台と思われる。71は、体部下半はほぼ直線的に外傾し、体部上半で丸味を持ち、屈曲せずに口縁端部のみ外反する。推定口径１２.６㎝を測る。

(72)は大窯Ⅰ期、(70)(71)は大窯Ⅱ期のものと思われる。

(註4)

(73)は推定口径１１.６㎝の無高台の皿で、口縁端部内外面には鉄釉が施釉される。底部外面には右廻りの糸切り痕が残り、墨書で「三」と書かれている。体部外面はロクロナデ調整、内面は箆ケズリの後、丁寧なロクロナデ調整される。体部外面は丸味を持つが、内面は底部と体部の境が明瞭で、直線的に立ちのぼる。底部内営中央は、凹んで薄くなる。時期は大窯１期、１６世紀初頭のものと思われる。

(75)は灰釉の碗である。推定口径9.8㎝を測る。薄い暗緑色を呈する。江戸時代のものと思われる。

(76)は皿で、体部は少し上方に伸びた後、大きく外反する。推定口径１３.６㎝を測る。大窯Ⅰ期のものと思われる。

(77)は推定口径１０.８㎝の仏花瓶の口縁部で、口縁端部は鋭く面取りされる。内外面ともロクロナデ調整され、鉄釉が施釉される。１７世紀後半のものと思われる。

(78)～(80)は、サビ釉のすり鉢である。(78)は推定底径8.6㎝を測り、器形は逆「ハ」字状に開き、口縁部近くでやや外反する。内面の櫛目の上部に、幅の狭い凹みがある。櫛目は幅1.3㎝、７本を１単位とする。底部は全面に櫛目が施される。全体にやや薄手である。(79)は推定底径１０.０㎝を測り(78)と比べると調整は粗雑で厚みがある。内面の底部と体部の境は湾曲している。櫛目も１単位が幅広で粗い。底部内面には、使用痕がある。(80)は口縁部のみでⅢ類に属する。突起はあまり鋭角ではなく、丸味を帯びる。推定口径１８.４㎝とやや小さい。

(80)は大窯Ⅰ、Ⅱ期、(78)(79)は大窯Ⅱ、Ⅲ期と、やや新しいものである。

(81)は推定口径１３.０㎝を測る鉄釉の茶壷である。口縁部は肥厚して「く」字に屈曲する。丁寧なロクロナデ調整により、角が取られている。体部はあまり張りを持たない。大窯Ⅰ、Ⅱ期頃のものと思われる。

(82)は推定底径１４.０㎝を測る鉄釉の壷に類する。施釉は体下部及び底部外面を除いて施される。底部外面及び体下部は、箆ケズリされる。底部外面は更にロクロナデ調整される。外面の体部と底部の境は鋭角であるが、内面は丸味を持つ。器形は丸味を持って立ち上がる。同じ高さで部分により厚さが異なる。内面は成形時のロクロ痕が残る。底部内面には一部発色が悪く、緑色を呈する部分がある。全体に調整は丁寧である。大窯Ⅰ期、場合によれば、もう少し古くなる可能性がある。

(83)は筒形容器の一種である。釉は鉄釉で、暗緑色を呈する。釉は安定しており、泥が多く含まれるものと思われる。内外面とも体下部を除いて刷毛がけされる。体下部の無釉部分は、箆ケズリの後、ロクロナデ調整されるが　内面の底部付近は調整が粗雑である。体下部は丸味を持つが、その後直立する。大窯Ⅰ、Ⅱ期でもⅡ期に属する可能性が高い。

(84)は鉄釉の壷で、推定口径２４.６㎝を測る。口縁部は肥厚して「く」字状の突起を持つ。内面は端部やや下に段を持ち、その間は凹んだ面になる。段の下もやや凹む。大窯Ⅱ期のものと思われる。

(85)は鉄釉の鉢で、推定口径１１.０㎝を測る。口縁部は断面方形の突帯を持ち、端部は平坦面を有する。

(3)　磁器類（挿図１４－７４・８６、図版１５－１）

(74)は推定口径9.4㎝を測り、体部上半は丸味を持ちながら直上方向に立ち上がる。体部下半は口

縁部と比べるとかなり厚い。

(86)は推定口径8.4㎝を測る碗で、白釉がかかる。体部は丸味を帯び、口縁部やや下で稜を持ち、その後直ぐ外反する。

(4) 土師質土器類（挿図１４－８７・８８、図版１５－１）

(87)(88)は皿である。(87)は推定口径１１.８㎝を測る。体下部から外反しながら立ち上がる。口縁部下に篦状工具による沈線が入る。黄白色を呈する。(88)は推定口径１０.０㎝を測る。１５世紀後半頃のものと思われる。

以上の他、鉄釉の甕、サビ釉のすり鉢、天目茶碗、灰釉系の碗、甕等の陶片、近世の磁器、土師質土器（外面にススの付着したものあり）、山茶碗や釘、石斧などが出土している。

(5) 銭貨類（表３、図版１８－２）

ＳＫ３８覆土上面より、合計１１９枚の中国銭が出土した。サビにより文字の読み取れないものが３０枚あったが、その他は、文字の解読が可能であった。種類は２８にのぼり、最古のものは、「開元通宝」で唐代、最新のものは「永楽通宝」で明代である。ほとんどがいわゆる宋銭で、１１世紀鋳造のものが主流である。最も多いものは「皇宋通宝」で、１５枚を数える。「永楽通宝」の初鋳造年が、１４０８年であることから、１５世紀前半以降に使用されたものと思われる。

2. 包含層出土遺物

包含層である①、②層から多量の遺物が出土している。時期的には若干新しいものも入るが、遺構出土のものとあまり大差はないと思われる。

(1) 山茶碗類（挿図１６－８９～１０４、図版１６－１）

(89)は無高台の椀で、推定口径１３.０㎝、器高３.７㎝を測る。底部と体部の境は丸味を持って立ち上がり、逆「ハ」字状に開き、口縁端部でわずかに外反し、面取りされる。内外面ともロクロナデ調整される。色調は灰色を呈する。

(90)～(103) も無高台の椀である。底部が小さく、体部は丸味を帯びており、口縁端部近くで内湾するもの（90～95、102）としないもの（95～98、103）がある。器高が低いため、やや扁平な器形を呈する。口縁端部は全て面取りされる。(102)は、端部が内面に折られている。体部内面は成形時のロクロ痕が残っており、隆起部分はコテなどにより先がつぶれている。内外面ともロクロナデ調整されており、丁寧なものは、ロクロ痕がうすれている(91、96、99)。(91)・(100)は、底部内面が凹む。(100)は体下部に稜を持つ。口径は推定で８.２～１２.６㎝とやや幅がある。(90)は、推定口径９.８㎝、器高２.１㎝を測る。(95)は、生田２号窯式期、それ以外は脇之島３号窯式期と思われる。

(104)は、高台付の椀で、高台は底部端よりやや内側につけられ、高台端部は両方から面取りされ５角形を呈する。モミガラ痕が残る。高台の接着部は、内外面ともナデられている。体部は内外面ともロクロナデ調整される。器形は、ほぼ逆「ハ」字状に立ち上がる。明和１号窯式期、１４世紀前葉のものと思われる。

(2) 陶器類

○椀類　（挿図15−105〜114、116・117、16−115、図版16−2、17−1）

天目茶碗（挿図15−105〜110）

体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部やや下で湾曲してくびれ、口縁付近で折れ、口縁端部で外反するもの（105〜108）と、湾曲は弱くそのまま立ち上がって口縁端部で外反するもの（109、110）、湾曲するが、口縁端部では外反しないもの（111）がある。（105）は、推定口径11.8㎝を測り、湾曲部は丸味を持ち滑らかに外反する。体下部はサビ釉が化粧がけされるが、体部にかけられている釉が流れている。（106）は、屈曲しているといったほうがよく、その後わずかに外反する。やや厚味を持つ。推定口径12.0㎝。（109）は緩やかに丸味を持って立ち上がり、口縁端部で外反する。体部下半は篦ケズリされ、その上にサビ釉が化粧がけされる。体部下端は、ケズリ込まれている。（110）は体部外面にロクロ痕が残る。釉は全て鉄釉であるが色調が異なり、黒色系と茶色系の2種がある。（111）は、サビ釉が強い。（109）・（110）は大窯Ⅰ期、（105）・（107）は同Ⅱ期、（106）・（108）・（111）は、同Ⅴ期である。

○その他の碗　（挿図15−112〜115）

（112）〜（114）は丸碗である。体部はほぼ直立して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。

（114）は灰釉で、他のものは鉄釉である。（115）は体部中央でくびれた後外反する器形を呈し、口縁部内外面にはサビ釉が施釉される。（116）は鉄釉が施されており、体部上半には篦状工具により平行の沈線が施される。（117）は小碗で「ぐいのみ」である。釉は灰釉である。

時期は、（115）は大窯Ⅰ期、或いは古瀬戸系、（113）は大窯Ⅰ期、（112）は大窯Ⅱ・Ⅲ期、（114）・（117）は、江戸後期のものと思われる。

○皿類　（挿図16−118〜129、図版17−1）

丸皿、折縁皿、無高台皿、菊皿、ヒダ皿等、各種の皿が出土している。

丸皿（118）〜（122）　高台がわずかに削り込まれた体部には、篦ケズリ調整により稜を持って立ち上がるもの（118〜120）と、丸みをもって立ち上がるもの（121・122）がある。高台は（120）以外は端部に面を持ち、（120）は端部が断面三角形を呈する。（122）は高台が小さくケズリ出しが深い。口縁端部は丸味を持っておさまるが、（121）は尖っている。鉄釉のもの（118）・（119）と、灰釉のもの（121）・（122）があり、（120）は志野である。（118）はしっかりした稜を持つ。釉は高台端部及び底部内外面の一部がふき取られている。推定口径10.8㎝、器高2.3㎝を測る。（121）は丸味を持って立ち上がり、口縁部付近は内湾気味である。体部下端と底部は、無釉である。推定口径12.6㎝を測る。（118）・（119）は大窯Ⅲ、Ⅳ期、（120）は同Ⅴ期、（121）・（122）は1700年前後のものと思われる。

折縁皿（123〜125）　3点とも灰釉の折縁皿である。（123）は推定口径9.8㎝を測り、体部内外面には釉がかかる。体部は篦ケズリによりやや反っており、口縁部で外反し、端部は内面につまみ出される。体部下端及び外反直前に稜を持つ。（124）は推定口径10.2㎝を測る。体部は直線的に伸びて外反し、口縁端部は丸まって内面に若干つまみ出される。内面は口縁部との境に稜を持つ。（125）は体部から口縁部にかけてくびれて外反する。口縁端部は面取りされる。体部は篦ケズリ調整され稜を持つ。体部外面は無釉である。推定口径11.2㎝を測る。

時期は、(124)は大窯Ⅲ・Ⅳ期、(125)は１７世紀後半、(123)は１７００年前後である。

無高台皿(126)　推定口径7.4㎝、器高1.8㎝と小型である。底部平坦面はほとんどなく、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部は内湾気味である。内面には成形時のロクロ痕が残る。灰釉は全面にかけられるが、底部平坦面はふき取られている。１８００年前後、江戸後期のものと思われる。

菊皿、ヒダ皿(図版10－５)　(①)(②)は菊皿で、両者とも型抜きされ、口縁端部・状工具で切り取られている。(②)は口縁部下に稜を持つ。釉は志野である。体部外面は花弁の形は呈さない。(①)は表裏とも、花弁の形を呈している。口縁部付近には、銅緑釉がかけられる。能野古墳周辺から同様のものが出土しており、大平産と思われる。(③)は口縁部にヒダを持ついわゆるヒダ皿で、口縁部は外反しない。鉄釉である。時期は、志野のものは大窯Ⅴ期、織部は１７世紀後半、ヒダ皿は大窯Ⅲ・Ⅳ期のものと思われる。

その他の皿(127～129)　3点とも、いわゆる坏というタイプで、底部は平担で、体部外面は篦ケズリ調整され、(128)は体部中央に稜を持つ。(127)は、推定口径7.6㎝を測る。内面は全面に鉄釉がかかり、外面はふき取られている。(129)は、推定口径１0.0㎝を測り、(128)同様、口縁部内外面に鉄釉がかかる。内面は釉が流れたらしく、ふき取られている。

時期は(128)(129)は、１５世紀代、(127)は１８００年前後のものと思われる。

○壷類　(挿図１6－１30・１31・１43、図版１０－７)

(130)(131)は、茶壷の類と思われる。(130)は肩はあまり張らず、緩やかに立ち上がり、口縁部は鋭く外反して立ち上がる。肩部付近は、篦ケズリ調整される。釉は灰釉系である。推定口径１0.0㎝を測る。(131)は肩部から緩やかに立ち上がり、口縁端部で短く直立し、端部は平坦面を持つ。口縁端部の平坦面、及び口縁部内面は無釉である。推定口径7.2㎝を測る。(143)は鉄釉の壷であり、推定底径9.4㎝を測る。高台は1.5㎝程内側に、わずかにケズリ込んで形成されている。体部と底部の境はケズリ込まれており、体部はやや丸味を持つ。内面及び高台平坦面は、無釉である。

時期は(130)は江戸中期、(131)は大窯期１６世紀代、(143)は江戸中期～後期のものと思われる。

○蓋類　(挿図１6－１32～１36、図版１０－９)

(132)は鉄釉の蓋で、キノコの傘状の形態を呈する。天井部は凹んでおり、そこに紐状の取手をつける。裏面は無釉で突起部は右廻りの糸切り痕を残すが、切り離しは粗雑である。(133)は灰釉系のものでこれも傘状を呈するが、口縁端部は平担面となり、かえりを持つ。天井部には紺色の釉で文様が描かれる。推定口径6.2㎝を測る。茶壷の蓋と思われる。両者とも釉は灰釉である。(136)は宝珠状のつまみがつく。裏面には糸切り痕が残る。時期は(132)は１５世紀代、(133)・(135)は１７世紀後半、(134)は江戸中期、(１6)は江戸後期のものと思われる。

○すり鉢　(挿図１6－１37～１41、１7－１42　図版１０－８、１７－２)

(137)は口縁端部形態はⅡ類に属する。口縁部は折り返された後、ナデ調整により若干凹み、端部は丸味を持つ。推定口径２3.6㎝。(138)～(141)は口縁部形態Ⅰ類に属する。(138)は推定

口径31.0㎝を測る。口縁部は体部に密着せず、下方に張り出す。屈曲した面の中程には幅0.7㎝の凹み面がある。口縁部内面に屈曲する。櫛目は幅3.5㎝、11本を1単位としてやや広く粗い。又、櫛目は口縁部屈曲部から施される。体部は直線的に立ち上がる。(139)～(141)は縁帯が体部と密着する。(141)は口縁部内面が内湾する。(142)は底部のみで、底部内面は全面に櫛目が施され、外面は体部と底部の境が鋭角で明瞭である。両部とも篦ケズリの後、ロクロナデ調整される。

時期は、大窯Ⅲ・Ⅳ期、16世紀半ば～後半のものと思われる。

○その他の陶器類　(挿図17－144～148、図版11－2・3、17－2)

(144)はサビ釉の鉢類、推定口径30.8㎝を測る。注口がつくと思われる。口縁端部はナデによりわずかに丸味を持つが断面三角形を呈しており、内側に屈曲する。体部は成形時の凹凸があり、屈曲部から緩やかに立ち上がるが、その後やや急になる。(145)・(146)は、黄色を呈する灰釉である。(145)は片口で、体部は直線的に立ち上がるが、口縁部近くに幅0.7㎝程の凹みを持つ。口縁端部は平坦面を持ち、体部内面は口縁部近くでやや内湾する。推定口径20.4㎝を測る。器厚は厚みがある。(146)は香炉で、推定口径9.0㎝を測る。口縁端部は平坦面を持ち、内面につまみ出され、かえりを持つ。体部は直上に立ち上がる。内面のかえり部はやや下から無釉となる。(147)は煙管の先である。筒部最大幅は1.7㎝、高さ1.3㎝を測る。煙りの通過する穴は直径0.5㎝程で、端まで貫通している。ほぼ円柱状を呈するが、下部は平坦面になり無釉である。釉は、志野織部である。(148)は鉄釉の燈明台である。脚部は円形をしており、端部は面取りされる。裏面は無釉で右廻りの糸切り痕が残る。受部も恐らく円形の皿状になると思われ、その中に一部割れた筒状の軸受がつく。

時期は、(144)は大窯Ⅰ・Ⅱ期、(145)・(146)・(148)は江戸後期、(147)は江戸前期のものと思われる。

○土師質土器　(挿図17－149～153・159、図版10－10、11－1)

(149)～(153)は土師質の小皿、或いは坏と思われる。体部はほぼ直線的に伸びる。内外面ともロクロナデ調整される。(149)は、推定口径11.8㎝を測り、色調は黄褐色を呈する。内外面に墨書が残っており、外面には「祖」、内面には「洲」「の」の文字が読み取れ、落書き状に書きなぐったようである。(150)は推定口径11.2㎝を測り、色調は黄白色を呈する。SD3出土のものとほぼ同様の形態である。(153)は推定口径10.6㎝を測り、口縁端部に一本の沈線が入る。(159)は推定口径26.6㎝を測る鍋である。口縁端部は平坦面を持ち、内部にわずかにつまみ出される。体部はやや丸味を帯び、外部にはススが付着する。

時期は、15～16世紀までのものと思われる。

○磁器類　(挿図17－154～158、図版18－1)

(154)～(157)は青磁である。(154)～(156)は、いわゆる「けん先」の文様が施文される。

(154)は推定口径18.6㎝の大碗である。体部は丸味を持って立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。(155)は口縁端部で肥厚し、短く外反する。(156)は口縁端部に切り込みが入り、花弁のように縁取られる。(158)は、平板状の円形の蓋で、推定で直径4.4㎝を測る。かえりは、0.4㎝程

内側に入ったところにつき、断面は三角形を呈する。志野調の釉が施釉される。

１６世紀～１７世紀にかけてのものと思われる。

○その他　（挿図１７－１６０、図版８－１０）

(160) は打製石斧で、現存長 9.0 ㎝、最大幅 4.6 ㎝、厚さ 1.7 ㎝を測る。石材は粘板岩である。

この他、ＳＤ３出土のものと同様の甕、サビ釉のすり鉢、鉄釉・灰釉の碗、壜、磁器等が出土しているが、いずれも破片で、実測不可能であった。

○鉄滓、鋳型片　（図版１１－4～6）

調査地域全域から、多量の鉄滓、及び鋳型片が出土しており、その量はコンテナ６箱分にのぼる。両者ともその成分は不明である。又、小破片が多く、鋳型に関してはどんな形のものの鋳型かは不明である。ただ、一部に大きなものもみられ、形状からみて、炉のよう壁と推定できる。

（註１）　藤沢良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀・Ⅴ』瀬戸市歴史資料館　１９８６年

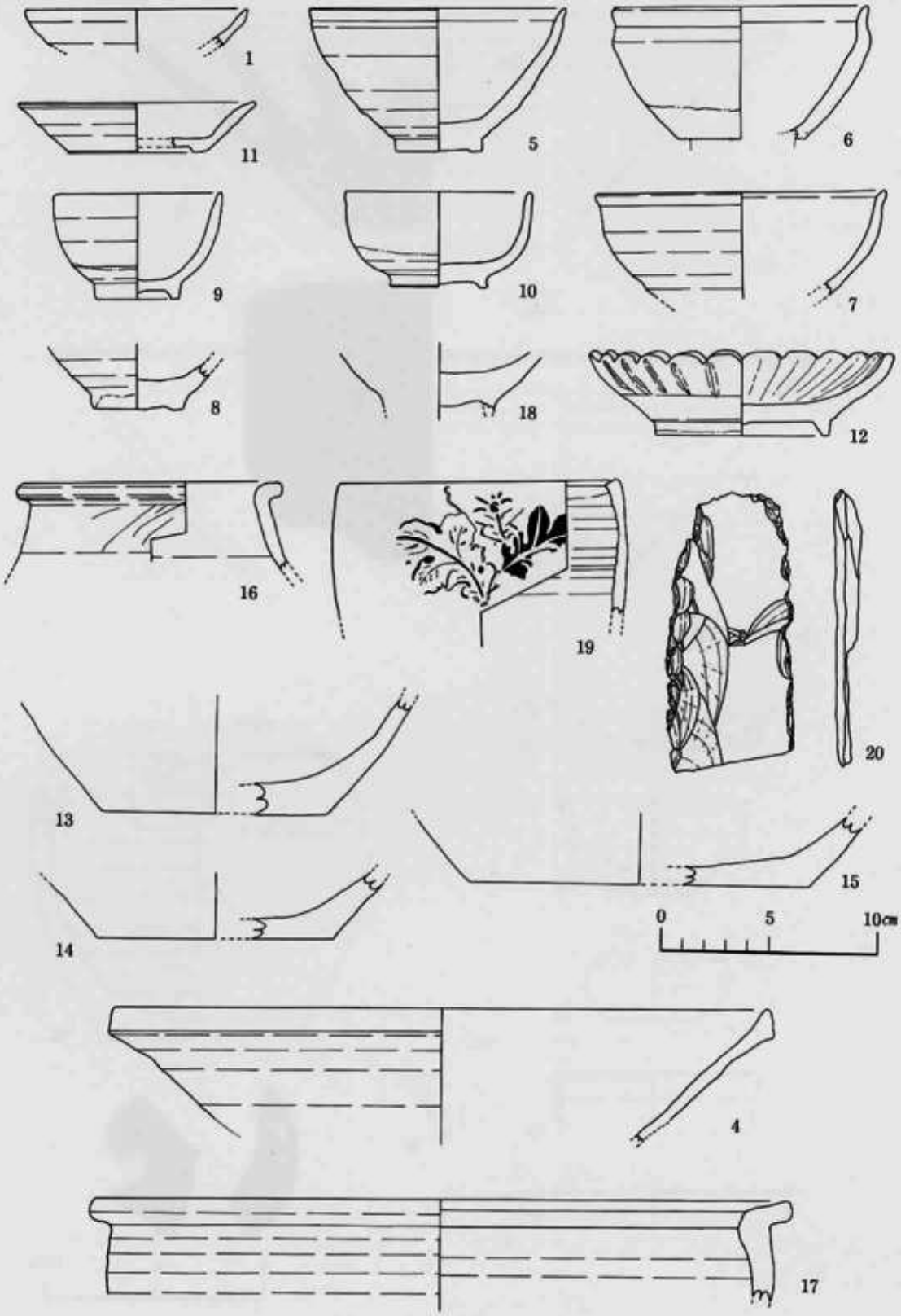
（註２）　□□19は、石組遺構１に伴う可能性がある。

（註３）　ＳＤ２構築時に入ったものと思われる。

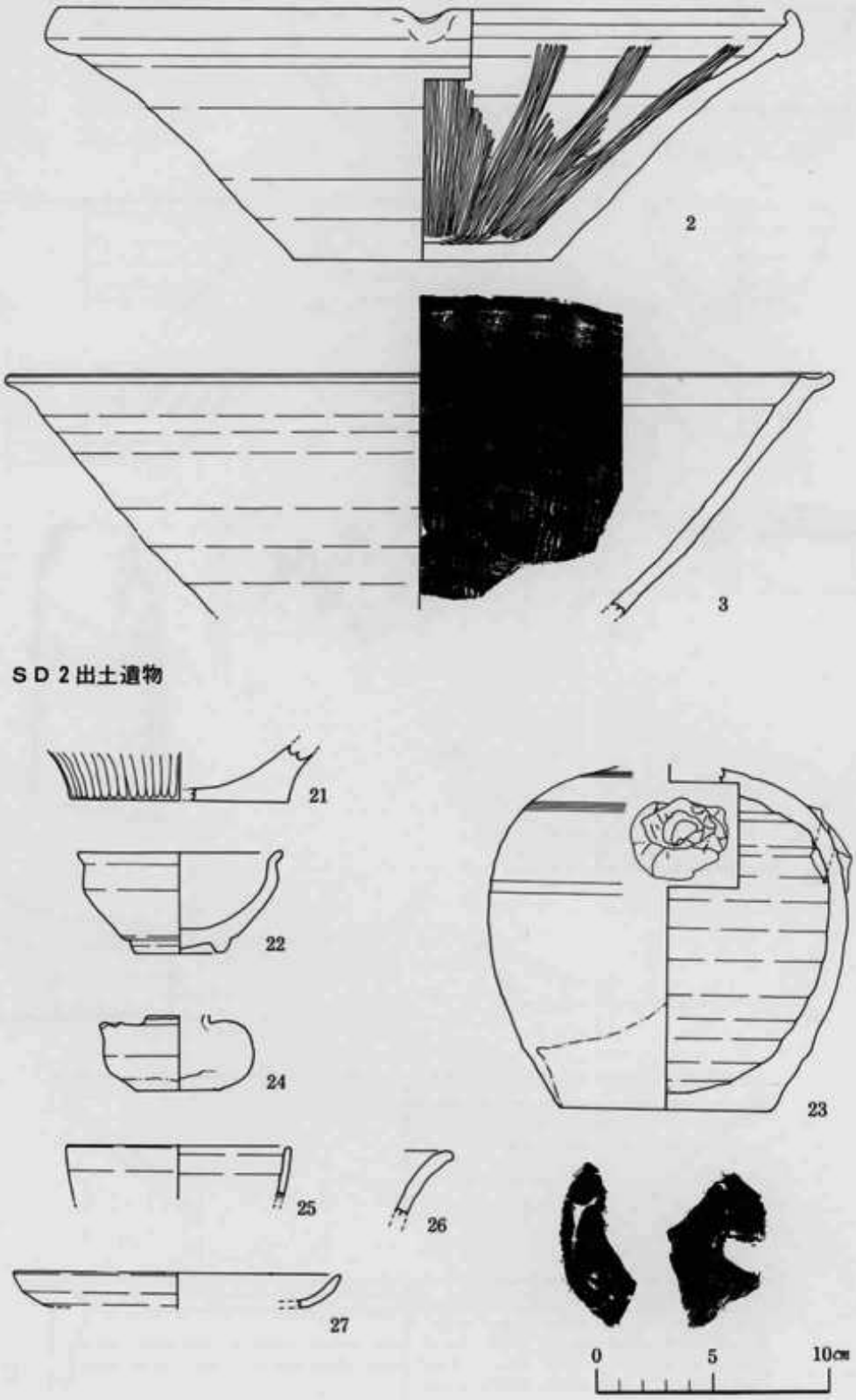
（註４）　山茶椀とすべきかもしれない。

尚、遺物の年代比定は、今井静夫、田口昭二の両氏にしていただきました。厚く、謝意を表します。

ＳＤ１出土遺物

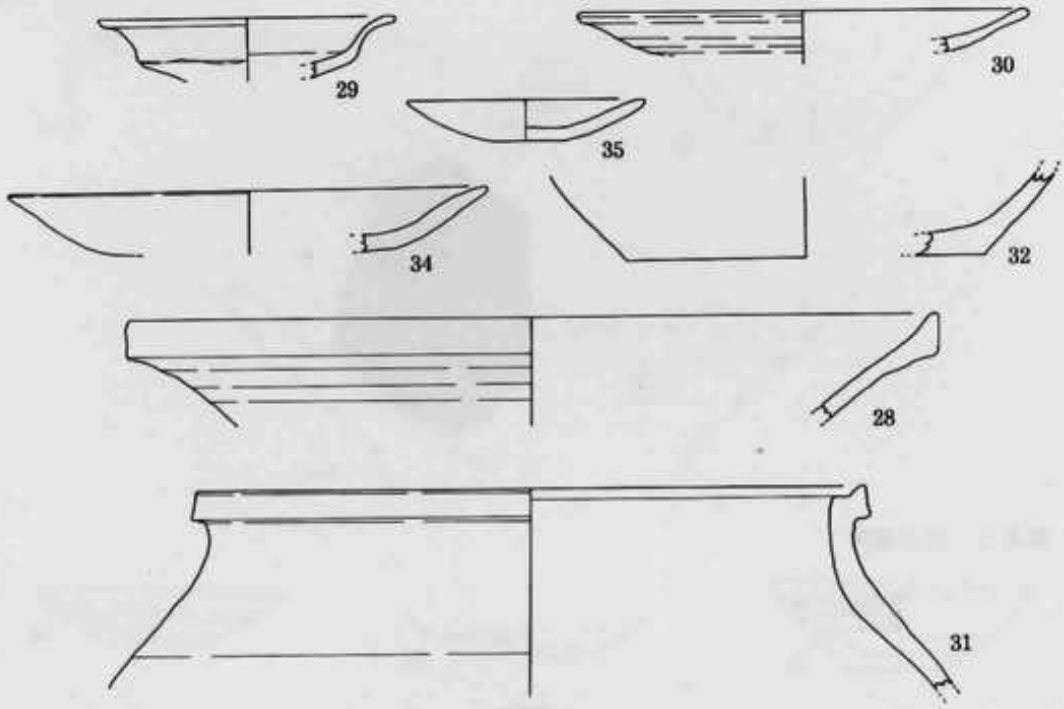


挿図－１１　出土遺物実測図(1)

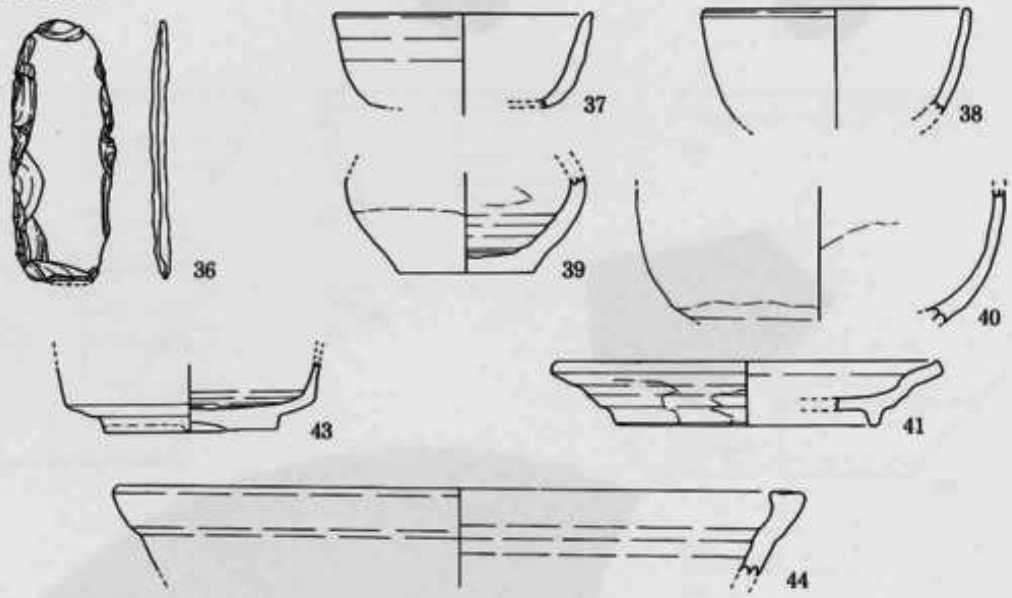


挿図－１２　出土遺物実測図(2)

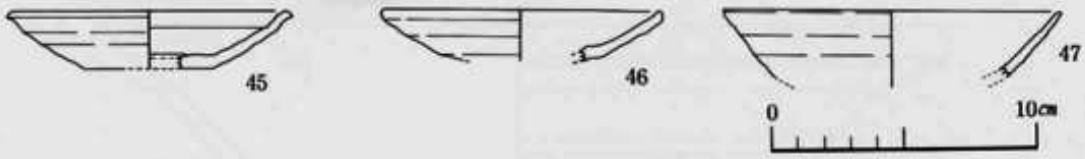
ＳＤ３出土遺物



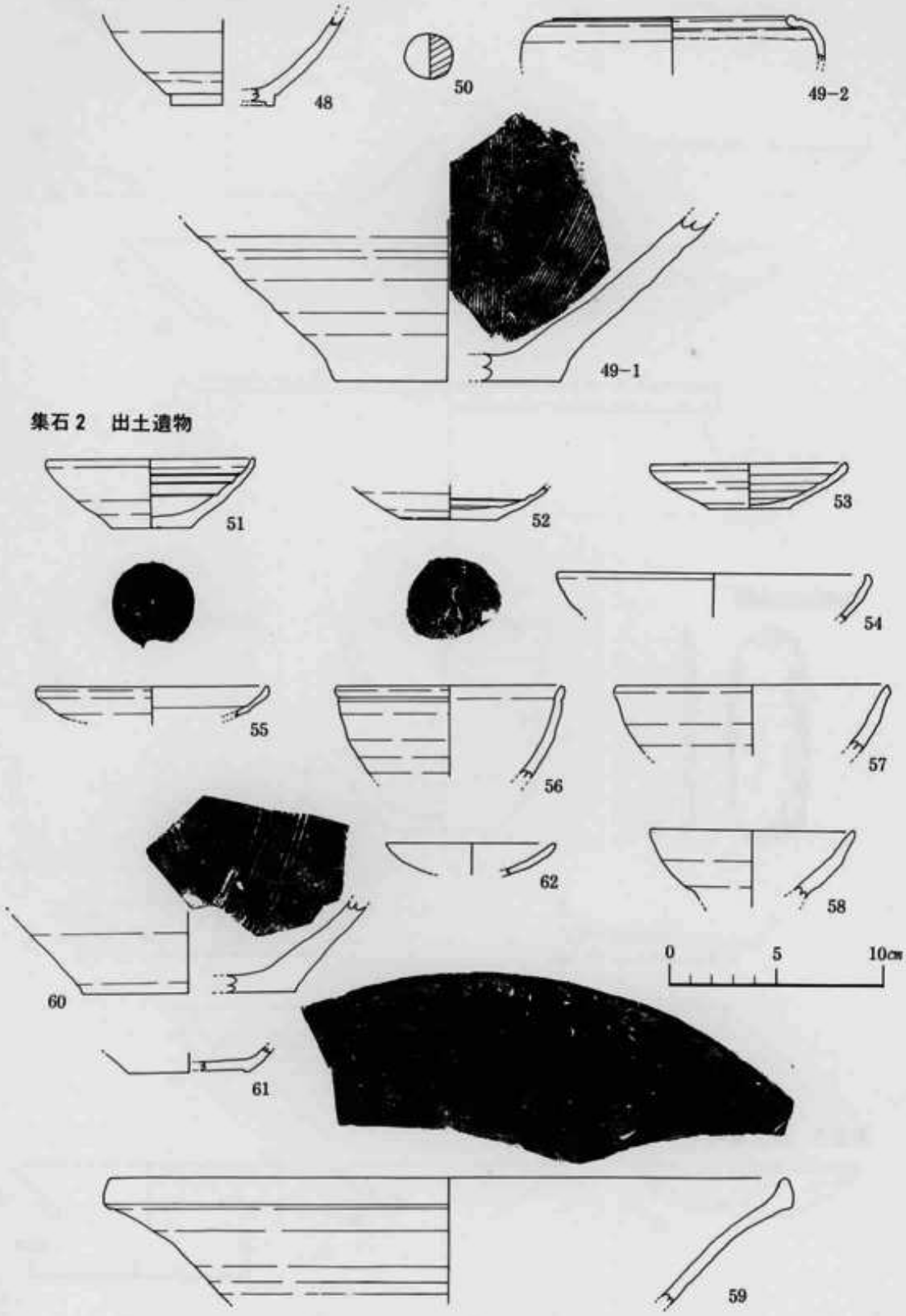
石組出土遺物



集石１　出土遺物

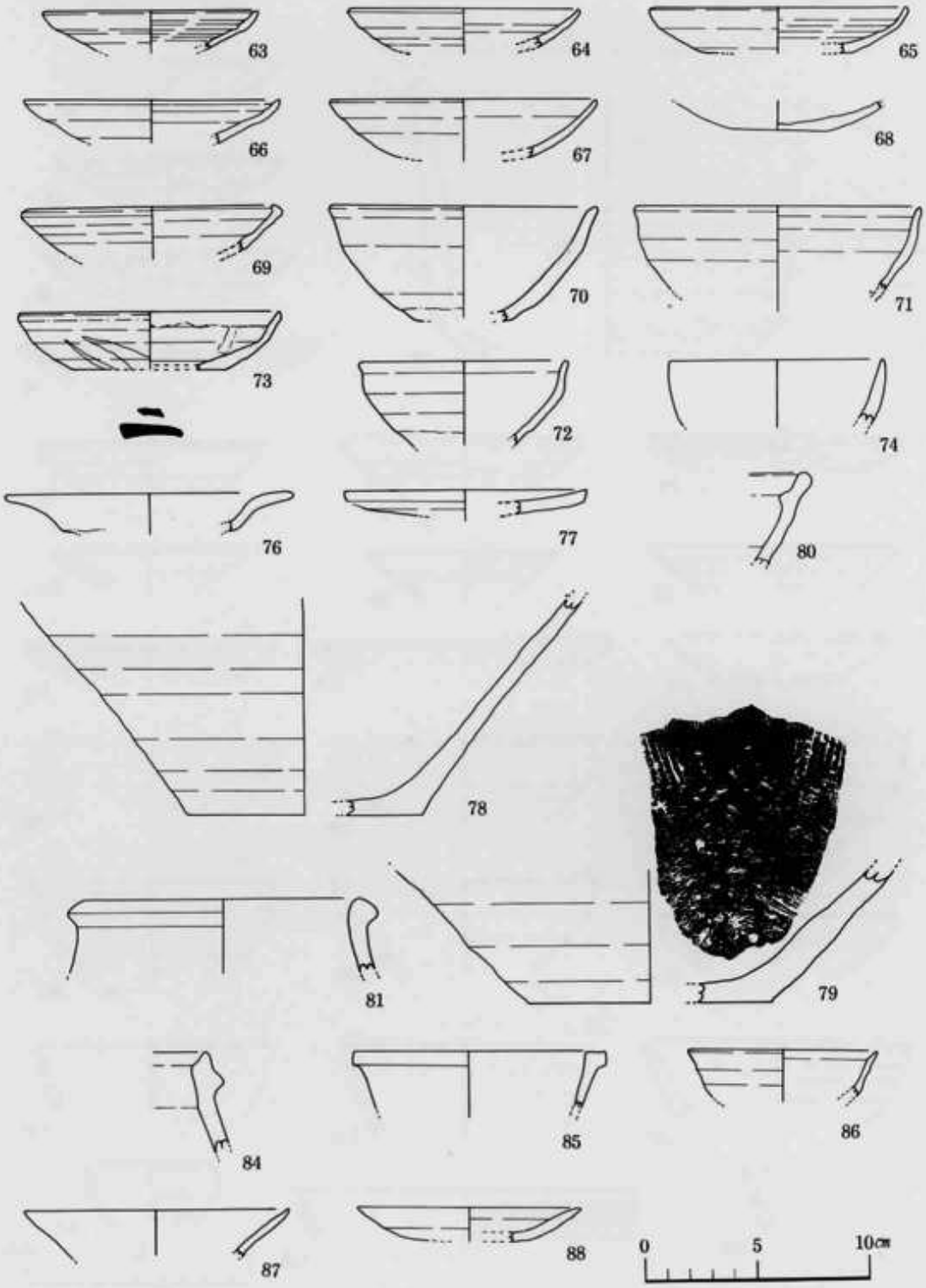


挿図－１３　出土遺物実測図(3)

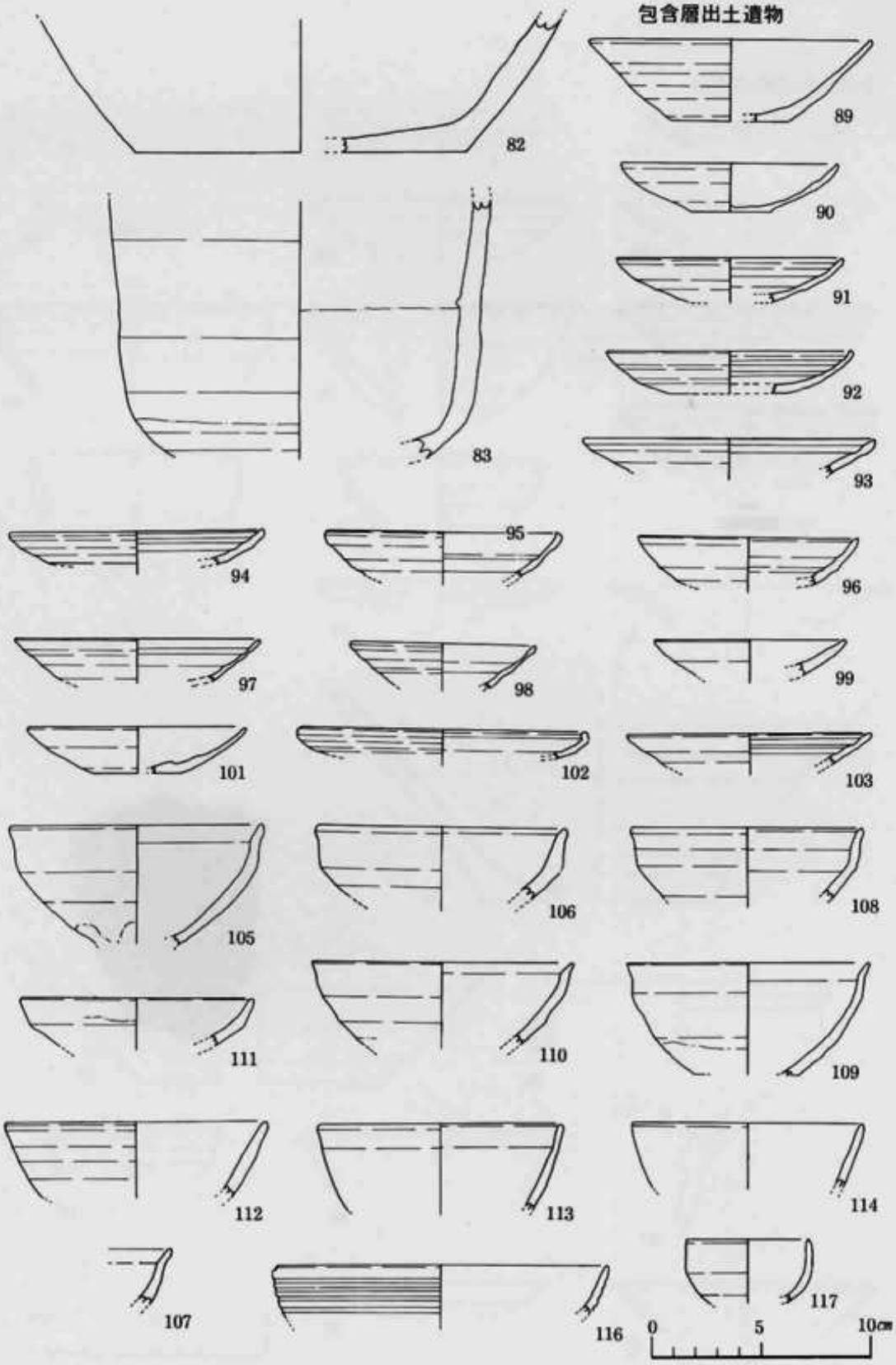


挿図－１４　出土遺物実測図(4)

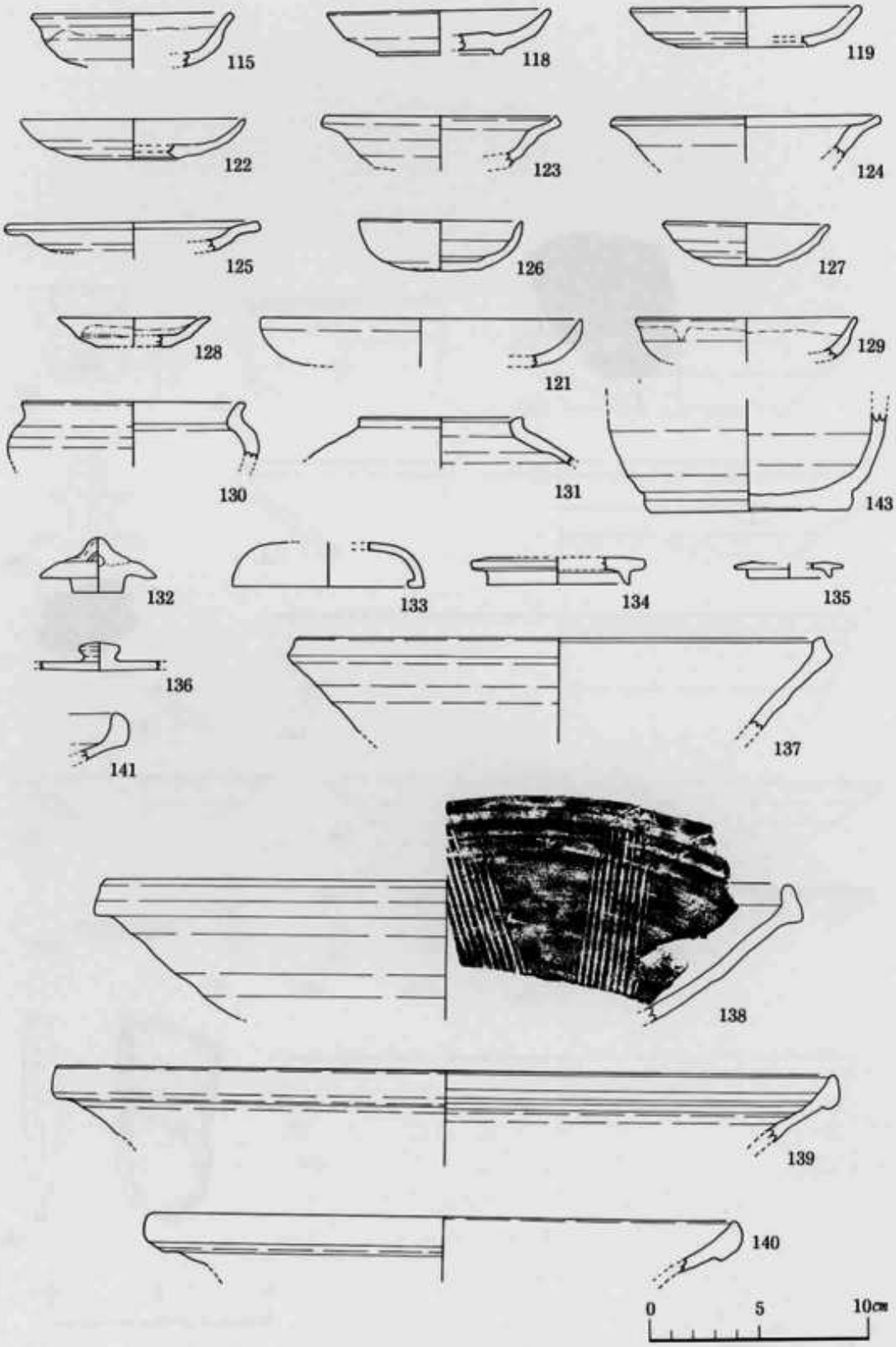
その他の遺構の遺物



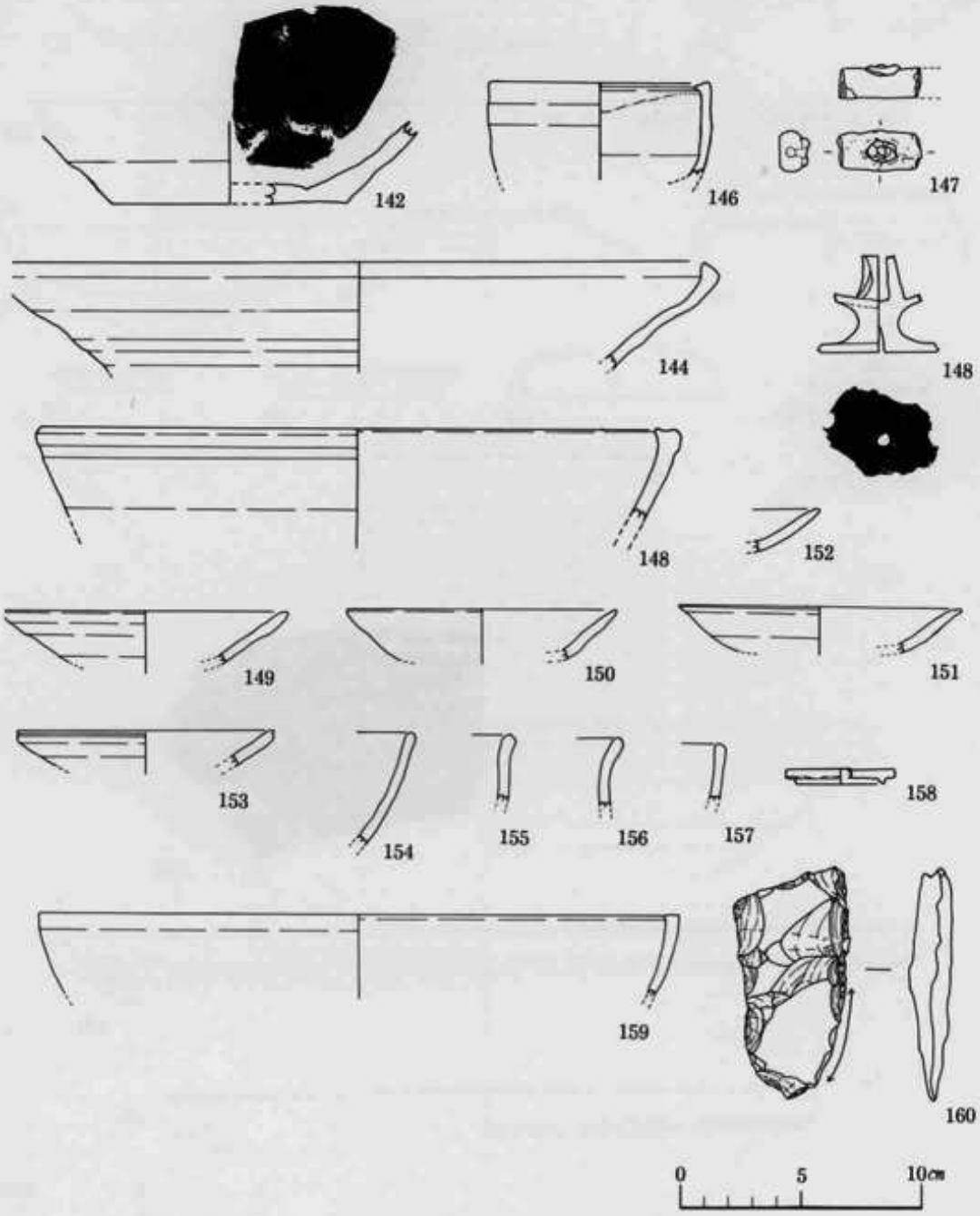
挿図－１５　出土遺物実測図(5)



挿図－１６　出土遺物実測図(6)



挿図－１７　出土遺物実測図(7)



挿図－１８　出土遺物実測図(8)

Ⅶ 結 語

今回の金屋遺跡の発掘調査は、可児市今渡地内で行なわれる「大清水土地区画整理事業」に先立って行なわれた緊急発掘調査である。

調査の結果、遺構は溝状遺構４本、石組遺構２本、集石遺構２基、土坑73基、ピット243ケ所が検出され、遺物は山茶椀、碗・皿・甕・鉢などの陶器類、磁器類、銭貨類などと、大量の鉄滓、及び鋳型片、この他少量の弥生土器、打製石斧、石鏃が出土した。これにより、文献、地名、伝承により知られていた金屋の鋳物師の存在が、考古学的に実証されることとなった。以下、各項目についてまとめ、若干の所見を加えたい。

遺構

溝状遺構は４本検出された。出土遺物から、ＳＤ１は１５世紀初頭～１６世紀後半、ＳＤ２－１は１５世紀初頭～前葉、ＳＤ２－２は１７世紀半ば～後葉、ＳＤ３は１５～１６世紀前葉には構築されていたと考えられる。ただ、その廃棄の時期は、攪乱等もあるため不明であるが、それぞれ長くとも１７世紀代までと考えたい。ＳＤ１、ＳＤ２－１は東西にまっすぐ検出されたが、ＳＤ２－２、ＳＤ３は、調査区東端Ｒ列付近で南にほぼ直角に屈曲しており、人為的に作られている。ＳＤ１、ＳＤ２－１もほぼ同様な性格のものであろう。溝の全体像が明らかでない今、はっきりしたことはいえないが、後で述べる土坑、ピット等の存在も考えて、住居跡、工房跡を取り囲む溝（一種の濠）(註1)であったと考えられる。

石組遺構の１は、１７世紀半ば～後半以降の排水遺構と考えたい。２は、ＳＤ２－２の北壁上に積まれたものと考えたい。

集石遺構は、その覆土含有物、出土遺物からみて、鋳造作業中に出た鉄滓、鋳型片などの不要物や、生活用具の不要物を廃棄した廃棄の場と考えられ、工房跡があったことは確実である。出土遺物から１５世紀初頭～１６世紀後半頃を中心に使用されたものと考えたい。

土坑、ピットは、調査区域南側を中心に数多く検出した。出土遺物から、その多くのものが１５世紀初頭～１６世紀半ばまでのものと考えたい。まずピットからみると、そのほとんどは柱穴と考える。おびただしい数により、規則性を見出せなかったため、掘立柱建物跡とは確認しえなかったが形状等から柱穴といって差支えない。調査区域には鋳物師集団の住居跡、工房跡があったと考えられる。ピットには３つのタイプがあり、その中でもタイプ(2)、つまり、ピットの底に扁平な土台石を置くものがある程度検出されていることは、この時期の建築様式のあり方を知るうえで、良い例と言えるだろう。土坑は、形状はそのほとんどが隅丸長方形を呈するが、深さは様々で、その性格はほとんどが不明である。これらの土坑内には、木炭が多量に敷きつめられるとか、地山が赤く焼けているとか、炉壁と思われるものは出土しておらず、又、坂下町金屋遺跡(註2)から検出されている炉と思われる石組遺構も、その痕跡すら検出されなかった。しかし、ＳＫ２やＳＸ１からは数多くの鉄滓、鋳型片などの他、陶器類や茶褐色を呈した土の固まりなどが出土している。又、ＳＫ７～９のように、土坑内に不自然にピットがあり、ＳＫ８ではピットの壁に平扁な石が立てられ

ていたり、ＳＫ９では土坑内に円盤状の土の固まりもある。ＳＫ６６の覆土上面には、炉のよう壁と思われる大きな破片や、鉄滓が出土している。ピット中にもＰ１７５のように、大きな鋳型片が入ったものもある。鋳物師の工房がどのようなものであったかは調査例がほとんどなく、今後の調査を待たねばならないが、前出の土・ピット等は、何らかの形で、鋳造作業の一部に関わる遺構の可能性をもっていると言える。

遺物

遺物は包含層出土のものも含め、山茶碗、陶器類、磁器類、銭貨類、大量の鋳型片、鉄滓の他、少量の弥生土器、打製石斧、石鏃が出土している。弥生土器等を除くと、時期的には１５世紀前半～１９世紀前葉まで、巾が広い。主流は、１５～１７世紀代であり、特に、１６世紀代のものが最も多い。遺構出土のものは、１５世紀前葉から１６世紀代が主流であるが、若干ではあるが、１７世紀代に入るものもある。先述したが、『可児町史』では鋳物師の活動時期が、室町時代末期～１７世紀中頃とされており、金屋の鋳物師の製品で現在確認できる最も古いものは、永正１２年（１５１５）である。鉄滓、鋳型片を含んだ遺構から、１５世紀代の山茶碗、あるいは陶器が出土していることから、鋳物師の活動時期が、この時期まで遡ると考えられるが、活動の中心は１６世紀になると考えられる。下限は、今回の調査でははっきりしたことはいえない。今迄どおり、１７世紀中頃としておきたい。ただ、鋳物師としての活動の有無は別として、１９世紀初め頃までは、この地で、人々の生活は続くと思われる。

陶器類は、その機能別にみると、調理具はすり鉢のみで、貯蔵具は、壷、甕類がある。壷類には茶壷、油つぎなどがある。食膳具としては、碗、皿類があり、皿には、丸皿、稜皿、折縁皿、菊皿、ヒダ皿などがあり、種類が豊富である。１６世紀代のものには、これらほとんどの器種がある。又これら陶器とともに、中国青磁なども出土している。１５世紀代を含めて、この時期にこれだけの施釉陶器、磁器が出土するということは、一般の遺跡からは、現在のところ考えられない。１６世紀代における、こうした遺物の出土内容を考えるとき、単純に比較することはできないが、武将などの城館からの出土遺物と内容は、ほぼ一致するといえるであろう。藤沢良祐氏は、瀬戸窯における大窯成立期の製品の様相を、楢崎彰一氏が大窯の受容層を「戦国大名などの新興階級」と想定されたことに対し、その様相（特色）が、こうした新興階級の受容という性格の一面をよく表わしていると考えられている。(註3) これを美濃国でそのままあてはめるのは不適当かもしれないが、藤沢氏の考えに準ずると、鋳物師集団もこうした階級に、又はこれに準ずる階級にあったと考えられる。逆に言えば、鋳物師集団は、こうした階級に属する経済基盤を持っていたことになる。中世の地方の鋳物師集団は、蔵人所を求心の核として、鋳造業の地域的特権と、商品の流通の独占権を持っていた。金屋の鋳物師が主に活動していた１６世紀にも、こうした特権により、新興階級、若しくはこれに準ずる階級に匹敵する経済力を持ったのではなかろうか。こうした経済力を背景に、中国青磁などを含めた施釉陶器、磁器の使用ができ、又、お茶やたばこなど、当時の最先端の文化にふれることが可能であったと考えたい。ただ、これは推論の域を脱し得ていないため、今後、城館の他一般消費地の出土遺物の内容を比較検討して熟考しなければならず、今後の課題としたい。

この他、水滴、墨書土器も出土しており、識字層の存在がうかがえる。

ＳＫ３８覆土上面より、合計１１９枚の中国銭が出土した。これは、どのように使用されたかはわからないが、鋳物師の生産製品が、梵鐘、鍔口であることから、この原材料として使用された可能性もある。多量の鋳型、鉄滓が、全調査地域から出土しているが、何の鋳型であるかは不明である。

少量ではあるが、弥生土器、打製石斧、石鏃が出土している。このあたり一帯で、打製石斧が採集でき、当遺跡から１００ｍ北にあった今渡遺跡からも、縄文土器、打製石斧などが出土しており、この付近に縄文、弥生期の遺跡があったと思われるが、今回これらに伴う遺構は確認できなかった。

さて、前出の今渡遺跡であるが、この遺跡は中世の墓地跡で、推定の造営時期が１４世紀後半～１５世紀前半とされている。当遺跡の時期と対比した場合、当遺跡の出土遺物の時期と重なっている。今渡遺跡が金屋遺跡からわずか１００ｍしか離れていないこと、山茶椀、天目茶碗などの他、銭貨類の内容も含めて、出土遺物に同様なものがあることなど、両遺跡は何らかの関係があると考えられる。

坂下の金屋遺跡との関係であるが、原寛氏は、坂下の金屋遺跡を、当遺跡の「出吹き」的性格をもった鋳造所である可能性が大きいとされている。(註４) 遺跡の広がり、出土遺物の内容からみて、当遺跡はかなり大きいものになると思われる。(註５) いわゆる本家としての可能性もあるが現在のところはっきりはいえない。

以上、若干の所見を述べたが、今回の調査の成果は、第１に、先述したが文献、地名、伝承でしか知られていないかった金屋の鋳物師の存在が、考古学的に実証され、その住居跡、工房跡の確認ができたこと、又、その周りには、濠のような溝がめぐっていたこと。第２に、その生活に使っていた食器類を始めとする、日常生活用具が出土したことにより、鋳物師集団の生活の様子がわかりかなり裕福な生活をしていた者の存在が明らかになったことである。

金屋遺跡は、この地域で数少ない中世末～近世にかけての消費遺跡であり、この出土遺物は当刻期の生活の様子を知るうえで、貴重な資料となろう。

（註１）　全体がわからない現在、正確ではないが、鋳物師集団の生活空間を区分する溝の可能性もある。

（註２）　坂下町教育委員会　『金屋・星の宮遺跡』　１９７５年

（註３）　藤沢良祐　「瀬戸大窯発掘調査報告」　『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅴ』　瀬戸民俗資料館　１９８６年

（註４）　（註２）文献による

（註５）　遺跡は、北を除く全方面に続くと思われ、調査地域の南側では、土地改良の時、かなりの量の鉄滓が出土したと地元の人はいっており、遺跡の中心は、もっと南の可能性が強い。

その他の参考献文

多治見市教育委員会　『小名田古窯跡群発掘調査報告書』　１９８７年

岐阜県多治見市教育委員会　『尼ケ根古窯跡群発掘調査報告書』　１９８７年

多治見市教育委員会　『大畑大洞古窯跡群（脇之島２号窯）発掘調査報告書』　１９８３年

（財）愛知県埋蔵文化財センター　『杉山遺跡』　１９８８年

愛知県陶磁器資料館　『近世城館跡出土の陶磁』　１９８４年

井上喜久男　「美濃窯の研究（１）　１５～１６世紀の陶器生産」
『東洋陶磁』　Vol．15、16　東洋陶磁学会　１９８８年

美濃古窯研究会　『美濃の古陶』　１９７６年

田口昭二　「美濃窯における白瓷と山茶椀」　『美濃陶磁歴史館報』Ⅰ　美濃陶磁歴史館
１９８３年３月

種　類	鋳造時期（初年）			枚　数
開元通宝	（銅）唐高祖	武徳４年	（　621）	5
宋通元宝	（銅）宋太祖	北宋興国２年	（　968）	1
淳化元宝	（銅）宋太宗	北宋淳化元年	（　990）	1
咸平元宝	（銅）宋真宗	咸平２年	（　999）	2
景徳元宝	（銅）宋真宗	大中景徳元年	（1008）	1
祥符元宝	（銅）宋真宗	大中祥符元年	（1008）	1
祥符通宝	（銅）宋真宗	大中祥符２年	（1009）	2
天禧通宝	（銅）宋真宗	天禧２年	（1018）	1
天聖元宝	（銅）宋仁宗	天聖元年	（1022）	5
景祐元宝	（銅）宋仁宗	景祐元年	（1034）	4
皇宋通宝	（銅）宋仁宗	寶元２年	（1039）	15
至和通宝	（銅）宋仁宗	至和２年	（1054）	4
嘉祐元宝	（銅）宋仁宗	嘉祐２年	（1057）	2
治平元宝	（銅）宋英宗	治平元年	（1064）	4
熙寧元宝	（銅）宋神宗	熙寧元年	（1068）	3
元豊通宝	（銅）宋神宗	元豊元年	（1078）	6
元祐通宝	（銅）宋哲宗	元祐８年	（1093）	6
紹聖元宝	（銅）宋哲宗	紹聖元年	（1094）	9
政和通宝	（銅）宋徽宗	政和元年	（1111）	1
政和通宝（折二）	（銅）宋徽宗	政和元年	（1111）	1
正隆元宝	（銅）海陵王	正隆３年	（1158）	1
紹熙元宝	（銅）南宋光宗	紹熙元年	（1190）	1
洪武通宝	（銅）明太祖	洪武元年	（1368）	1
永楽通宝	（銅）明成祖	永楽６年	（1408）	8
宣徳通宝	不	明		1
哉元通宝	〃			1
淳熙元宝	〃			1
天元通宝	〃			1
解読不明				30
合　計				119

表－３　ＳＫ３８出土銭貨分類表

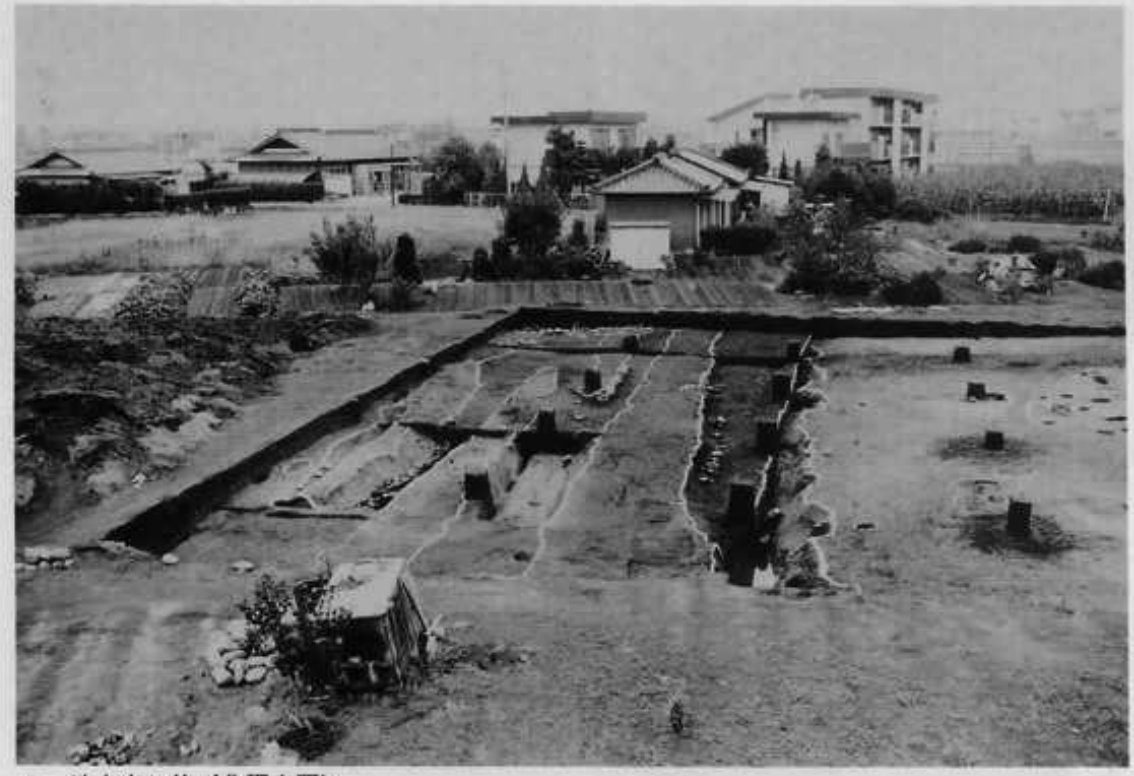
図　　版

図版１　遺構（１）

1.　調査前（西から）

2.　地山出し後（南調査区）

図版２　遺構（２）



1.　地山出し後（北調査区）

2.　遺構完掘後（南調査区）

3.　遺構完掘後（北調査区）

4.　ＳＤ１、２

5.　ＳＤ１遺物出土状況（１）

図版3　遺構（3）

1.　ＳＤ１遺物出土状況（２）

2.　ＳＤ２－１　遺物出土状況

3.　ＳＤ３

4.　石組遺構１ →

5.　石組遺構２

図版4　遺構（4）

1.　集石遺構1

2.　集石遺構2

3.　SK2

4.　SK2　覆土上面遺物出土状況

5.　SK7

6.　SK8

図版5　遺構（5）

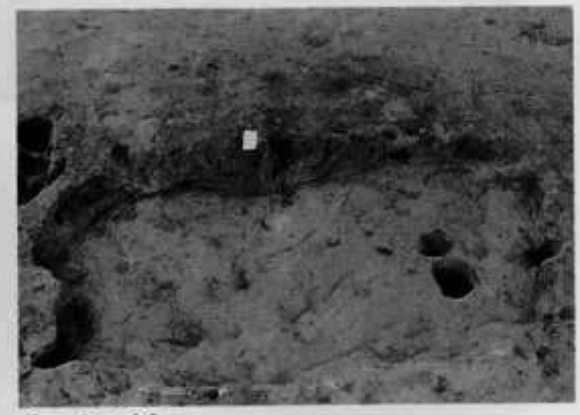
1. SK 9

2. SK 43

3. SK 20

4. SK 26－1、2

5. SK 29



6. SK 38

図版6　遺構（6）

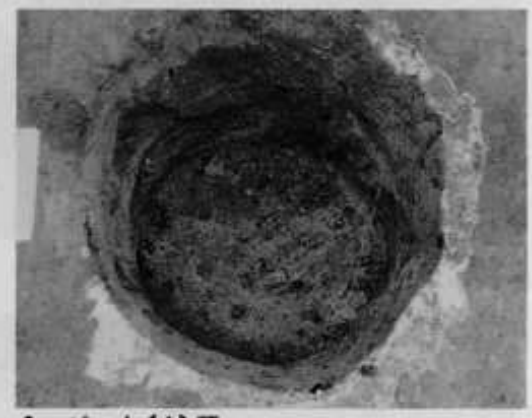
1.　SK41

2.　SK55

3.　SK66

4.　SK69

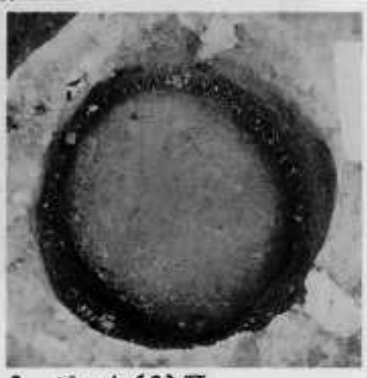
5.　SX1



6.　ピット(1)類

7.　ピット(1)類

8.　ピット(2)類

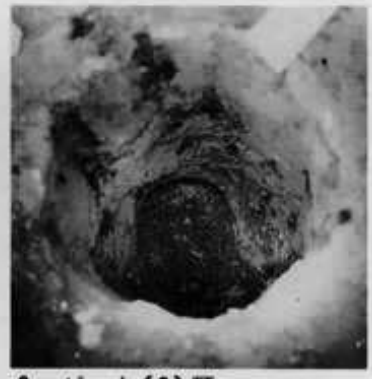


9.　ピット(2)類

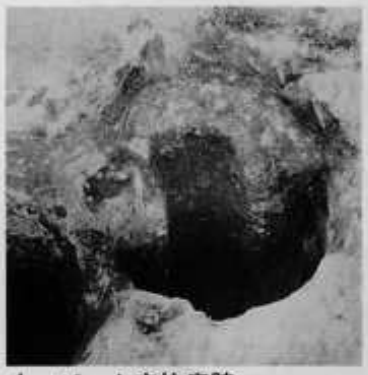
図版7　遺構（7）

1.　ピット(2)類

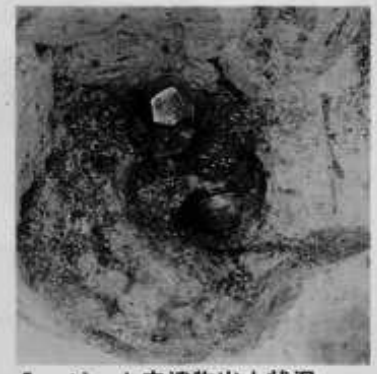
2.　ピット(3)類



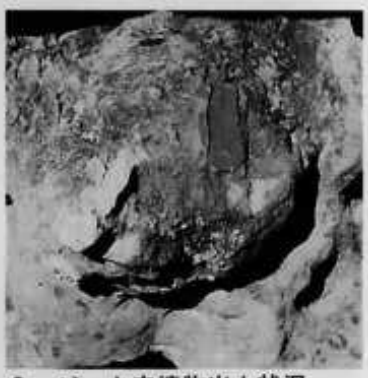
3.　ピット(3)類



4.　ピット内柱痕跡



5.　ピット内遺物出土状況

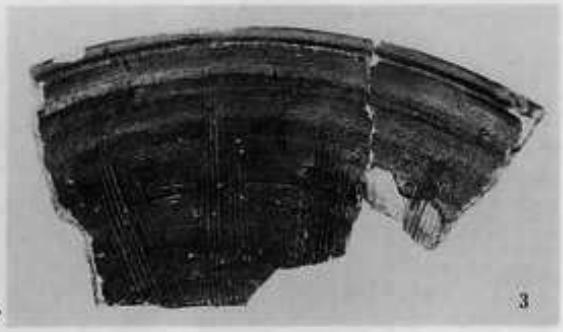


6.　ピット内遺物出土状況

7.　SK 38 覆土上面中国銭出土状況

図版 8　出土遺物(1)

1



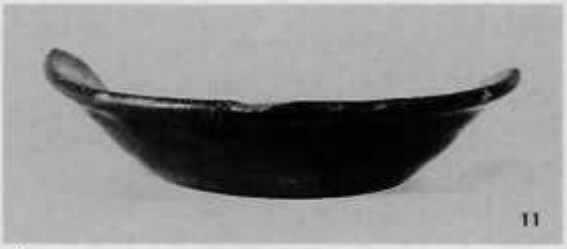
2 →

3

4

5

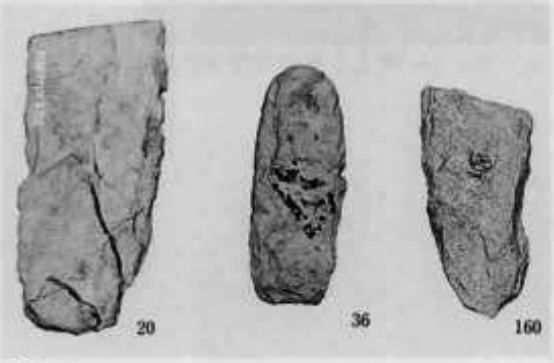
6



7

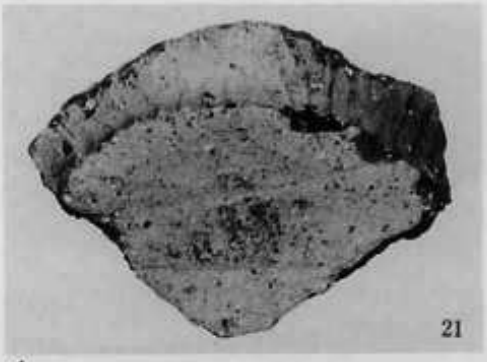
8

9



10

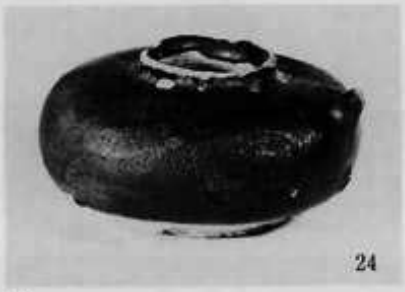
図版 9　出土遺物(2)



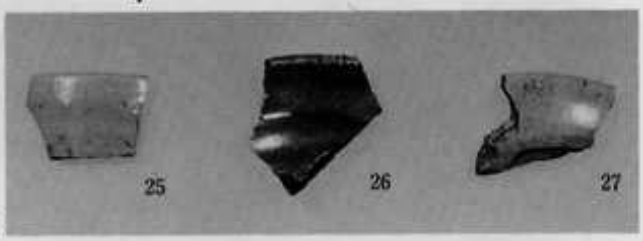
1

2

3

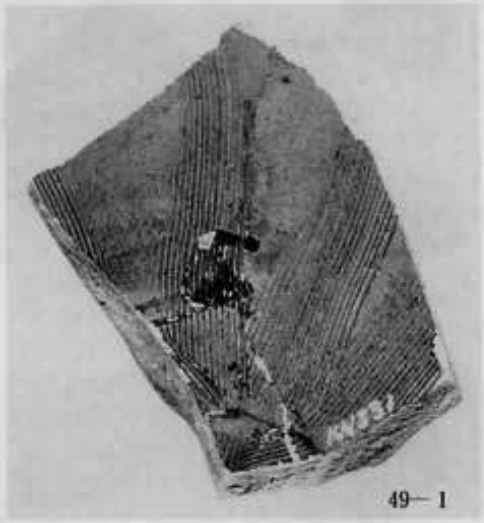


4



5

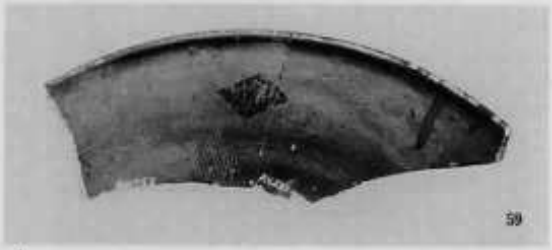
6



7

8

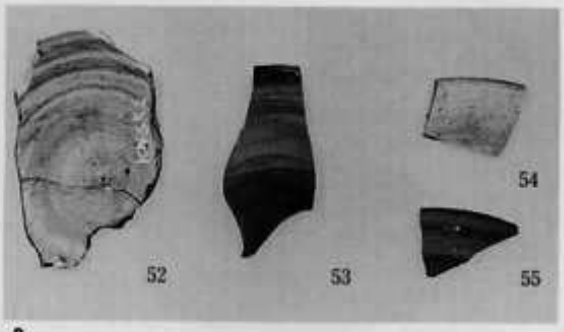
図版 10　出土遺物(3)



1

2－1

2－2

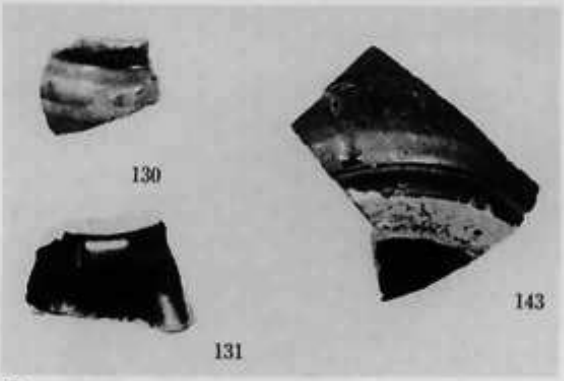


3

4

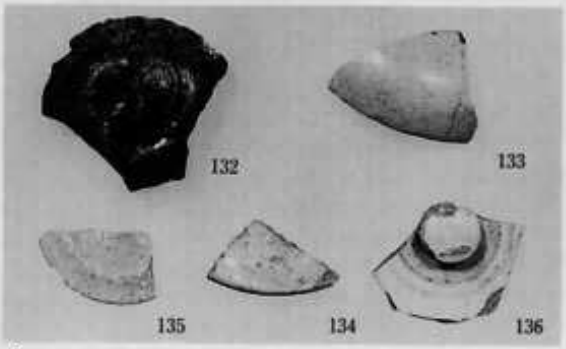
5

6

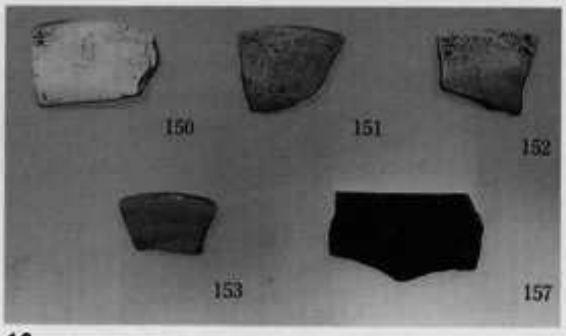


7

8



9

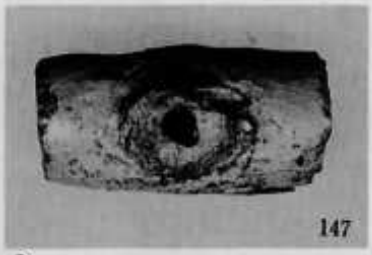


10

図版 11　出土遺物(4)

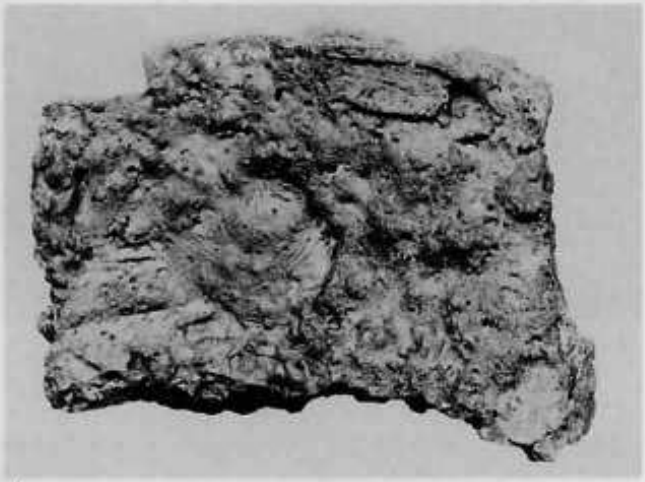
1－1

1－2

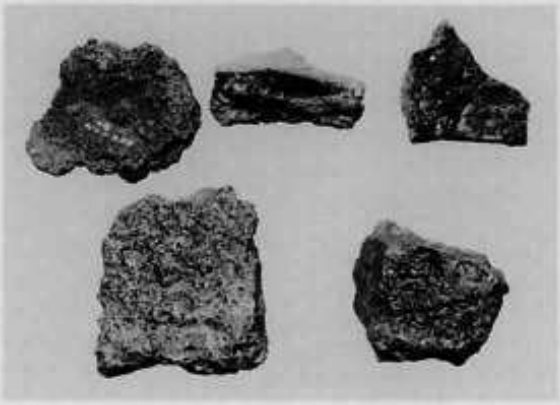


2

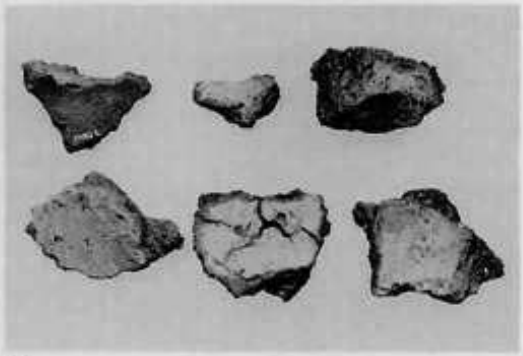
3



4

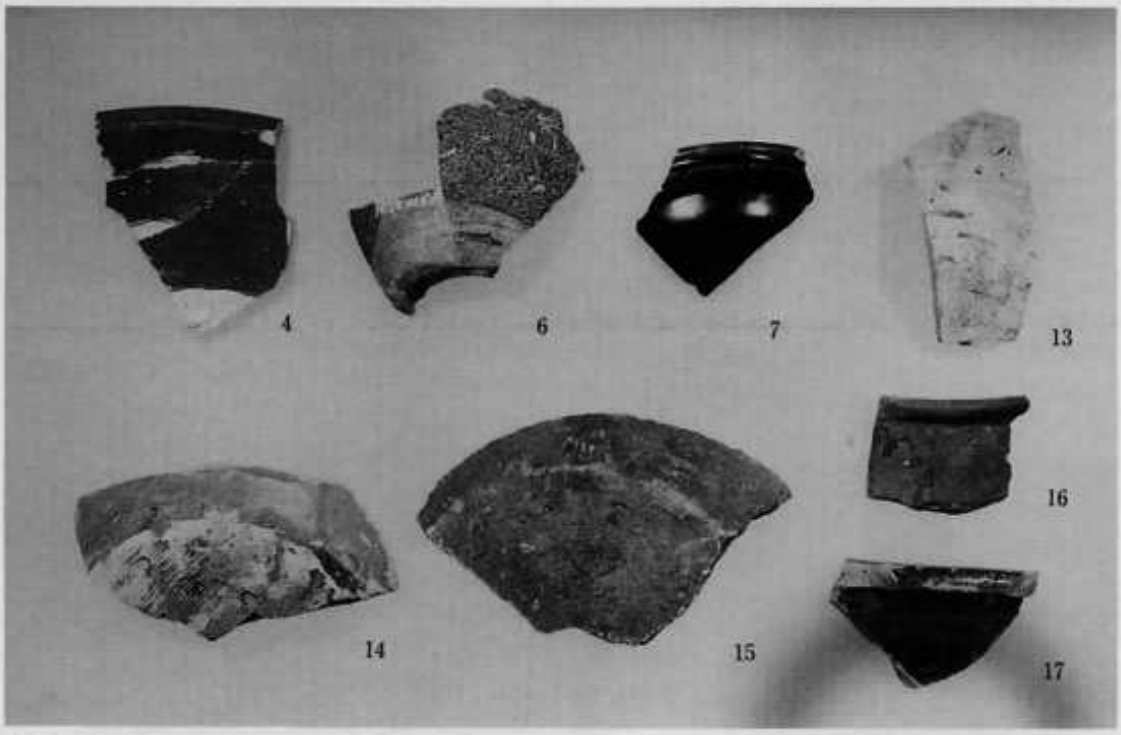


5

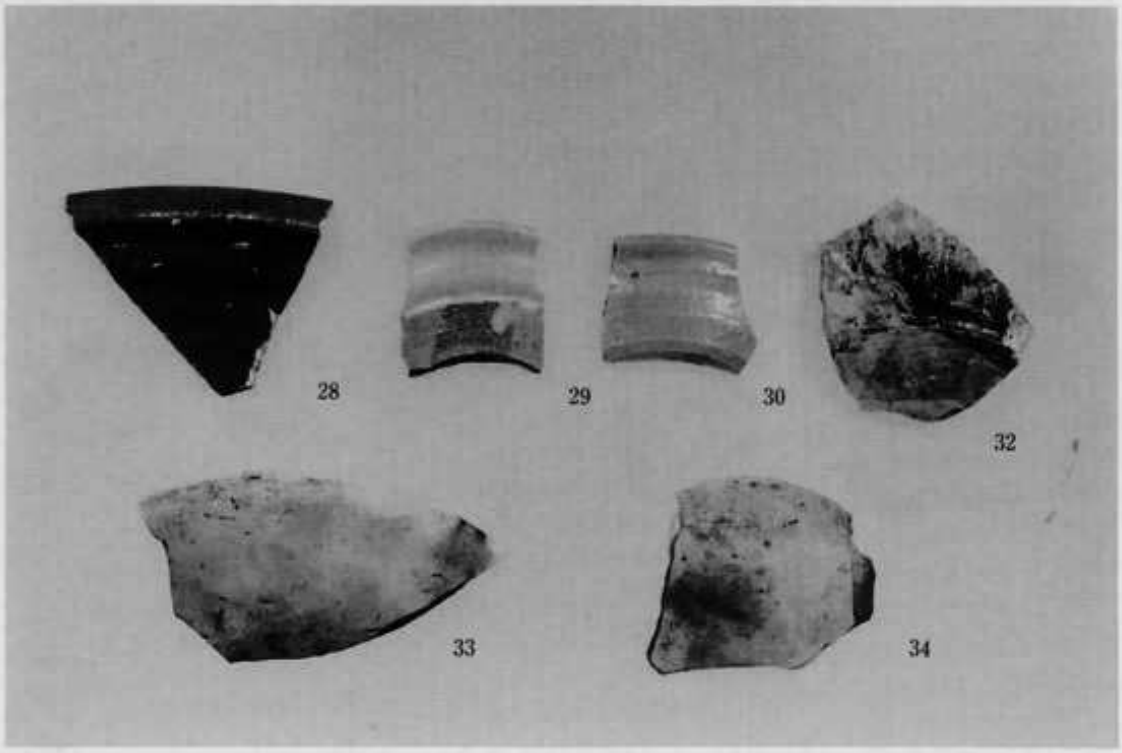


6

図版 12　出土遺物(5)

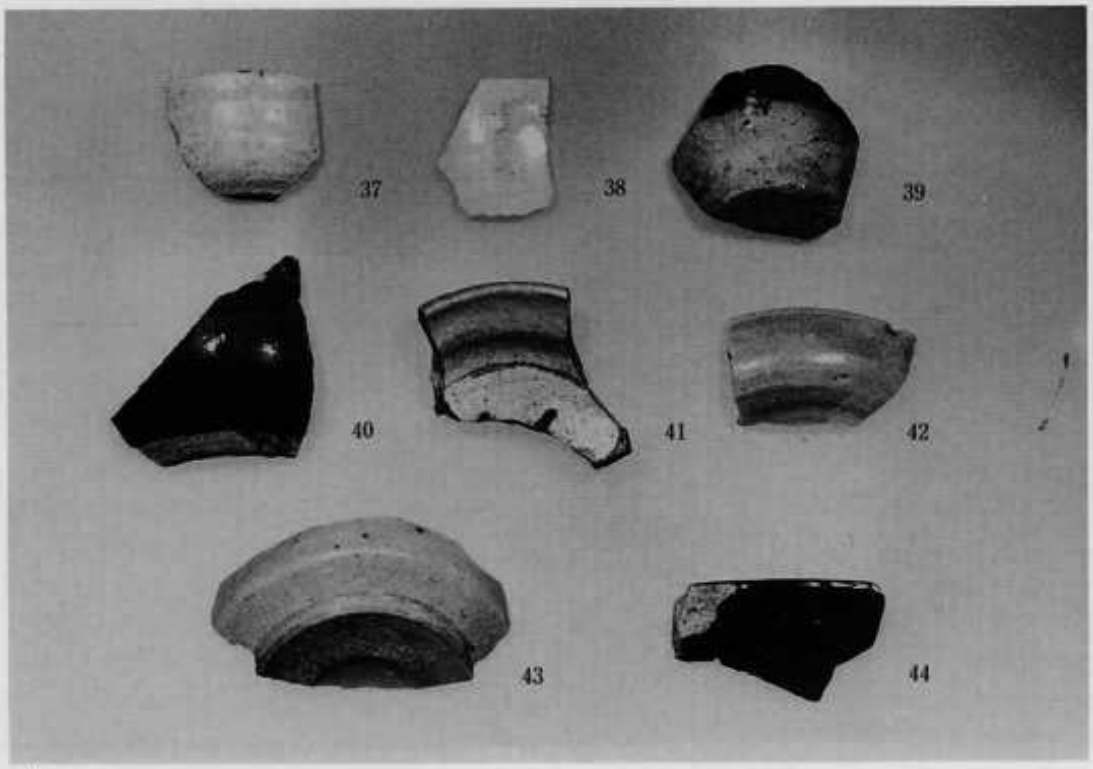


1

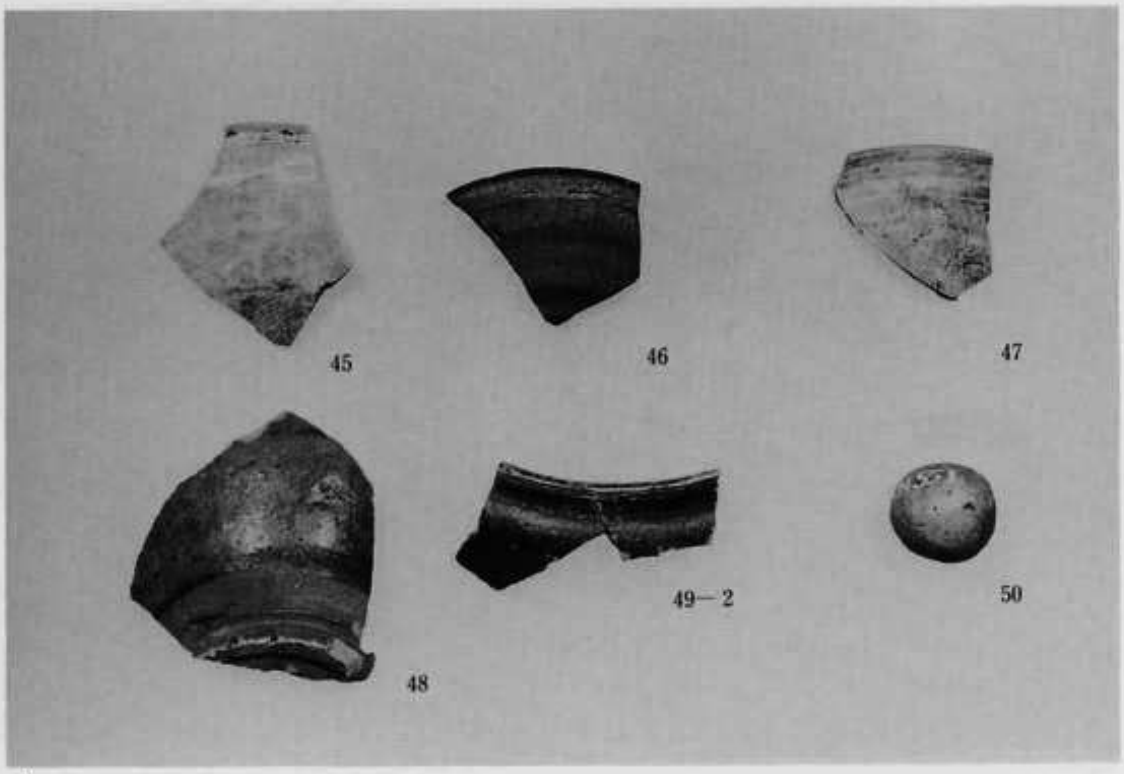


2

図版 13　出土遺物(6)

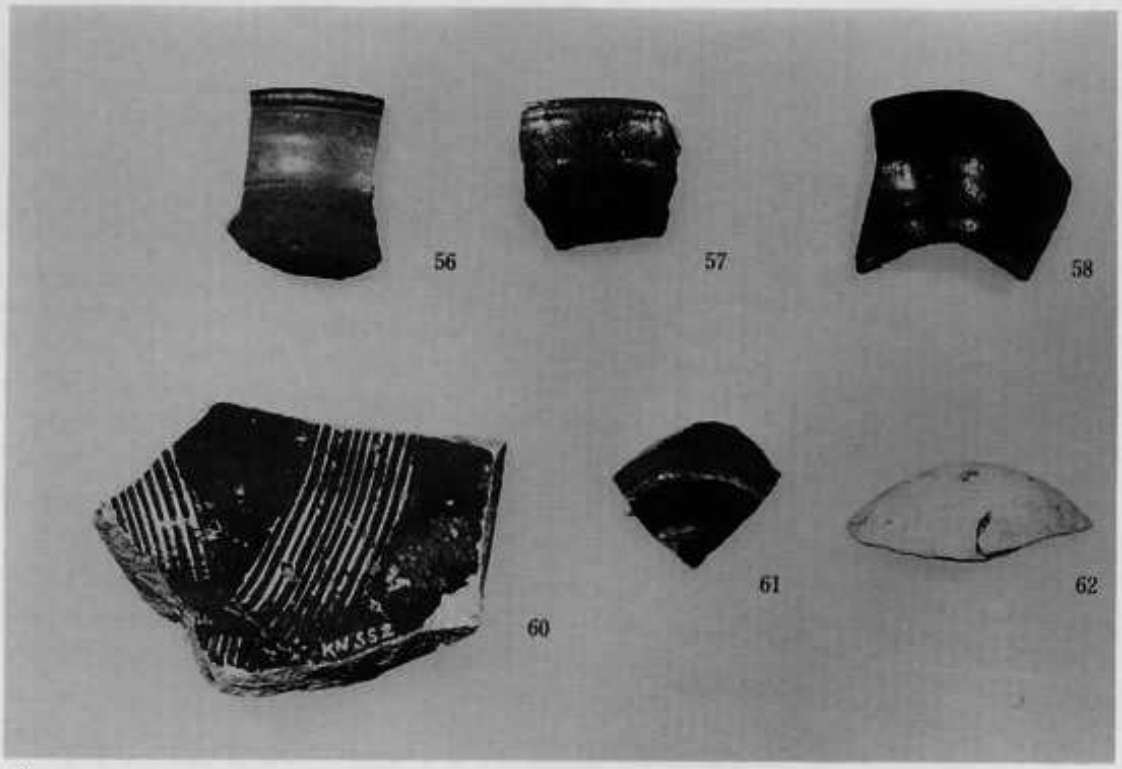


1

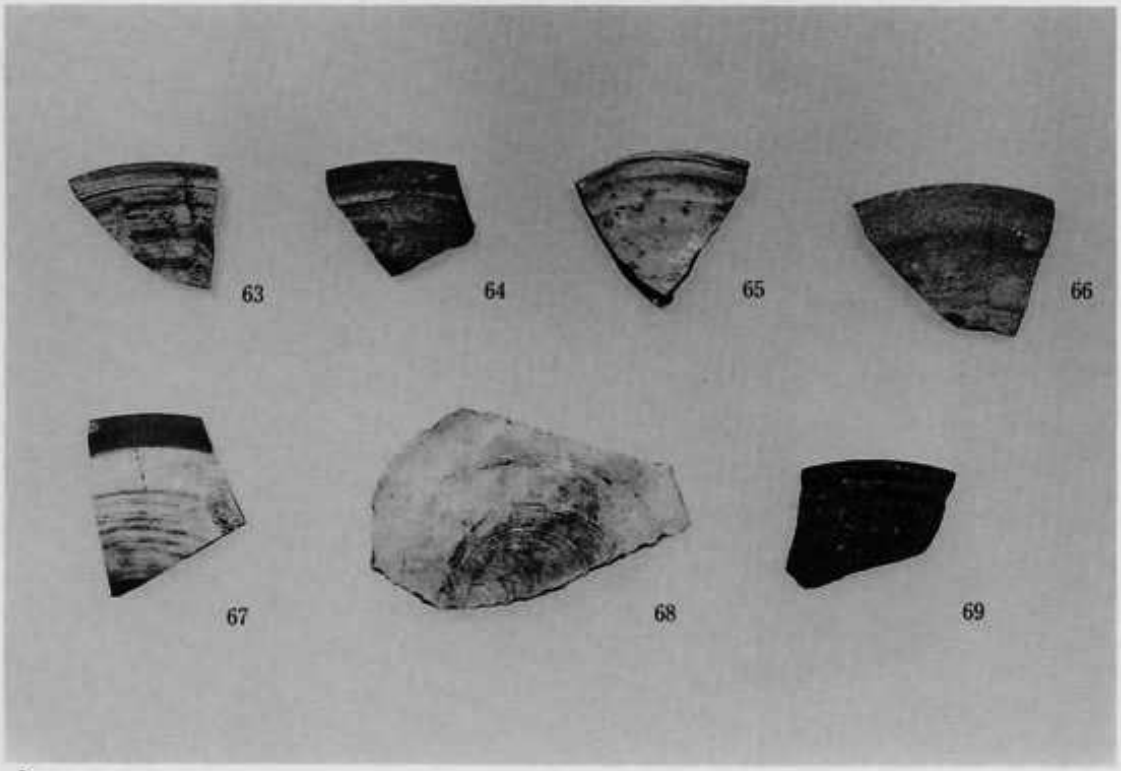


2

図版 14　出土遺物(7)

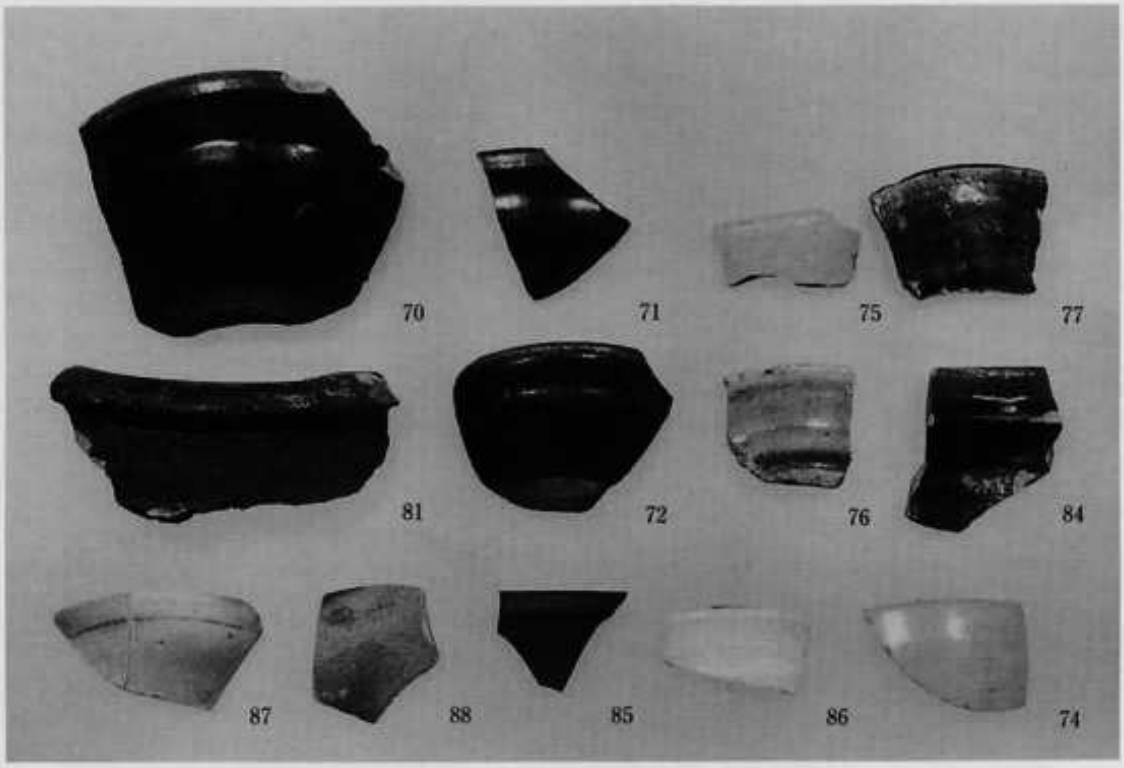


1

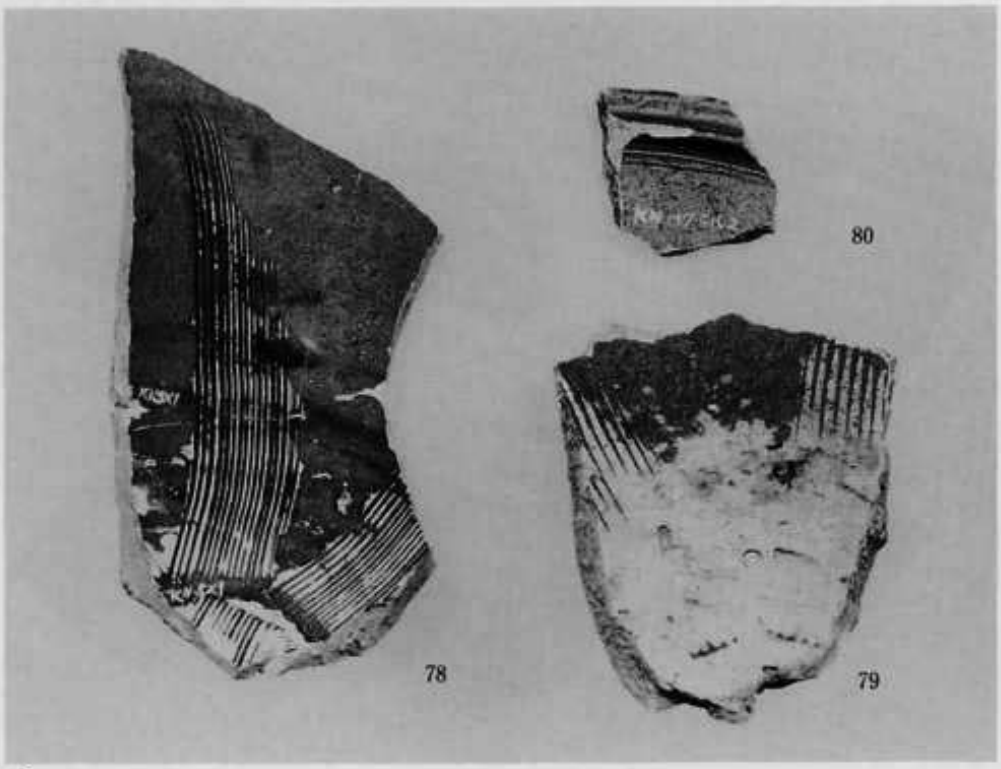


2

図版 15　出土遺物(8)

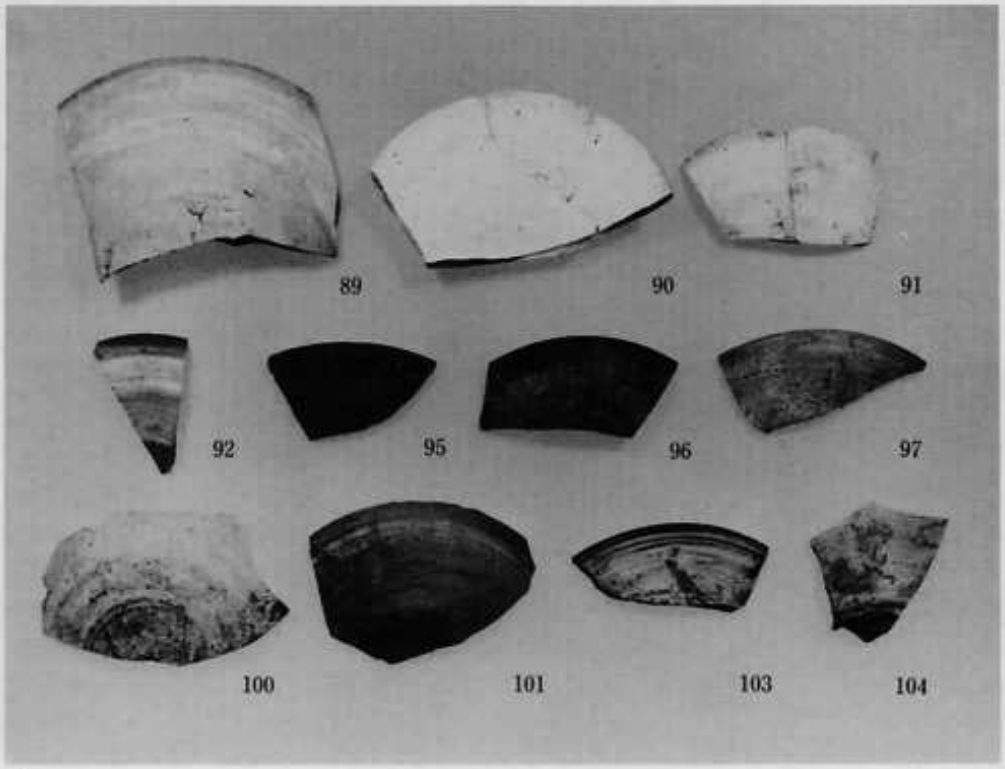


1

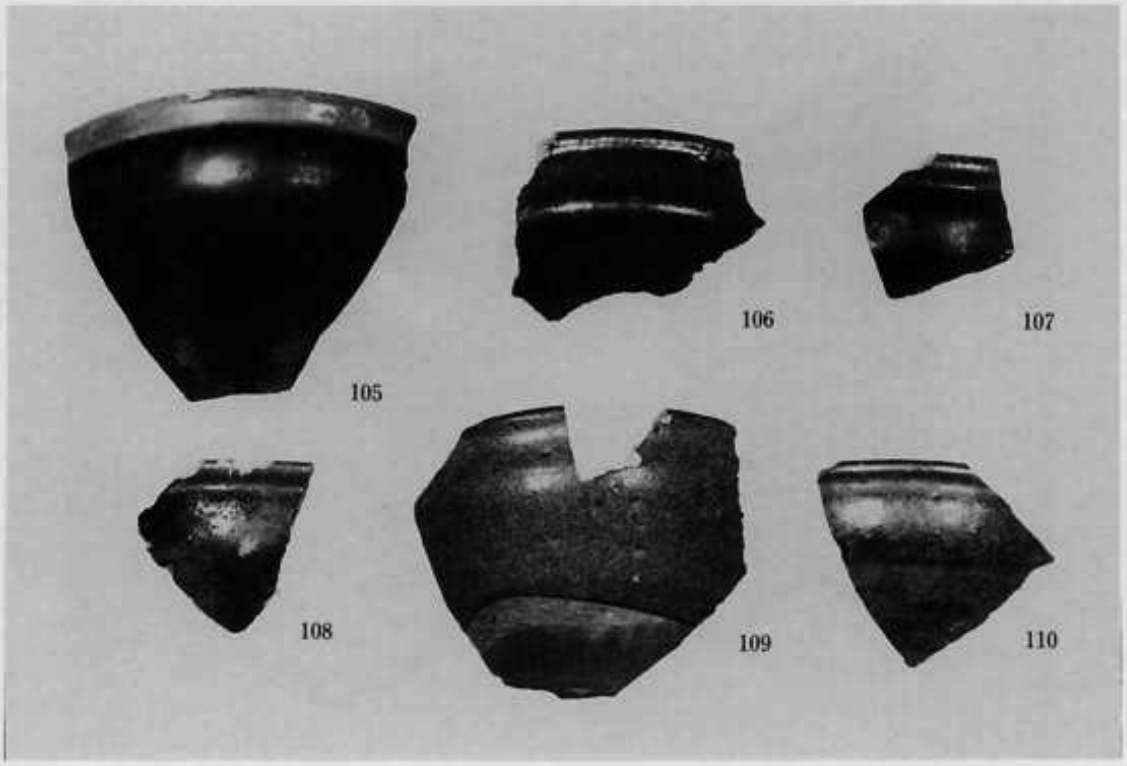


2

図版 16　出土遺物(9)

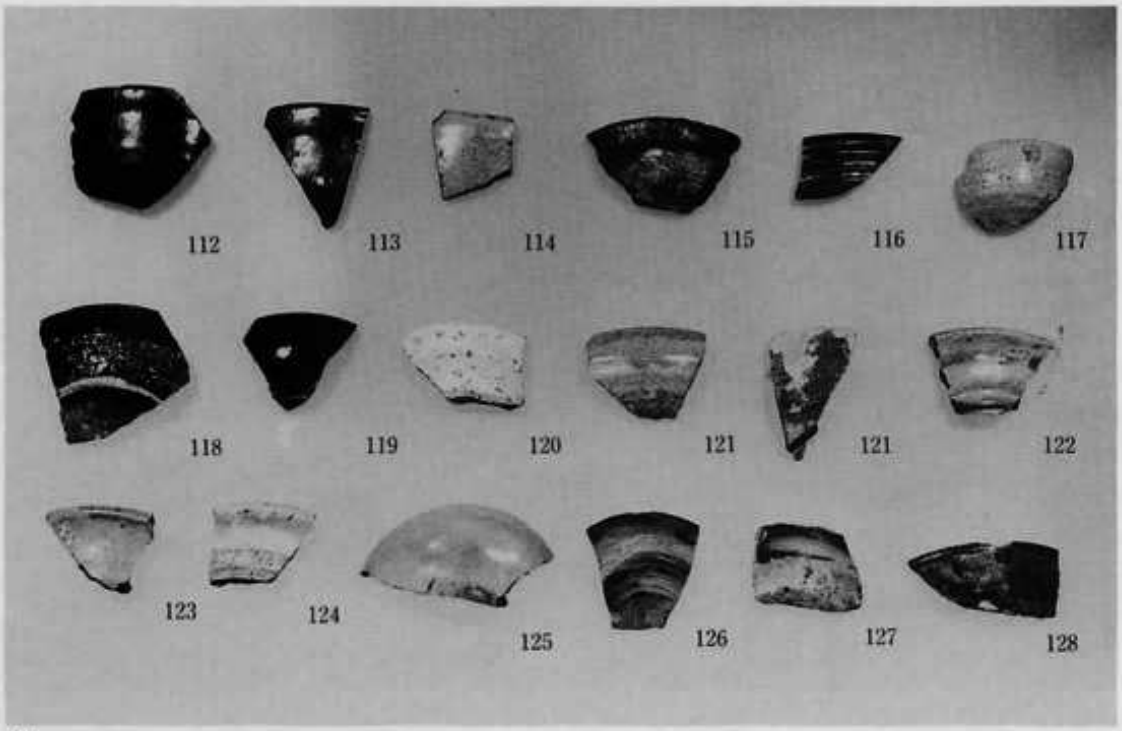


1

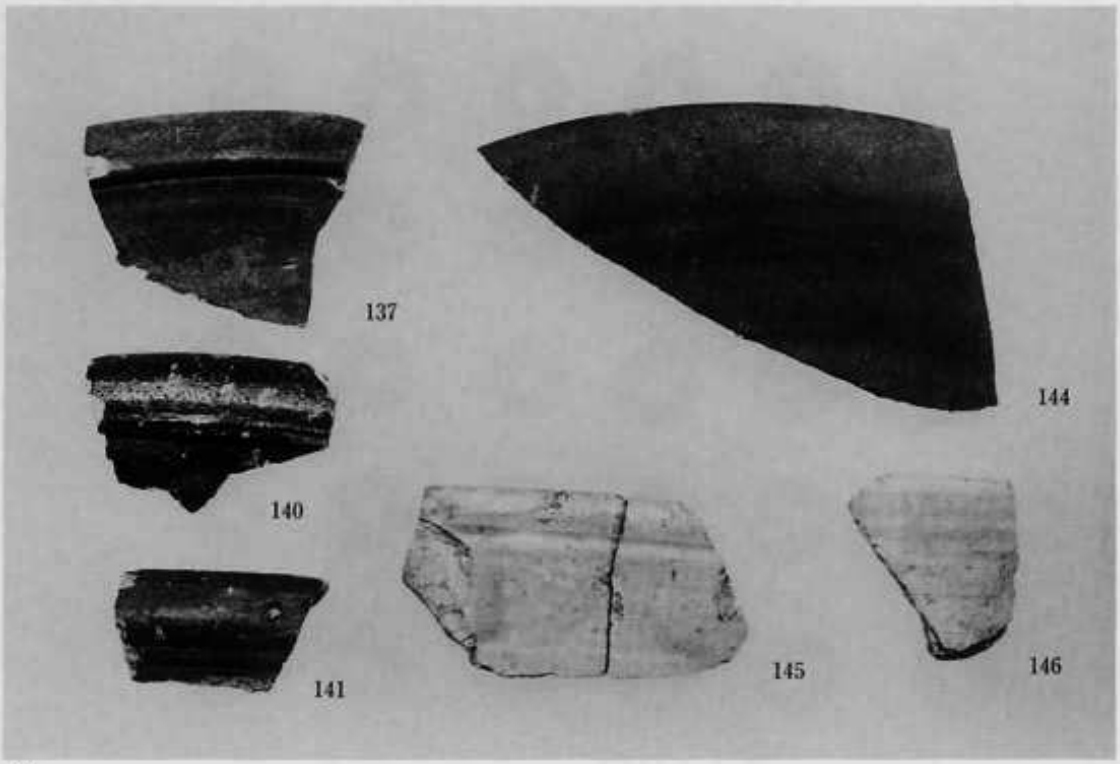


2

図版 17　出土遺物(10)

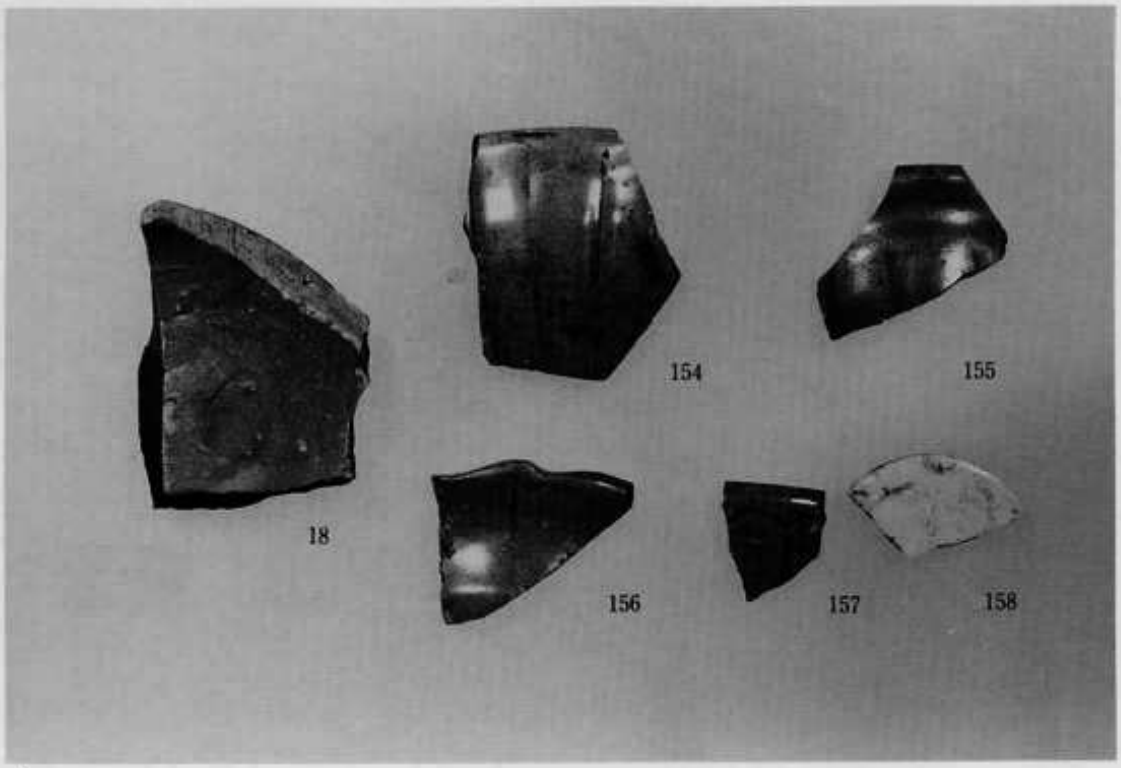


1

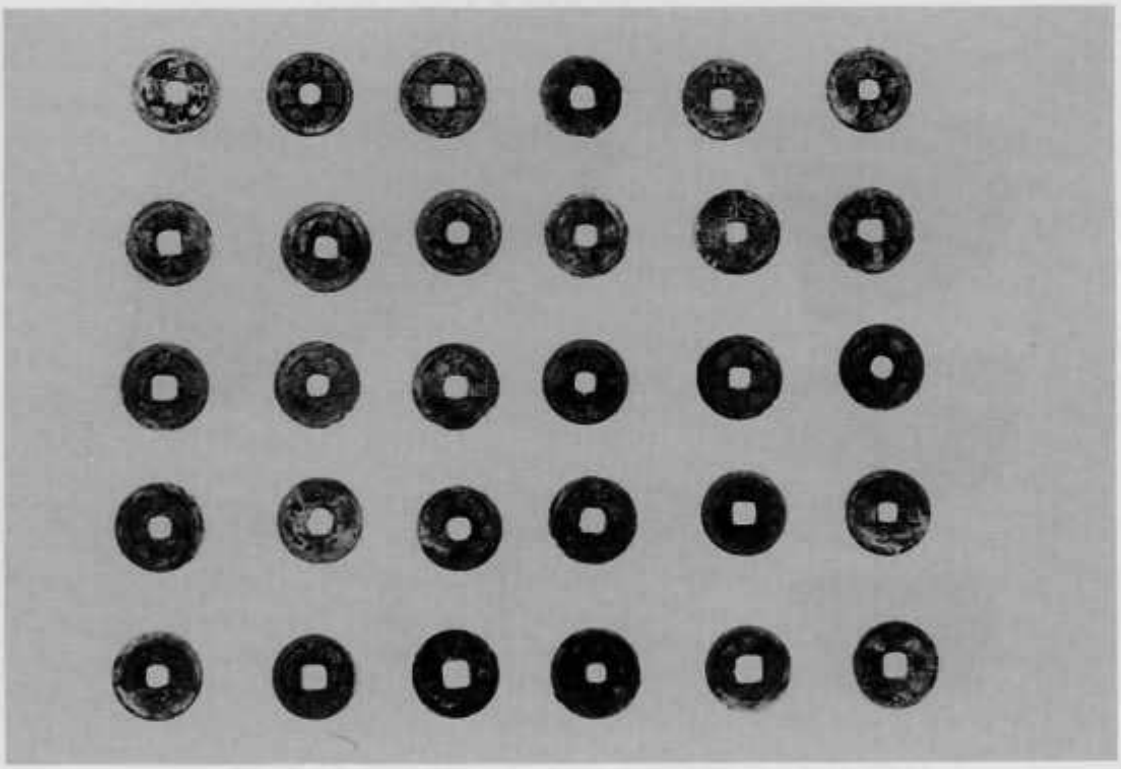


2

図版 18　出土遺物（11）



1



2

金 屋 遺 跡

「大清水土地区画整理事業」に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月31日発行

発 行　可児市教育委員会
〒509－02
岐阜県可児市広見1－1
電話(0574)－62－1111
印 刷　株式会社 太 洋 社